

Ryo Nishino  
西乃リヨウ  
Illustration  
藤ちよこ

少魔

救女

うをの

Goodbye to Fate

Presented by Ryo Nishino  
ill. Fuzichoco

も

の

## 前章

がらんとして広い山道を、辻馬車<sup>つじ</sup>がからからと音を立てて進んでいる。

キャリッジは上等な布張りの椅子<sup>いす</sup>で、車窓は貴重なガラス製。天蓋<sup>てんがい</sup>には房飾<sup>ふさ</sup>りがちりばめられていて、どこぞのお貴族様でも乗りこんでいそうな立派な威風だ。

しかし、乗客である二人組の男女は、およそ貴族や王族とはほど遠い形貌<sup>けいぼう</sup>をしている。

男のほうは薄黒色の地味なマントに些末<sup>さまつ</sup>な長剣をたず

さえ、女のほうは——馬車で雪深い北方へ向かってい  
るといふのに——紅梅色こうばいのワンピース一枚だけをはおり、  
小綺麗こぎれいな濃緑色のうりよくしよくの短剣を腰にさしている。

この二人、親子ほど年は離れていないし、夫婦という  
には少女のほうが若すぎる。おそろくまだ十五にもな  
っていないだろう。顔立ちや髪色がまるでちがうので兄  
妹にも見えない。御者も、彼らに金で雇われた護衛も、  
無粋ぶすいなことをわざわざねたりはしないが、妙な二人  
組だと、内心いぶかしんでいるにちがいない。

「ねえ、ウィズ」

山道をいくらか走ったところで少女——アローンがお  
もむろに口をひらいた。マントのそでをくいと引っぱ

つて、上目づかいに男を見あげる。

「故郷こきょうに帰って、お母さんたちに会ったら……最初になにを話したらいいと思う？」

男——ウィズは腕を組んで、考える仕草をした。

彼女の置かれた境遇をかんがみれば、おいそれと答えられる内容ではない。帰郷自体が七年ぶりに、離ればなれになつた理由が理由だ。年相応そうおうの娘らしく、明るくほがらかにただいま、というわけにはいかないだろう。

「そうだな……思うに」

つぶやくと、アローンがぐいと顔を近づけてきた。大きな琥珀色こはくの瞳ひとみが、日の光を反射してきらきらとかがやいている。じつとウィズを見つめている。期待されてい

る。頼られている。ウィズは答えた。

「第一声がどうとうよりも、手土産みやげとかがあれば、それをきっかけにして話を広げやすいかもな」

「手土産……」

アローンが、あごに手を当ててうーんとうなり、  
「たとえば？」

「故郷で待ってる家族の、好きなものとか」

「好きなもの、か」

「ああ。でもなにより一番はまず、お前の元気な姿を見せてやることじゃないか」

少女の瞳の色がゆれた。ウィズは真正面から彼女を見つめかえし、真剣な表情で言った。

「たどえ過去になにがあつたとしても、家族の再会を喜ばない人間はいないよ」

「そう、かしら」

「そうさ。きつと、絶対に……そうだよ」

「うん……そうね。ありがとう」

得心がいったのか、アローンは小さくうなずき、窓の外へ目をやった。季節はすでに、秋のおわりにさしかかっている。木々の葉はとつとつに枯<sup>か</sup>れ落ちてひさしく、窓越しに映る景色は、貧相な枯れ木と枯れ枝ばかり。まもなく馬車は、本格的に北方地方へと足を踏みいれる——  
故郷は、近い。アローンは腰の短剣をそつとなで、それからぎゅつとにぎりしめた。

その所作しよやくが示す意は、どこにあるのだろうか。  
ウィズはまだ、彼女のすべてを知っているわけではな  
い。

けれど彼女の――はかなげに遠くを見つめる瞳の奥底  
に、燃えるような決意が宿っているのを見て、あらため  
て思った。

どうかアローンの願いがかないますように。  
そしてあらためて胸に刻んだ。

自分ができる最大限の力で、彼女を支えてやりたいと。  
「おっ、降ってきたな」

御者がぽつりと言った。つられて車窓に視線をやると、  
空の上からちらちらと、白い結晶が舞い落ちてくる。

アローンの故郷——スノーウェルは、もう近い。

## 第一章 名乗りを憚る者

コーズ大陸の王都フインは、歓喜と熱狂の渦につつまれていた。

いかめしい騎士たちの行進のあと——王紋入りの豪華な馬車が、二頭の白馬に率いられてゆったり姿を見せると、割れんばかりの歓声があがった。街中のあらゆる人間が中央通りに殺到し、パレードの主演に熱烈な視線を送った。何千何万という人々が喜びの声をあげ、手をのばし、少しでも近くで彼女にお目にかかろうと身を乗り

だした。

「姫様、姫様——！」

うるわしきリルメリア姫が群衆に向かつてにこやかに手をふると、人々はますますわきたって歓喜した。そして彼女が五体無事で帰ってきたことを心の底から安堵あんどした。

悪辣あくらつな伯爵はくしやく公が引き起こした反乱の鎮圧ちんあつと、公こうにさらわれた王女殿下リルメリアの帰還を祝うこのパレードは、王城の大門から出発して城下を縦断し、二キロ半先の南門まで続く。長い長いパレードだ。だからスケジュールどおりに完遂させるためには——警備上の観点からも——いちいち馬車をとめて、というわけにはいかず、そ

のためいくら馬車のスピードが遅かろうと、群衆ひとりひとりが姫様の姿を見られるのはほんの一瞬、数秒だけだった。それでも彼らは大変に満足した。その一瞬でほとんど一生分の眼福がんぷくを得たと、そういう気分にはひたることができた。

大門近くの特等席にいち早く集まった人々は、姫様が通りの向こうへ消えていってしまったあとも、姫の無事を喜び合い、口々に彼女の美しさを賛美した。

彼らが解散せずその場にとどまっているのは興奮冷めやらぬからでもあったし、まだもうひとつのメインイベントが残っているからでもあった。城へ続く大門は、い

まだ大きく開けはなたれたままでいる。もうすぐあそこから英雄が出てくるのだ。伯爵公の悪事をくじき、公の私兵たる五百人の大盗賊団を壊滅させて姫様を救いだした四人の英雄たちが。

「ああ、早く来ないかな」

「きつともうすぐだ、もうすぐだよ」

群衆の最前列で、子供たちがはやるように言った。同じ年代——十二、三歳くらいの少年少女が数人かたまって、いまかいまかと気をはやらせている。

「ねえ、四人の中で誰だれが好き？」

一人の少女がみなに問いかける。

「あたしは剣聖けんせいキルシュ様。女性なのにあんなに強くて

凜々しい方、見たことないもの」

「俺はプラリネかな。宮廷一等魔術師でいろんな魔術がつかえて空まで飛べるって話だぜ」

「ものすごい美人でスタイルもいいものね」

「ば、ばか、そういうんじゃないよ。俺は純粋に憧れて  
……」

「はいはい」

「ぼくはユフィール様。ユフィール様ってぼくたちとあまり年の変わらない女の子なのに、ルーン教ずいこう随ずい行こう神官として英雄様の世界を救う旅に同行してるんだ、本当にすごいと思うよ」

それぞれが思い思いの言葉をのべ、だが最後に全員が

口をそろえてこう言った。

「でもやっぱ一番は英雄アルルクル・ディーン！」

「お前ら知ってるか、この話」

少年の一人が、仲間たちに訳知り顔を向けた。

「英雄様のパーティーってな、最初は四人じゃなくて五人だったんだぜ」

「はあ？」「なにそれ初耳だよ」「本当なの？」

「本当だよ、最初のころはキルシュ様の他にもう一人剣士がいたんだ。名前は……えっと、なんだっけ……」

言葉につまると、みなが一斉にうさんくさそうな顔をした。少年はあわててつけたした。

「本当だって、本当に五人いたんだよ。名前だってもう

少しで思い出せそうなんだ、ここまで出かかっている。たしか英雄様と同じ村の出身で、ええっと、たしかワイ……グア……」

わっと地鳴りのような歓声が巻き起こり、少年の声をかき消した。

四人の英雄がついに姿を現したのだ。パーティー五人説を唱<sup>とな</sup>えていた少年も、早々に自説をほうり捨て、きさらとかがやく憧<sup>しょうけい</sup>憬の眼で英雄一行を眺めた。

英雄たちはみな徒歩だった。

本当は姫と同じ馬車で彼女の隣に……という予定だったところを、自分たちには似合わないしおそれおおいという理由で辞退を申し出たらしい。そういうかざらない

態度と謙虚けんきよさが民心をよりいつそう惹ひきつけた。彼らへの歓声は、もしかしたらリルメリア姫に向けられたそれより大きく力強かつたかもしれない。

まず三人の女性陣が、肩を並べて現れた。

右手のプラリネ・オルトリンは、自慢びぼうの美貌と肉体を見せつけるように腰をくねらせて行進し、薄手のヴェールをひらひらとふつて声援に応えていた。露出の多い絹きぬの衣装は宮廷一等魔術師というお堅い肩書に似合わない軽薄さだが、そのギャップが彼女の魅力をいつそう引き立てている。彼女が投げキッスをすると、男だけでなく同性までもメロメロになった。

中央のキルシュ・ラムヒルドは終始むっつきりとしてい

た。かざりけのないサテンのいでたちに騎士剣だけを帯び、隙すきのない身ごなしと、生真面目きまじめな顔。どんな声援や称賛を受けても端整な顔立ちはにこりともせず、唇はかたく真一文字まいちもんじに引き結ばれたままだった。しかしその愛想のなさは少しも嫌味いやみに映うつることはなく、むしろおもねらない質実剛健しつじつこうけんさこそがキルシュという女性の本質なのだ。人と人々に感じさせた。彼女が無愛想を貫くほどファンは増えた。

左手のユフィール・ローズヴァイセにはひとときわ「かわいー」という声が向けられた。円熟した美しさをはなつ隣の二人に比べれば、たしかにユフィールはまだ開化前の花のつぼみといえた。背がちよこんとして小さ

く、ルーン教神官を示す純白のローブも多少だぼついている。年齢<sup>よわい</sup>十五になっただばかりで、こうした華やかな場に不慣れなのか、熱い声援を向けられてもどうしたらいいかかわからず、ちよつと手をあげかけて恥<sup>は</sup>ずかしくなったのか、真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>な顔でうつむいてしまった。人々はその純真さと無垢<sup>むく</sup>さに大いに心洗われた。

そして彼女たちに少し遅れてやってくるのが、英雄アルルクル・ディーン。右へ左へとせわしく顔を動かして、一人でも多くの声に応えようとふるまっている。十八歳の立派な青年だというのに、彼の笑顔はあどけない少女のように愛らしく、見る者の心すべてにあたたかみと思<sup>しれん</sup>恋の念を抱かせた。ぱつと見では、とても数々の武功

を打ち立て、十数におよぶ障門——魔物の発生源となる黒い渦——を封印し、あまつさえアコロシア大陸において世界を滅ぼすという魔人の一匹を討伐した今代英雄には見えまい。しかし彼の功績はすべて事実だ。その名声は、いまではこのコーズ大陸を超えて、七つの大陸中にとどろきわたっている。

英雄たちは徒歩でゆっくりゆっくりと行進していたので、群衆は心ゆくまで彼らを愛でることができた。わきたつ熱狂はいつまでもやむことなく、王都フィンの街中に鳴り響いている。

そんな——渾然一体となつた民衆の中に一人だけ、ひどく場ちがいな行動を取る人間がいた。薄黒色の質素な

マントをはおり、目もとが隠れるくらいフードを目深にまぶかかぶつた——男。この男だけが唯一にして一切、英雄たちに関心をはらっていないなかった。ちらりと首をめぐらせることすらせず、群衆のあいだをぬうようにして、ひたすら北へと歩みを進めていた。傍目はためには罪人の逃亡のように見えなくもなかったが、みなアルルクル・ディーンを追いかけるのに夢中で、彼に注意を向ける者などただの一人もいなかった。

ようやく人混みを抜けたフードの男は、がらんとした街路に出た。通りの左右に連なる店はすべて戸がしまり、往来おうらいに人影はまったくない。背後の熱狂が嘘うそのようくうきよな空虚さだ。

この光景こそが自分に似つかわしい、と男は思った。なじみの場所へ帰ってきたように安堵あんどがこみあげた。街路をしばらく進むと、一気に視界がひらけた。

街と外界の境目——北の城門に到着したのだ。城門周辺もまた閑散としていた。見張り台の上に兵士と、数人の門兵がいるだけで、行商人が列をつくって順番待ちしている。普段の光景とは似ても似つかない。門に近づいていくと、兵士の一人が信じられないという顔で男を見た。

「あ？ いま出ていくのか？ パレードの真っ最中だぜ」

「だからだよ」

男は短く答えた。

「おかげでこうしてスムーズに街を出られる」

兵士が眉間みけんにしわを寄せた。どうやら気を悪くさせてしまったようだ。国王お抱えの兵士だとて姫殿下に直接お目にかかる機会などまずないし、おまけに本物の英雄まで見られるのだ。おそらく門番の仕事がなかったら中央通りへすっ飛んでいってパレードに参加したいのだらう。

「身分証」

と、兵士がぶつきらぼうに要求した。男はマントの下からギルドの傭兵登録証を取りだして、手渡した。

「名前は」

それはいま渡した登録証に書いてあるのだが、形式に従い、男は答えた。

「……ウイズ・ヴァイス」

フードの男——ウイズはつとめて淡々と、己の名を名乗った。憚りし名を。

兵士はふんと鼻を鳴らしてウイズの顔を一瞥し、登録証を投げかえした。

「行っていいぞ」

どうやらこの兵士はウイズの過去を知らない人間のようだ。ほとんどがそうであるを知っているはずなのに、つい自意識過剰な態度を取ってしまう。どうにもしがたい悪癖だった。ウイズは先の非礼を詫びるように軽く会

釈して、兵士の横をとおりにぬけた。

民衆の歓声が波のように伝播<sup>でんぱ</sup>して届いても、彼がパレードのほうをふりかえることは、最後までなかった。

× × ×

ウィズ・ヴァイスは少しだけ後悔<sup>こうかい</sup>していた。

逃げるように街を出たのはいいが、思いのほか路銀がきびしいことを思い出したのだ。

とはいえあのまま王都にとどまって傭兵<sup>ようへい</sup>仕事をする

——という選択肢はありえない。そもそも本来ならもつと早く出立<sup>しゅったつ</sup>するはずだった。万<sup>ま</sup>一にも英雄たちと鉢合<sup>はちあ</sup>わ

せなどしないように。

けれど傭兵ギルドの混雑と、予想以上の人混みにはばまれて、けっきょくパレードのごたごたに巻きこまれてしまった。それが理由のすべてで……未練が歩みを弱めたからだとは、思いたくない。

ぶんと小さく首をふって、ウィズは気持ちを切りかえた。考えるべきは、過ぎたことよりこれからのこと。ここから北へ向かうなら、一番近いのはカルマルドになる。

カルマルドは北のかんらくがい歓楽街エニドマと王都フィンとをつなぐ街道の中継地点で、当たり前だが王都とは比べようもないほど規模は小さい。ギルドをたずねてもすぐに仕事にありつけるかはあやしいし、もしあつたとしても一人

では受けられる案件がかなり制限されるだろう。なら酒場で自分と同じようなあぶれ者に声をかけて——とそこまで考えてから、あれこれ先のことを思案してもしようがない、と思った。気を揉もむなら、町に着いてからいくらでもすればいい。

ウィズは頭のフードを取りはらい、あらためていま歩いている街道に目を向けた。パレードの真まっ最中なので往來は数えるくらいだが、さすがに王都お膝元ひざもとだけあつて、このあたりの土地は整備がじゅうぶんに行き届いていた。舗装された石置いしだたみはとても歩きやすく、馬車が容易にすれちがえるくらい幅広で、地平線に沿って衛兵が在駐する駐屯所をいくつか目にすることもできる。

しばらく道なりに進んでいくと、奥のほうで舗装路が二股またにわかれていた。

真まっ直すぐのびているのがカルマルドに続く道。では右折路は……なんだっだろうか。方角的には北東となり、大陸全体で考えると一年の半分近くが雪に埋もれる豪雪地帯の印象が浮かんでくる。コーズ大陸は右上——つまり北東の土地がひよろ長く上へ上へとのびた形状になっているため、実質的な最北端は、そのひよろ長い土地の端っこだ。小さな村もあつた気がする。名前はたしか、白銀の村スノーウェル。

それもいいだろうか、とふいに思う。最北端のスノーウェルへ行くかどうかはともかく、そちらの進路を取る

のも悪くない気がした。

しかし、右折路をまじまじ眺めてみると、石畳の舗装路が途中でぶつ切れているのに気づいた。道がない。いや、足の長い雑草ざっそうを刈り取ることでもかろうじて道としての体裁ていさいを保っているでこぼこ路が、右斜め前方に向かつて続いている。しかも、その先は森だった。抜けるのに一苦労ではすまなそうな分厚い森。まだ日は高いが、森で野宿するほどの剛胆さをウィズはとても持ち合わせていない。

カルマルド方面から、ちようど巡回中の衛兵がやってきたので、

「この森って深さはどのくらいなんだろう？」とたずね

た。

「見た目ほど深くも複雑でもないぜ。いますぐ出発すりゃ、日が落ちる前に抜けてメンザスの町に着くだろうよ」

ウィズは礼を言っつて衛兵を見送った。

（一長一短だな、北へ行くならどっちでも）

どちらが正解ということはない。なら——  
知らない町にまっさらな人間関係。

見知らぬ土地へ足を向けるのもいいかもしれない。

少し肌寒はださむくなつてきたな、とウィズは森を歩きながら思った。

それは大陸の北側へ足を踏みいれたからでもあるし、時節のせいでもあった。そろそろ秋から冬へ移り変わるうとしていている。木立の続く森は、この時期特有のわびしさせきごしょうしと寂寥せきごしょうしがあつた。広葉樹の葉は色素を失い、微風かほにゆられてかさかさとな音色かなを奏かなでている。乾かわいた土の地面には落葉が散らばり、踏みつけるとあつさりちぎれてばらばらになつた。道らしい道はとつくになくなつてひさしいが、地面をよく見るとところどころにうつすらわだちの跡あとが確認できるので、一応は街道にちがいないらしい。日はすでに西にかたむきはじめている。衛兵の言うとおりならそろそろ森を抜けられるはずだ。もう少し足を速めようかと思案したそのとき、かさり、

と葉ずれの音がした。

ウィズは足をとめて、周囲を見まわした。いま風はほとんど吹いていない。獣けものだろうか。道中、小動物や鹿しかは幾度か見かけている。

「きゃっ」

若い女の悲鳴が、木立こだちの奥から響いた。衝動的にウィズは駆けだしていた。腰の長剣をいつでも抜けるよう意識しつつ、声のしたほうへ急行する。

魔物の可能性はかぎりなく低い。王都周辺は、ルーン教神官や英雄らの活躍によってあらかたの障門しょうもんがすでに封印されている。

だからこの状況で考えられるのは、魔物や獣よりもむ

しろ——

「おら、てめえおとなしくしやがれ！」  
人間だ。

男が三人と、若い女が一人。男たちは落葉に溶けこむようなボロ布をまとい、全員が腰から剣をさげていた。まちがいになく野盗か追いはぎの類たぐいだろう。対する女のほうは——たしかに若い女にちがいないのだが、

「本気かよ。まだ子供じやないか」

ウィズはあきれ声を出した。紅梅色こうばいのワンピース・ドレスを身につけ、木の幹によりかかっているのは、どう見ても十代前半……最初のめぐりも迎えてなさそうなあどけない少女だった。状況のわりに少女は落ちついて

いるように見えた。泣きもわめきもせず、無表情でじつとかがたまっていく。こわくて動けなただけかもしれない。その沈着さの他には髪の色が目を引きいた。色素のうすい白髪と、琥珀色の瞳。奇抜というほどではないが、金茶や黒系が一般的なこの大陸ではいささかめずらしかった。

第三者の乱入に気づいた少女は、まん丸として大きな目を何度かぱちくりさせたと、「助けてっ」とさげんでウイズのうしろにまわりこんできた。

それを見た男たちが無言で目配せし合い、一斉に剣を引き抜く。恫喝も威嚇も動揺もせず淡々と剣を抜いたのは、この手のシチュエーションに慣れている証拠だ。おそらくウイズを値踏みして、くみやすしと判断したの

だろう。じっさい、その判断は正しかった。そこらのちんぴら相手に一対一ならまだしも、こうして複数人に取りかこまれたら、とても無傷で切り抜けられる自信はない。

ウィズは「おい」と、背後の少女に視線を向けて、ささやく。

「もし俺になにかあつたら気にせずすぐに走って逃げろよ」

自分が負けて殺されるだけならともかく、己の弱さのせいで少女に害がおよんではたまらなかつた。殺されるなら殺されるでおとこ困こくらいにはなれるだろう。

「……」少女は無言でなにか考えるような顔をしたが、

意図が伝わったのか、ゆっくりとうしろに身を引いた。

ウィズはまず、一番手近な男に向かつて突進した。先手必勝。剣の根本——刃はまち区めがけて強烈な一撃をみまう。こころみは成功した。衝撃に耐えかねて、剣が男の手から落ちた。無防備になつたところへ蹴りをたたきこんで、地に伏せさせる。それ以上の追撃はできなかつた。残る二人が同時に斬りかかってきたからだ。

一人目のふりおろしをうしろに飛んでよける。

その着地点めがけて二人目の刃やいばが飛来した。胴をねらつた横なぎの一撃。タイミング的にかわすことはできなかつた。すばやく剣をかかげて、どうにか刀身の腹で受ける。直後、ぴしと嫌な音がした。

（やられた!? いや、まだなんとか……っ）

ウィズの剣は名刀でもわざもの業物でもなんでもない、そこらの店で十把じっぱ一絡ひとげで売っている安物の量産品だ。だからなるたけ斬り結びはさけねばならなかった。雑にあつかえばいつぽきりと折れてもおかしくない。

幸い今回は、ごくごく小さな刃こぼれで済んだらしい。まだ使える。まだたたかえる。剣をはじめいたので相手に、隙すきが生じていた。右手はしびれがあつたので、左で顔面を思いきり殴りつける。こぶしがあごを打ち抜き、男はひざからくずれ落ちた。

あとひとり。目玉を動かして標的を探す——いない。もうしろだった。

背後から突進されて、ウィズの中からだはあっけなく地面に押したおされた。垂直にふりおろされた長剣を、すんでのところでかわす。男は、深々と地面につきささった剣を無視して、ウィズに組みついた。剣を引き抜く隙をつこうと考えていたウィズは、体勢を立てなおせず、腹の上にのしかかれる。組みつかれたときの衝撃で剣を取り落としてしまっていた。手探りで地面を探るも、見つからない。くしゃくしゃと落葉のつぶれる音だけが空しく響く。

「手こずらせやがって、ぶっ殺してやる」

頭上で男があらあらしく言い、予備の短剣を逆手さかてにかまえた。

ああ、これはダメかもしれない、とウィズは直感した。左手は相手のももに押さえこまれ、右手は空手。いくら力をこめても足がじたばたするだけで、からだの位置をいれかえることもできない。絶体絶命。死の宣告。視線を左右に走らせると、少女の姿はなかった。どうやら無事逃げたようだ。安堵がからだを弛緩させた。

男の短剣が高々とかがげられ——一気にふりおろされる。

どすつと鈍い音が耳朶を打った。さされたのかと思っただが、そうではなかった。

「う……あ……」

頭上の——男の頭がぐらりとゆれ、力なく胸の上に着

ちてきた。そのままぴくりとも動かない。男は、白目をむいて気絶していた。

「あぶないところだったわね」

ふりそそぐ少女の声。逆光に照らされた白い髪が、六花りっかのようにかがやいて見えた。

「見ててびっくりしたわ。あなた、てんで弱いんだもの」

男のからだを横にどけて、ウィズは自由を取り戻した。声のほうを見あげると、半なかばあきれたような少女の顔があつた。その手には、血のついた大きな石がにぎられて  
いる。

「……助けてくれたのか。ありがとう」

ウィズは立ちあがって、礼を言った。その声音には照れも皮肉もなかった。ただ単純な謝意だけがこめられていた。じっさいひとりだったら、殺されていただろう。いわば彼女は命の恩人だ。剣を拾いあげて鞞さやにおさめると、少女が不思議そうに聞いてきた。

「ねえ、殺さないの？」

「お前、こいつらになにかされたのか」

それなら話は変わってくるが、少女はあっさり首を横にふった。

「特には。なにかされる前にあなたが来たから」

「じゃあいいだろ。ほうっておけよ」

あとの始末は憲兵にでもまかせればいい。それより気

になることがあった。

「ひとりなのか？ 他に連れは……」

「ええ、ひとりよ。メンザスの町へ行く途中だったの。そうしたらこいつらにいきなり道をふさがれて」

少女はあごに手を当てて、納得しかねるようにうーんとうなった。

「三人くらいならどついでにもなると思ったんだけどなあ」

「おいおい……」

「腕をつかまれたらふりほどけなかった。そのままあつさりこここまで引きずりこまれて……わたし、自分が思ってるよりずっと弱かったみたい」

小さなからだ、細い首、枝のように華奢な手足。強い  
と思える根拠がいったいどこにあるのか、ウィズには理  
解不能だった。

「とにかく大事なくてよかったよ」

「そうね、あなたが来てくれたおかげね。感謝するわ」  
ドレスの裾をつまんで、少女はうやうやしく頭をたれ  
た。細身ですらりとしているので、淑女の真似がおどろ  
くほど絵になった。しかし、その淑女は次の瞬間、みつ  
ともなく地面に両ひざをつけ、気絶している男のふとこ  
ろをごそごそあさりはじめた。

「……なにしてる」

「わかってるって、わたしだって殺すつもりなんてない

わ。迷惑料をもらうだけ」

「よせよせ、やめろって」

ウィズが制止の声をはなつと、少女はくるりと彼のほうを見あげて、

「あなた、なに？ 聖人なの？ それとも聖人気取りの痛い人？」

「俺たちの安全のためにだよ。金なんか盗んで諍いさかいの種を残したら逆恨さかうらみされちまう」

「襲あつてきたらまたやっつければいいじゃない」

「阿呆あほ。さっきの見てなかったのかよ、三人相手にあのざまだぞ。もしこいつらが仲間を引きつれて戻ってきたらどうすんだ、次は絶対死ぬぞ」

「か、かつこわるいなあ。死んでもお前を守ってやるくらい言えないの？」

「なに言ってるんだ、お前。はじめて会った他人に、どうして命懸けにやならんのだ」

辟易<sup>へきえき</sup>して言うのと、少女は不思議そうに小首をかしげた。そして琥珀色の大きな瞳でじっと見つめてくる。なんだから観察されているようで、ウィズは決まり悪くなつた。

「なんだよ」

「別に。ねえ、わたしお金がないの」

「だから？」

ぐーと低い音が、静謐<sup>せいひつ</sup>の森に響いた。少女の腹の音だった。

ウィズは鼻頭を指でもみ、観念のため息をついた。

「……わかったよ、近くの町まで送るついでに飯くらいくわせてやる。それでいいだろ」

「あら、送る上にご飯まで？　あなたってなんていい人なのかしら」

ほつぺたの横で両手をかさね、少女はにこりと微笑ほほえんだ。それからステップしてウィズの腕にからみつく。

「ま、そこまでお願いされたら断るのも野暮やぼよね。しかたないからお呼ばれしてあげる」

「現金なやつ」

「順応性が高いと言ってほしいわね。ああ、ひとつ言っておくけれど」

人さし指をびしつと立てて、

「下心でやさしくしても徒勞とらうよ。わたし、あなたのこと  
ぜんぜんタイプじゃないから。わたしはね、強い人が好  
きな。だからもしわたしに気があるっていうならわた  
しの——」

いつの間にか少女は虚空こくうに向かってひとりしゃべりし  
ていた。隣にいたはずのウィズはさっさと先に進み、背  
中がもうはるか小さくなっている。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ、ひどいやつね、置いて  
くつもり？」

ウィズの足はとまらない。少女は「んーもうっ」と空  
に向かって吠ほえ、

「待てっって言ってるでしょ、また襲われたらどうにするのよ、薄情者ー！」

ほっそりした両足で軽やかに地を蹴った。

## 第二章 北を目指す少女

メンザスの町は、外周がぐるりと水堀にかこまれている。

出入りの門にははね橋がかけられていて、夜は外敵の侵入を遮断する。これは魔物に長く苦しめられてきた、そのなごりだった。七年前に端<sup>たん</sup>を発<sup>はっ</sup>する障門<sup>しょうもん</sup>の出現は大陸のいたるところで巻き起こったが、コーズ大陸では特に南部と北東部の被害が大きかった。

魔物の大量発生がある程度沈静化したいまでも、はね

橋は変わらず使用され続けている。魔物だけでなく悪意ある人間の排除のため、そして魔人——あらゆる生命を灰燼かいじんに帰すきという魔の根元へデモンズの眷属けんぞく——の出現にそなえるようにして。

メンザスに入ったウィズと少女は、いきなり立ち往生おうじようした。二人ともこの町ははじめてだったのでどこになにがあるかもわからなかった。ウィズが適当な店に入ろうかと考えていると、少女が社交性を発揮して露店ろてんの主人から町の情報を聞きだしてきた。ウィズは彼女に誘われさそるまま、通りにつらなる酒場へ向かった。

地元の住人推薦だけあって店内は、まだ日が落ちきら

ない夕暮れのうちから盛況だった。二人が空いている席に腰をおろすと、さっそく注文取りの娘がやってきた。「とにかくたくさん持ってきて、とりあえずおすすすめを……そうね、三人前！」

少女が開口一番、満面の笑みで注文した。

檜かしのテーブルには、空になった皿がうずたかくつまれている。

少女ははじめ、どんな料理も素手すでで食べようとした。焼いたパン、大ガモのロースト、鮭さけのムニエルにスープまで。熱々のスープを両手ですくい、ぼたぼたこぼしながらすすった。それを目にした他の客たちは、あつけ

にとられるか、嫌いやな顔をした。亜熱帯レイヴロウ大陸の砂漠さばく地方では、食の恵みを全身で享受するためとかいう理由でなんでも素手で食べる民族がいるらしいが、ここはコーズ大陸で、そんな文化は浸透していない。さりげなく注意を向けると、少女は「そう、そうね。そのほうが人間的だわ」と言って、べとべとになつた両手をぬぐい、食器に手をのばした。ナイフもフォークも問題なく使いこなせるようだ。できるとしたら最初からやればいいのか、とウィズは心の中で毒づいた。

それにしてもよく食べる。枝みきたいに華奢きゃしゃなからだのいったいどこに、あれほどつめこめるのだろう。大の男三人分の食事をペろりつとたいらげて、まだ満腹にはな

らないなあとお腹なかをさすっっている。ウィズはうんざりした口調で言った。

「お前さ……つつしみて知ってる？」

「人の好意は無にするなっことでしょ。安心して。心ゆくまでおごられてあげるから」

遠まわしな嫌味いやみなど意にかいさず、少女はさらなる追加注文をした。

「おじさあん、わたしデザートが食べたい」  
カウンターから、でつぶりした店主の野太のぶとい声がかえってくる。

「デザートね。なら、果物くだものの盛り合わせはどうだ？」  
ぎよっとしたののはウィズだった。盛り合わせは、高級

酒をのぞけば店で一番値が高い。

「オレンジ、ウォーデン、干<sup>ほ</sup>しぶどうにマルメロよりどりみどり。特にここらの特産品、蜜<sup>みつ</sup>づけしたリングゴは絶品だぜ」

「いいわね、じゃあそれちようだい！」

軽<sup>かる</sup>やかに告げてから、少女は目の前のウィズがにがりきった顔でいるのに気づいた。

「どうしたのよ、そんな顔して。ひとり占<sup>じ</sup>めしやしないわ、少しくらいわけてあげるわよ」

ウィズは黙って店内の一角を指さした。壁にかかげられた木板に、いくつかメニューが書きこまれている。「盛り合わせ、いくらするか見てみるよ。あの値段」

少女はちよつとそちらに目をやってから、すげなく言った。

「読めない」

「は？」

「ルーン文字でしょ。読めないの」

「読めない？ メニューと価格が書いてあるだけだぞ」

「なんだろうが同じよ。文字は、読めない。まるきりひ

とつも」

「……」

そんなことがあるだろうか。すぐにかえす言葉が見つからず、ウィズは沈黙した。聖ルーンの信仰が広く浸透しているこの世界では、コーズ大陸にかぎらず、七つの

大陸すべてで『文字』の文化はことさら尊重されている。なぜなら聖ルーンがただの猿さるにすぎなかつた人類にはじめて与えた知恵こそが文字、とされているからだ。子供こどもはものごころついたら学童のまなびやに通うし、どんな小さな村にも教会があつて、貧困家庭ひんこんでまなびやに通えずとも神父から聖典が読み解とけるレベルまでの教育を受けることができると。

両親が反ルーン主義の異端者とか、山奥で獣のような生活を送つてきたとか、そういうよほど特殊な状況でなにかぎり、まったく識字しきじできないというのは考えづらかつた。

「ああ、母は別に異端者じゃないし、わたしは普通の村

に生まれたわよ」

少女が先まわりして言った。

「病気みたいなものかしら、文字の判別ができないのは。全部が全部、渦うずがぐるぐるまわってるみたいに見えて、視界に入れると気持ち悪くなるの」

「なんだそりや……」

そんな話、聞いたこともない。試しに自前の羊皮紙ようひしにさらっと一文書いて、彼女の前にさしだしてみる。

「だからあ、読めないって言うてるでしょ」

少女はびしやりと言って、運ばれてきたフルーツに手をのばした。小さな口をぱかっとなげ、たっぷり蜜がぬられたつややかなむきリンゴにむしやぶりつく。

『人の金でどんだけただ飯くうつもりだよ、少しは自重じちようしろ馬鹿ばか女』

いま見せた一文にはそう書いていた。きちんと視界に入っただけはまずないので、ここまでの性格上、少しは怒りの片鱗へんりんなど見せそうなるものである。それがまるきり無反応。幸せそうに舌鼓したつづみを打つ彼女をぼんやりと眺めながら、もしかしたら本当に字が読めないのかもしれない、と思っただ。

「わたし、母と姉に会いに行く途中なの」  
ようやく 식사가一段落したところで、少女は旅の目的を告げた。

「つまり里帰りか」

「そんなところ」

「場所は」

「スノーウエル」

「スノーウエル？」

ウィズはおどろきの声をあげ、

「大陸の最北端かよ、とんだ僻地へきちだな」

「僻地で悪かったわね、僻地で。そういうあなたはどの出身なのよ」

「南のウーテ村」

少女は虚空こくうを見あげて数秒思案し、それからあきれ顔を  
をした。

「なにそれ、フィンかエニドマあたりを出すかと思っただら、そっちもじゆうぶん辺鄙へんぴの住人じゃない……。ああ、でもウーテってたしか英雄アルルクルの出身地だったかしら？」

ウィズは一拍あけて、応えた。

「そうだな」

「うー、なら知名度対決はこっちの負けか……」

頭をかかえて悔しそうに言ってから、ぱつと顔をあかるくして、

「でもでもスノーウェルにはもう何年も帰ってないから、もしかしたらいまはすごく発展してにぎやかになってるかも」

ひっかかりを覚えて、ウィズはたずねた。

「何年も？ いま、年いくつなんだ」

「ん、わたし？ 十三だけど。だから村を出たのは六歳のときね」

「六歳……」

「身売りを想像してるなら、まあ当たらずとも遠からずつてところよ」

少女は頭のうしろで手を組んで、あつさりと言った。

「あれは、しかたないことだったの。お母さんにも誰だれに

もどうにもならないことだった。だからわたしはもう気にしてないし、恨うらんでもいないわ。本当にこれっぽつ

ちも」

言葉どおり彼女の眼差しや声音からは、怒りや悲しみの色は少しも感じられなかった。ただ前向きな意志だけがあつた。親もとに帰るといふ強い意志が。そしてわずかな寂寥が。

しかし、とウィズは考える。本人が気にせずとも親の側はどのようなだろう。売りとばした娘がいまさら帰ってきて、はたして諸手をあげて迎えるものか……。けれどそれは他人が口を挟むことではない。

「ねえ」

少女が食事の手をとめて、上目づかいにウィズを見た。所在なさそうに両足をぶらぶらとゆらし、口をひらいてなにか言おうとして……。つぐみ、なぜかぷいとあさって

のほうへ顔をそらす。そうして顔を背けたまま、ちらりと視線だけをウィズへ向けて、

「護衛、雇おうかと思うの」

その琥珀色こはくの瞳ひとみには、そっけなさの奥に、なにかを期待するようなおもむきがある。

「ほら、わたしかわいいでしょ。歩くたびにさつきみたいなトラブルに巻きこまれたら、たまらないじゃない。だからそういう人、いたほうがいいかなって」

「そうか、たしかにそれがいいかもな。あとでギルドに行ってみるといい」

「は？」

少女が急に不機嫌な声を出したので、ウィズはびっく

りしてとまどった。

「な、なに、なんだよ」

「……ぼくねんじん朴念仁なの？　いまの流れ、どう考えてもあなた

が護衛を買ってでる場面でしょ」

「護衛？　俺が？　嫌だよ」

あまりにすぎなく断ったので、少女は面くらったよう  
だ。

「ど、どうして……なにが気に入らないの」

「なにつて……」

「あ、そうだ、お金の心配してるなら……」

少女はいきなりスカートの中に手をつっこんだ。あつ  
けにとられるウィズをよそに、雪のように白い太ももを

むきだしにして自分のからだをぺたぺたとなでくりまわし、腰もとをいじくって「あつた」とさげんだ。どうやら服の下になにか隠し持っていたらしい。

「ほら、これ」

自信満々でテーブルに置いたのは、小綺麗こぎれいな短剣だつた。刃渡り二十センチほどで、鞘さやにはルーン文字とは別の判読不能な紋様と記号が細かにびっしり刻まれている。持ち手も鞘も柄つかもすべてコケのような濃緑色。柄をにぎって引き抜くと、刃の部分がすべて半透明で、抜き身越しに奥のテーブルが透けて見えた。

「これ……魔剣か」

「ええ、そうよ。びっくりした？」

少女がない胸をはって答えた。魔剣とは、当代の技術では造りだすことのできない古代魔法文明時代の遺産である。畢竟希少ひつきちょうせうせうで数もかぎられており、価格はピンキリのキリのほうでもおよそ庶民に手が出るものではない。ゆえに魔剣を我がものとするのが騎士や傭兵としての一流の証あかしでもあった。それだけに目利きも重要だ。刀身を半透明に加工しただけの模造品や偽物は山と出まわっている。

「さわっていいか」  
「どうぞ」

短剣をそっと持ちあげてみる。魔術の素養がからきしなので脈動する魔力を感じとることはできないが、柄を

にぎる手のひらが剣に吸いつくような感覚——かつての  
剣の師キルシュの魔剣サイリスをさわらせてもらった  
ときとまったく同じ——を覚えた。ウィズはこの短剣が  
本物だと確信した。

「銘<sup>めい</sup>は？」

「あるけど、まだ内緒」

人さし指を唇に当て、ぱちつと片目をとじた。

「いますぐは無理だけど、わたしを無事スノーウェルま  
で送り届けてくれたらこれをあげるわ。銘もそのとき  
ちやんと教えてあげる。どう、護衛する気になっただし  
よ」

はつきり言って破格の申し出だった。不誠実に身をゆ

だねるなら、即座に首を縦にふつただろう。ウィズは彼女に短剣をかえして、言った。

「こんなものを持つてるなら、なおのこと傭兵ギルドできちんと護衛依頼を募ったほうがいい。魔剣が報酬ならたとえ短剣でも、一流どころを複数人雇って釣りが出る」

少女はさすがに啞然<sup>あぜん</sup>としたようだった。

「あなた……魔剣がほしくないの？」

「そりゃほしいさ。いま持つてるのは安物で、そのうえ刃こぼれまでしちまつてるんだ」

「じゃあわたしが嫌いなの」

「ちがうよ」

「なら、はつきり言いなさいよ、わたしのなにが気に入く  
わないのか」

「だから、さつきからな、勘ちがいしてるぞ。護衛を受  
けないのはお前どうこうじゃなく……わかるだろ。俺が  
——」

そのとき、複数のテーブルからわっと歓声があがり、  
ウィズの声をかき消した。新しく店にやってきた男が熱  
烈に歓迎されている。変わった風貌をした男だった。つ  
ばの長い大きな帽子ぼうしをかぶり、背には大荷物、右手に弦  
がはられた大きな楽器をたずさえている。

「なにあの人、誰」

「たぶん、吟遊詩人ぎんゆうしじんだろう」

少女の疑問に、ウィズが答えた。

「ときおりこういう酒場にやってくるんだ。国で起こっている事件を伝えたり、歌を歌ったりする」

「ふーん」

吟遊詩人が店の中央に腰をおろすと、さっそくみなが彼のまわりをかこんだ。ウィズたちは席が近くだったので、立ちあがらずとも彼が見えだし声も聞こえた。

「さて、まずはなにからお話ししましょうか」

「王都の反乱のことを教えてくれよ、お姫様がさらわれたってやつ。英雄パーティーが五百人の大盗賊団をたつた四人で殲滅せんめつしたってのは本当なのか？」

客のひとりが声高に言うのと、吟遊詩人はにこりと笑っ

た。

「ええ、本当ですよ。王都で情報を仕入れてきたばかりですから」

「なあ、どうせならアルルクルの生い立ちから聞かせてくれないか？ 俺、ちゃんと知らないんだ」

他の客がリクエストする。詩人はふむとうなずき、楽器を持ちあげた。

「わかりました。それではお話ししましょう。ウーテ村からはじまりし、アルルクル・デイーンたんの英雄譚を」

詩人の物語がはじまった。彼の語り口は明瞭で耳心地がよく、客たちはすぐに心をつかまれて静聴した。ウィズも例外ではなかった。忘却のかなたに封じこめたはず

の過去が、音もなく忍びより、想起をうながしてくる。  
否<sup>いや</sup>応<sup>おう</sup>もなく思い出す。思い出してしまった。  
英雄の幼<sup>おさな</sup>なじみとして、ともに育った日々。  
七年前にさかのぼる、あの日の記憶を――

× × ×

「たあっ！」

おたけびをあげたアルルクルが、木刀<sup>ぼくとう</sup>をふりおろして  
くる。

いつもの彼らしく、フェイントもなにもない、馬鹿<sup>ばか</sup>正  
直でまっすぐな一撃。

俺は正中線にかまえた木刀を前方につきだし、アルクルの攻撃を冷静にいなすと、かえす刃で彼の喉元のどもとに、木刀のきつさきをつきつけた。

「う……ま、参りました」

眉まゆを八の字にさげたアルクルが降参したので、俺は得意顔で胸をそらした。

これで九十九勝二十敗。栄光の百勝目は目前だ。

「はあ、やっぱりウィズにはかなわないなあ」

アルクルがしょんぼりとして、つぶやく。じっさいは、勝敗差ほど実力は離れていない。強さ自体はほとんど互角と行ってよかつただろう。けれど、いざ勝負となると性格の差で自分に軍配があがる。こちらが相手のく

せやそれまでの勝敗の流れを考え、臨機応変に打ち筋を  
変化させるのに対し、アルルクルはどんなときも猪突ちよとつ  
猛進もうしんにつっこんできて、真正面からの突破をこころみた。  
その差だ。

「お前はさ、ちよつとわかりやすすぎるんだよ、アル」  
落ちこむアルルクルを見かねて、言っつてやった。

「基本的につっこんできて上段ふりおろしばっかかりだし、  
そのあとも目線や手の動きでなにやろうとしてるかバレ  
バレ。全体的に打ち筋が素直すぎるんだな、もつと考え  
てたたかうようにしなきゃ一生俺には勝ち越せないぜ」  
と、そこまで好き勝手しゃべってから、ちよつと上か  
ら目線すぎたかもしれない、と思ひ、

「……ま、その素直さがお前のいいところなんだけど」  
わざとらしいフォローを加えつつ、ちらりと相手の顔色をうかがうと、当のアルルクル本人に気を悪くした様子は一切なかった。いつもどおりの柔和な表情とやさしげな瞳で微笑んでいいる。アルルクルとは生まれたときからずっと一緒にいる幼なじみだが、彼が誰かに怒ったり怒鳴ったりする場面はいままで一度も見たことがなかった。これからも一生見ないんじゃないかと予言したくなるくらい、アルルクル・ディーンは陰のない清らかな少年だった。

剣の稽古はそれからしばらく続いた。俺もアルルクルも、この世界で暮らす男の子が当然そう思うように英

雄アーカーシャと彼の冒険譚に憧れていて、鍛錬と称し、小高い丘の上の原っぱで日々木剣をふりまわしていたというわけだ。

その日の稽古は、太陽が稜線りょうせんの向こうに沈み、あたりが夕闇ゆうやみに染まりはじめたところで、ようやく終了となった。肩で息をしながら高木の根に腰をおろし、からだを休ませる。綿布をアルルクルにほうり渡すと、彼はそれで額の汗をぬぐい、隣に座った。

「ねえ、ウィズ。あの話知ってる？」

アルルクルの声がいかに耳をくすぐった。彼の声音は楽の音のようにやわらかく、なんとも耳心地がよかった。顔立ちも目が大きくくりっとしていて女の子のようにか

わいらしいから、将来酒場で謳<sup>うた</sup>う吟遊詩人になればさぞ  
人気が出るだろうと思っただが、大人になったら一緒に村  
を出て冒険者になる予定なのでその選択肢は心の内にと  
どめおく。

「あの話って？」

「ほら、王都フィンで障門がいくつも発生してるってい  
う……」

「ああ、空に浮かぶ黒い渦から魔物がどんどん出てくる  
ってアレか」

「こわいね……魔物なんてほとんどいなくて、ずっとお  
となしかつたのに。……このあたりはずっと平和だけど、  
もし魔物なんて出てきたら……」

「だいじょうぶだよ、アル」

つとめて明るいい声で言い、アルルクルの頭をぽんとはたたいた。

「俺たちがいるじゃないか。俺とお前が一緒になればで  
きないことはない。なんだってできるんだ。お姫様も助  
けられるし、魔物だってやっつけられる。そうだろ？」

「……うん！」

アルルクルが前向きな笑顔を見せたので、自分も満足  
した。具体的なことはなにも言っていないが、なにもか  
もまだ先の話なのでかまわなかった。冒険者になるのも  
魔物とたたかうのも遠い未来の話。そう思っていた。思  
いこんでいた——このときこの瞬間までは。

「そろそろ村に帰ろうぜ」

「そうだね、ぼくもうお腹ぺこぺこ」

立ちあがってのびをしていると、アルルクルが村のほうを指さした。

「ほら見て。どこの家かな、おいしそうなおいがここまで届きそう——」

どれどれと誘われるままに村を見おろす。そして異変に気づいた。

「……ちがう……あれは料理の煙けむりじゃない……」  
「え？」

「火だ……村が……村が燃えてるっ！」

□に出すと同時に、背筋にぞっと怖おぞ気が走った。まち

がないないと頭と脳が認め、その意味するところのおそろしさに足がふるえた。煙はどんどん数を増していった。ひとつ、ふたつ、みつつ……村のいたるところからもうひとつと黒煙こくえんが立ちのぼる。

「な、なんで……村が……いったい、なにが……」  
アルルクルの顔が恐怖にゆがむ。

「ど、どこかの国が攻めてきたのっ!?!」

いや、と冷静に否定した。戦略的価値とぼに乏しいこんな僻地へきちをわざわざ襲うとは考えづらいし、散発的な山賊や盗賊の侵入ならあそこまで攻めこまれる前に見張り台で発見できていたはずだ。となれば考えられる可能性はひとつしかなかった。

「魔物だ……」

「ま、魔物……。どうする……。どうしようウイズ、ぼくたちどうしたら……。」

「……」

問われて沈黙する。自分たちはまだ子供。それもたつた十一歳の。アルルクルはもちろん、彼にえらそうに講釈たれた自分だって別に村一番の剣士でもなんでもない。魔物とたたかっただけでもない。勝てるわけがない。だから……。村を素通りしてフォータス城まで行き援軍を請う。それが賢い選択。子供が取るべき当然の措置。

けれどそんなことをしていたら、村のみんなはどうな

る？ 気のおけない友人たちに、アルルクルの父、母、祖父母に兄弟……捨て子だった自分にも育ての両親がいる。実の息子のように惜おしまぬ愛情を注がれたとはいえないが、恩義を感じる両親が。

己の中で答えを出し、強くこぶしをにぎりしめた。隣のアルルクルは頭を抱え、からだを丸めてうめいている。意味不明な慟どう哭きくをくりかえしパニック寸前に陥っている。まずは落ちつかせなければ。俺は、じたばたと取り乱す彼の手をつかんで、さげんだ。

「アル！ 顔をあげて俺を見ろ！」  
アルルクルのからだだが、ぴたりと制止する。

「時間が無いからよく聞くんた。俺たちの選択肢は二つ

ある。ひとつは村を迂回<sup>うかい</sup>してフォータス城へ向かい領主様に助けを求めろ道」

「……」

「そしてもうひとつが、このまま二人で村へ行く道」

「……」

「お前の気持ちを聞かせてくれ。アル。お前はどうしたい」

アルルクルは丘の下を見た。ウーテ村はいまや完全に黒煙にのみこまれようとしている。もう手遅れかもしれない。もうみんな殺されてしまっているかもしれない。そもそも自分たちが加勢したところで焼け石に水にすらならないだろう。村に戻ったところでただ殺されるだけ。

それでもアルルクルならきつと……。

「た、助けたい……」

アルルクルは真正面から、はっきりと口にした。

「魔物をやっつけて、みんなを……助けたい！ 英雄ア  
ーカーシャならきつとそう思うから……だから」  
「わかった。俺もそう思った。二人でみんなを助けよ  
う」

俺たちは、肩を並べて駆けだした。全速力で丘をくだ  
り村を目指した。しかし少し進んだところで突然、アル  
ルクルが急停止して立ちどまった。ぼうと空を見あげて  
かたまっている。怖<sup>お</sup>じ気づいたのかと思ったが、そうで  
はなかった。

「……聖ルーン様だ」アルルクルがぼそりとつぶやいた。  
「は？」

意味がわからず、目をぱちくりさせていると、

——運命の子。

どこからか声が聞こえてきた。ぎよっとしてあたりを見まわす。

——運命の子よ。

声は上から降ってきているように感じられた。清流のせせらぎのように澄んでいて、男か女か判別がつかない、不思議な声。けれどいくら空を眺めまわしても、人影やそれに類するものはなにも見つからない。いつたいたんだ、なにが起きている？ いやいや混乱して狼狽ろうたいし

た。恐怖はなかったが、狭いところにむりやり押しこまれるような窮屈きゆうくつさを覚えた。声は続いた。

——運命の子、アルルクル・デインよ。

声が親友の名を呼んだ。はっとして彼に視線をやる。

「ぼくが、アルルクルです」

アルルクルが、空に向かって応えた。

「あなたは……聖ルーン様、ですよね」

——ええ。

「お会いできて、光栄です」

——わたしもですよ、アルルクル・デイン。

俺はアルルクルの横顔と虚空こくうとを、呆然ぼうぜんとした面持ちで眺めた。あいかわらずその姿は見えないが、親友が気

がふれたのではないことはたしかだった。いつの間にか上空の雲がすべてふきとび、青天せいてんが黄金色こがねいろに染めあげられ、地面には薄ピンク色のはすの花が足の踏み場もないほど無数に咲き誇っていたからだ。

直後、目もくらむ閃光せんこうがまたたき、なにかが上空から降ってきた。音もなく飛来し、アルルクルの眼前にすつと垂直につきささる。それは、両刃の騎士剣だった。

「聖ルーン様、これは」

——かつて英雄アーカーシャに与えし魔滅の光剣です。

「アーカーシャの……」

アルルクルが落ちつきはらった声で言い、剣を見おろした。

俺も剣を見た。美しい剣だった。思わず目を細めてしまうのは、刀身があたたかな光をはなち、きらきらとかがやいているからだ。圧倒的な神々しさ、太陽のごとき熱、不断の生命力……心が一瞬にして剣に釘づけになった。気づくと俺は、垂涎していた。口もとからだらりと唾をたらしていた。それをごくりとのみこんで、思う。あんな……あんな剣をもし手にすることができたら、いったいどれほどの……。

——覚悟があるならば、その剣を取りなさい。

「覚悟……」「アルルクルがつぶやく。

——この世界にはまもなく混沌がおとずれます。魔の根元へデモンVが創造せし魔人どもにより世界は跡形も

なく蹂躪じゆじりんされるでしょう。

「せ、世界が……」

アルルクルは神妙な顔で唇をゆがめてから、さげんだ。  
「そんなことはさせません！ 絶対に、させない。ぼくは、みんなが笑って暮らせる世界をつくりたい、そういう世界を守りたいんだ！」

——世界を破滅から救うと、そう言うのですね？

「はい」

——よろしい。では、いずれ生まれいずる七匹の魔人どもを誅殺ちゆうごうし、光かがやく世界と愛いとしき神の子らを救済する……その重みと覚悟を背負えるならば引き抜くのです。神話の時代に造られし神の息吹いぶき、魔を滅する光の剣

を。

小さく深呼吸したアルルクルは、右手で剣の柄をにぎり、逆手で一気に引き抜いた。

——祝福しましょう、運命の子。新たなる英雄アルルクル・ディーンよ。加護を受けし四人の仲間とともに、世界を救うのです。あなたの前途に光あらんことを。

それを最後に声は聞こえなくなつた。空が青色に戻つて雲がわき、はすの花も消え去つた。

すべてが、声が聞こえる前の状態に戻つた。

ただひとつ——アルルクルの右手ににぎられた、光かがやく騎士剣を残して。

「世界を救う。やるんだ、ぼくが」

アルルクルが力強く宣言した。それからくるりと首を動かしてこちらを見た。彼と目と目が合い、俺はようやく自身がこの場にいることを思い出した。己が歌劇の観客ではなく歴れっきとした当事者であることを思い出したのだ。「行こう、ウィズ。ぼくたちならやれる。まずは魔物たちの手からウーテ村を取り戻そう」

アルルクルの……親友の左手が目の前にさしだされる。「……」

俺は空虚くうきょな眼差しで、その手を見おろした。心の奥底からぐつぐつとわきたつ感情を、形として表現することはできなかつた。しばらく沈黙したが、ついでかえすべき言葉が見つからず、「あ、ああ……行こう……」ただ

曖昧<sup>あいまい</sup>にうなずいて彼の手を取ったのだった。

× × ×

「こうしてアルルクル・ディーンは聖ルーン様に認められ、真なる英雄の第一歩を踏み出したのです」

吟遊詩人の涼やかな声音が、ウィズを現実に引き戻した。ぱちぱちと何度か目をしばたたいてから、それとなく左右を見まわすと、酒場の誰も物音ひとつ立てず、物語にじっと聞き入っている。ウィズは離席したい衝動を覚えた。しかしこのタイミングでそれをするのは、あまりに無作法<sup>ぶさほう</sup>だろう。しかたなく着座したまま、瞑目<sup>めいもく</sup>す

る。

詩人はそれから、順を追って英雄の生い立ちを語っていった。ルーン教最高指導者たる法王猊下げいかに謁見えっけんした話、剣聖けんせいキルシュに弟子入りした話、宮廷魔術師プラリネとの共闘、神官ユフィールとの出会い、そしてアコロシア大陸に渡ったの魔人討伐……。多くの内容はウィズが知っているものだった。じっさいウィズが体験したこともあった。しかし語られし英雄譚の中にウィズ・ヴァイスの名が出てくることは一度としてなかった。ウーテ村で魔滅の光剣を手にしたときも、アルルクルはひとりで剣の修行に明け暮れていたことになっていた。

物語は進み——つい先日鎮圧されたばかりの王都反乱

事件までを語りおえると、聴衆たちは雨のような拍手で詩人をたたえた。詩人はうやうやしく一礼して、称賛に応えた。

「やっぱすげーな、英雄アルルクル。コーズ大陸の、いや人類の誇りだよ」

「ああ。あとは魔人さえ探しだしてぶっ殺してくれりや、この国も安泰だ」

「魔人、か。そもそもよ、魔人ってのはどんな姿してんだ？ でかい怪物なら目立つだろうし……。英雄たちが探しまわってるのになんで見つからないんだ？」

みなびしの視線が一斉に詩人にそそがれた。詩人は小さく微笑しょうして言った。

「さて、そこまでは。七つの大陸にそれぞれ一匹ずつ、全部で七匹存在するということしか、わたたくしも知らないのです」

聴衆たちからどつとため息がもれた。庶民の知識と大差なかったからだ。

「そういうえば、名前なんていうの」

突然、少女がウィズに問いかけた。

「え？」

「名前よ、あなたの名前。さつきからお前だのなんだの、言いくいっただらないじゃない」

言うことは道理だが、おかしなタイミングだった。けれど別に隠しているわけではないし、ありがたいことに

詩人が謳<sup>うた</sup>う英雄譚からも名が消え失せてくれたようなので、名乗るのも前よりいくぶん気が楽になつていた。

「ウイズだよ……ウイズ・ヴァイス。お前は」

「アローン・ナグルファリ。アローンでかまわないわ、ウイズ」

ぽろろん、とやわらかな楽の音が響く。詩人が弦を鳴らし、ゆるやかでもの悲しいバラードを奏ではじめた。二人は口をつぐみ、他の客たちと同じように、しばし演奏に耳をかたむけた。遠くに行つてしまった恋人を想う悲恋の歌だった。

酒場の一角では、詩人をかこんでの雑談がくり広げら

れていた。だいたいがいい具合に酔っぱらった客が執拗しつように詩人を質問攻めにするものだった。詩人は嫌な顔ひとつせず、向けられた質問に知るかぎりの知識で丁寧に答えていった。質問の多くは英雄アルルクル・デイーンにかんするものだった。

「なあ、詩人の兄ちゃん。それでよ、お姫様を救いだした英雄アルルクルは、いまはどっかでなにをしてるんだい」

「祝賀パレードをおえたあとは、王城での勲功授与式くんこうが予定されているそうです。噂うわさでは、姫殿下奪還の功績により爵位しゃくゐが与えられるとか」

「おお、と聴衆たちが色めきたった。爵位を得れば貴族

となる。アルルクルが南の小さなウーテ村の出身であることは、この大陸の人間なら誰もが知っている。アルルクルは王族の末裔まっえいでも騎士ちやくしの嫡子ちやくしでも領主の血縁ちやくしでもない、なんの変哲もないただの村の子供だった。それだけに彼の英雄譚は庶民にとって、夢のような成りあがり物語でもあった。

「爵位つてんなら、当然ドグムンド国王自らおこなうんだよな」

「どんな式なんだだろうなあ」

「きつと見たこともないようなごちそうがいっぱい、きらびやかで……俺ら庶民には想像もできないよ」

酒場の客たちは安物のエール酒を片手に、王城でいま

まさにおこなわれているだろう華やかな式典に思いをはせた。

「ねえ、ウィズ。さっきの続き」

王都の式典にはあまり興味がないのか、アローンが口論の種を蒸しかえしてきた。

「ん？」

「なんでわたしの護衛を引き受けないのか。その理由」

「ああ、だからそれは」

ウィズは小さくため息をついて言った。

「俺が、弱いからだよ」

× × ×

「やあッと解放されたわア……はア……つかれたア……」  
紗しやのとばりにかこまれたキングサイズのベッドに頭か  
ら飛びこみ、プラリネ・オルトリンは大きく長い吐息ためいきを  
もらした。早朝の街頭パレードからはじまった一連の式  
典行事が済みフィン城の客室に帰されたのは、そろそろ  
日付も変わろうかという夜ふけ前だった。

「もォー一日中引っぱりまわされて足が棒ぼうよォ」

「あはは、おつかれさまでした」

ユフイール・ローズヴァイセがねぎらいの言葉をかけ  
ると、ベッドに寝っ転がったプラリネがひよいと顔をあげ、  
彼女に向かって手招きした。

「こっちに来てエ、ユファイー！。かわいがってあ・げ・る」

「けっこうです」

「んもう、つれないわねエ。じゃあアル坊でもいいわよオ？」

「ううん、遠慮しとく。プラリネは死ぬほど寝相ねぞうが悪くておちおち隣で眠れないって、前にユフィールが言ってたし」

取りつく島もなく断られ、プラリネは「つまんなア  
い」と口をとがらせた。

「それよりアルルクル様、本当によろしかったのですか？」

「そうそう、もツたいない。せーツかくお貴族様になれるチャンスだツたのに」

彼は式典においてなんと、爵位の拝受はいじゆを辞退していたのだ。水を向けられたアルルクルは、客間のイスにちよこんと腰かけて、

「勘弁かんべんしてよ、ぼくに男爵だんしゃくなんて、つとまるわけないじゃない。リルメリア様をお救いしたのは見返りのためじゃないし。それに姫様の救出も伯爵公はくしやくの反乱鎮圧もぼくひとりの手柄じゃないでしょ、なのにぼくだけ拝受だなんて、かつこう悪くてできないよ」

その恬淡てんたんとした物言いに、それまで二人のやりとりを無言で眺めていたキルシュがわずかに相好そうごうをくずす。

清廉せいれんと利他こそ剣聖キルシュ・ラムヒルドがもつとも尊ぶ精神だった。

「でも、もしかして国王様を怒らせてしまったかな……とは思ってるんだ。せっかくご準備してくださったのにふいにしてしまっ……」

「あーそれは、ものすごくお怒りでしヨうねエ」  
プラリネがくすくすと笑い、からかうように言った。

「不敬罪で打ち首獄門にされてしまいかも。ほオら、よく耳を澄ませてみなさいよ、いまごろその扉にひッそり兵を集結させて——」

次の瞬間、ばんつと勢いよくその扉があけはなたれたので、アルルクルは跳びあがっておどろいた。プラリネ

の言うとおりに武装した兵士が十数人、大挙して押し寄せてきたからだ。

「わ、わ、なに、も、もしかして打ち首獄門っ!？」

「バカねエ、そんなわけないじゃない……」

アルルクルが本気でおびえているので、プラリネは肩をすくめて言っつけてやった。

「英雄殿、お仲間の皆様、失礼いたします。お休みのところ申し訳ございません」

先頭の兵士が代表して口をひらくと、

「それはかまいませんが、どうかされたのですか？」

ユフィールがやさしい声音で応対した。用件の見当がつかなかったなので、少々の困惑があった。代表の兵士は

ひとつづなずき、アルルクルに向かってこう言った。

「ご無礼のほど承知でお願い申しあげる。英雄殿、どうか我々に稽古をつけていただきたい」

今代英雄は死刑宣告でなかったのにまずはほっとし、それから、

「稽古、ですか？」と不思議そうに問いかえす。なぜいまいきなりなのか、それがよくわからなかった。

「……断つてもかまわないぞ、アルルクル」  
冷たく言いはなつたのはキルシュだ。瞑目めいもくして、静かに続ける。

「我々は王の賓客ひんきゃくだ。近衛兵このえへいの手慰みてなぐさなぞに付き合つてやる道理はない」

彼女だけはすでにこの乱入劇の真意を見抜いているよ  
うだった。兵士たちがぐっと言葉につまり、たじろぎを  
見せる。もしかしたらこの行動は彼らの独断なのかもし  
れない、とアルルクルは思った。

「稽古……いいですね、やりましょう」

それなら余計に無<sup>む</sup>下<sup>げ</sup>にするわけにはいかなかった。

「ちようどからだを動かしたいなと思ってたんです。だ  
から、ぼくでよければぜひ」

一行は王城の第二鍛錬場へとおもむいた。翼の最上階  
で、頭上には満天の星々がきらめいている。石畳の床は  
かなりの人数が暴れまわれるくらい広く、四隅の一角に

は高い塔——監視用の見張り台もあつた。風よけのためか、ランプは石壁をくりぬいた中に等間隔で設置されており、中央で準備運動するアルルクと、その対角線上に陣取る近衛兵たちをよく照らしだしていた。アルルク以外の三人は壁ぎわに背をあずけ、事態を見守つている。血気盛んな兵士たちを眺めながら、プラリネが隣のキルシュにたずねた。

「ねエ、キル姉様。けつきヨクこの催しもよおの意向は奈辺どこにあるのかしら？」

「お前が想像してるとおりだよ」

「つまり？」

「嫉妬しつとだ」

キルシュは小さく嘆息し、

「リルメリア殿下の奪還。その使命を我々によこどりされたたでも思っているのだろう。じつにくだらん」

「ああああ辛辣しんらうなお言葉ですこと。でもたしかに、彼らにしたらおもしろくないわよねエ。囚とらわれのお姫様を助けだすのは殿方の夢ですもの」

ある程度 of 理解を示すプラリネに、キルシュはもう一度言っただ。

「くだらん」

「それじゃあ、よろしくお願いします」

アルルクルが右手に剣をかまえると、それに呼応して

兵士がひとり前に進みでて、「おおー！」と裂帛れっぱくの気合を発した。引きしまった体軀たいくで、所作しよさに厚みと重みがある。鍛えあげられた猛者もさであることは一目瞭然だった。両者が手にするのは刃引きした模造刀。とはいえ骨くらいなら容易に砕くだけるし、打ちどころが悪ければ、死ぬこともありえる。

剣をかまえてにらみあう二人。ちりちりとした緊張感がみなぎった、そのときだった。

「なにをしている」

キルシュが冷たい声音で水をさした。両腕を組んだまま居並ぶ兵士たちを指さし、その先端をアルルクルへと動かして言った。

「もっと大勢で一度にかかれ、いずれにしろ鎧袖一触がいしゆういつしよくにちがいないのだから、時間の無駄だ」

兵士たちは大いにプライドを傷つけられたような顔を  
した。しかしキルシュがずっと射殺すような眼差まなざしを向  
けてくるので渋々と、二、三人が前に出る。

「もっとだ」

さらにひとり加わり、これで五対一。

「もっと」

七人になってもキルシュは満足しない。さらに前へ。  
「それでいい」

ようやく彼女がうなずいたときにはもう、兵士たちは  
完全に憤りを噴出させていた。アルルクルを取りかこむ

人数、じつに二十人。その場にいる全員だった。

「ちよつと、あの、キルシュ……？」

すっかり恐縮してしまったアルルクルに対し、キルシュは冷ややかに、

「まさか勝てないのか？」

「いや、それは……」

勝てると言いたいな、俺たち全員を相手に。兵士たちの昂揚こうようは最高潮に達した。彼らはただの兵卒ではない。全員が王国最強の呼び声高き近衛師団の精鋭たちだ。彼らは、自分たちにだって五百からなる盗賊どもを撃滅する実力はあると思っ**て**いるし、じつさいアルルクルたちが現れなければ**そ**うなる**予**定だった。己が矜恃きょうじと忠誠

心にかけて、自分たちがリルメリア姫を助けだすはずだったのだ。

「……英雄殿、勝負をはじめてよろしいか」

兵士のひとりが燃える瞳で問いかける。アルルクルがうなずいた瞬間、両者は激突した。

勝負は……勝敗は、あっさりとくだされた。実力はあまりにも乖離かいりしていた。数十秒のうちに王国最強の二

十名は、残らず床をなめていた。打ち筋はことごとく空を切り、相手の服にかすることすらなかった。そして全

員がこぶしの一撃をみまわれて昏倒こんとうした。屈辱くつじよくだった。侮辱ぶじよくだと感じた。英雄が最後まで剣を使わなかったこと

が。

「あ、ありがとうございます。あ、あの、みなさん、だいじょうぶですか？」

そして英雄がおどおどと、こちらの反応をうかがいながらたたかっていたことが。さしだされた手を拒否し、独力で起きあがった兵士たちは、直後、狐きつねにつままれたような顔になった。

アルルクルがない。たったいまのいままで目の前にいたはずなのに、鍛錬場のどこにも姿が見えなくなっている。三人の仲間も。なぜ？ どこに？ 大いに困惑して周囲を見まわすと、ひとりの兵士が上空を指さしてさげんだ。

「上だ。塔の上！」

高い塔の見張り台に、アルルクルたち四人が集結していた。いったいいつどのようにしてあそこまでのぼったのか、兵士たちには皆目見当もつかなかったし、四人のうちの一入——プラリネが薄いヴェールを風になびかせ、ぶかぶかと宙に浮いているのは、まったく夢か幻にしか思えなかった。

「アルルクル様、お感じになりますか？」

塔の上で、ユフィールが問う。四人の視線ははるか東の空へと向けられている。

「うん、かすかにだけど、感じる。あれは……魔人の気配だ」

ぴりりと空気がはりつめる。アルルクルは慎重に言葉

を続けた。

「アコロシア大陸で『退魔』と対峙したときと同じ……  
背筋がこおるような怖気と、どんよりした暗黒の魔性  
……それをあいつからも感じる」

「けれど不可解な点があるわ、アル坊」

プラリネが目を細め、東の夜闇をあごで示した。常人には確認するべくもないが、はるかかなたの空——王都から数キロ先の中空——には、一匹の鴉からすが浮かんでいた。飛んでいるのではなく、浮かんでいる。羽ばたきもせず、ぼんやりと。魔の気配はその鴉からただよってくるものだった。

「順番と場所がちがう」

プラリネは指摘した。

「このコーズ大陸に出現するのは、二番目の『因果断いんがだち』のはずでしょう？ 『大鴉』おおがらすは別の大陸で、目覚め

も五番目のはず」

「おそらく本体ではないのだろう」

キルシュが推論を口にした。

「魔人はそれぞれ因縁づけられた各大陸から出ることはできないが、ああして分霊ぶんれいか魔術操を使えば他へ監視をよこすくらいは可能なのだろうさ」

つまりあの鴉は偵察。この大陸を滅ぼす『因果断ち』の魔人ではない。しかし看過かんかはできない。鴉は別名『告死鳥』こくしちやうと呼ばれ、不吉の象徴とされている。アーカ

ーシヤ英雄物語でも、人々から生気を奪う魔の尖兵<sup>せんぺい</sup>として描かれており、集めた生気を魔の眷属に分け与えることで、その寿命や力を大きくのばしていた。もしあれにも同じ力があるのなら、多くの無<sup>む</sup>辜<sup>こ</sup>の民が犠牲になるだろう。

「みんなは、さがつてて。ぼくがやる」

一歩前に出たアルルクルが半身になり、弓を引くように右腕をからだのうしろへ引く。顔の横にかまえた模造刀が淡く発光し、太陽のようなかがやきをはなちはじめた。

「正々堂々と姿を見せず、こそこそ覗<sup>のぞ</sup>き見するやつなんて、これでっ——」

さけび、剣を投げはなつた。剣は、昼夜が逆転したか  
と見まがうほどの圧倒的な光と熱量を放射しながら一直  
線に飛来し——異変を察知して飛び去ろうとした鴉の胴  
体に、深々と突きささつた。直後、どろりとした魔性が  
中空にもれ、鴉は内側から爆裂四散した。

はるか東の空で爆音がとどろき、閃光せんこうがまたたく。お  
よそ人間業とは思えない……まるで神の雷のような一閃いつせん  
だった。兵士たちはみなあんどりと口をあけて眺めてい  
た。眺めているよりなかつた。己では決して成しえない  
英雄行の一幕を。

高さ十五メートルはある見張り台のてっぺんから、ア

ルルクルは平然と跳躍し、ほとんど音もなく鍛錬場へおりた。兵士たちは、突然自分たちの輪の中心に落ちてきた英雄に対し、どう接してよいかわからず、とまどった。さっきまでのように気安く挑みかかる気持ちなどもはや微塵みじんもない。

「あ、あの、みなさん……」

するとアルルクルが彼らを順ぐりに見まわしてから、本当にすまなそうに頭をさげて、

「ごめんなさい。勝手に剣、使ってしまった……」

兵たちは互いに顔を見合わせてきよとしたあと、一斉に噴きだした。それから大声で笑った。困りきった顔でなにを言いだすかと思っただら、まさか投擲とうてきした模造

刀の心配をしていたとは。器がちがう、と思った。住む世界がちがうし、そもそも見えているものがちがうのだ。そして実力も。稽古でたたき伏せられたときは、肉食獣と草食獣の差くらいに感じていたが、大きな誤りだった。英雄を肉食獣とするなら自分たちは、そのまわりをうるつく極々小さな羽虫にすぎない。ちよつとぶつかつただけで、たやすくつぶれて消えるような。そりや気も使われるさ、と思うと、気持ちいかえって晴れ晴れとした。「……アルルフル殿。数々のご無礼、なにとぞお許しいただきたい」

兵士たちは心からの謝意を示した。そして敬意をこめて、頼んだ。

「どうか魔人を討伐し、このコーズ大陸をお守りください。我ら王都近衛隊一同、その日をいちじっせんしゅう一日千秋の思いでお待ち申しております」

鍛錬場をあとにした英雄一行は、横並びになつて長い廊下を歩いていった。翼から中央部まで移動するため、客間へ帰るだけでも一苦勞だ。

「あーもオーいや、もう寝る。アタシ部屋に帰ツたらもう一ミリだツて動かないんだから」

プラリネがほおをふくらませて言った。衛兵の案内は丁重に断つたので、周囲には彼ら四人しかおらず、自然と会話はオープンな内容になつていった。

「でも思いがけない収穫がありましたね」

ユフィールの言葉に、キルシュがうなずく。

「たしかに仮の虚<sup>こ</sup>仮<sup>け</sup>とはいえ、他大陸の魔人と遭遇するなどまったくの想定外だった。一大陸に魔人は一匹。完全にそう信じこんでいたからな。……しかしあの気配の虚<sup>う</sup>ろさからすると、たいしたことはできないように感じるが」

「本当に偵察するだけが精<sup>せい</sup>々<sup>ぜい</sup>なのかもしれないわねエ。あ、そういうえばアル坊、なんでさつき背中の光剣を使わなかつたの？」

たまたま目に入ったのでたずねると、アルルクルがあつと声を出してふりむき、

「忘れてた……」

「もう、しツかりしてよねエ。そんなんじや英雄譚でみんなに笑いものにされてしまおうよ」

「英雄譚？ なにそれ？」

「あら、知らないの。吟遊詩人がいろんな町で謳うたツてるのよオ、アナタの活躍を」

「へえー」

「そこそこ聞きごたえあツておもしろいから、今度酒場にでも行ツて聞いてもらんなさいよ。いえ、聞かなくていいわ」

「え、どっち……」

「行かなくていい。アナタには酒場でうつつを抜かす暇ひま

なんてないもの。一刻も早く魔人を見つけてだして討伐しないと。ね？」

「それは、そうだけど。プラリネに真面目なこと言われると調子狂うなあ」

「あら、アナタたち三人がそろいもそろってお堅すぎるだけじゃないかしら」

「あはは、そうだね。だからぼくはやっぱり、ウィズがいたときのほうがバランスが取れてたと思うんだ」

ウィズ。その名が出た瞬間、三人の女たちの心が、一斉にざわついた。憎悪、怒り、同情、諦観<sup>ていかん</sup>、憐憫<sup>れんびん</sup>、さまざまな感情がごちゃ混ぜになって彼女たちの心内で渦をまいた。

「ウィズ……どうしていなくなってしまったんだろう……」

アルルクルが、目に悲しみの色を浮かべてつぶやく。  
「ぼくにもみんなにも、なんにも言わずいなくなるなんて……」

女たちは、英雄の顔を直視できずにうつむいた。身を  
焼くような罪悪感にさいなまれる中、そんな内懐はうちぶとこつゆ  
とも見せずキルシユはきじょう気丈にふるまった。

「いい加減、こだわるのはやめろ。あの男には、あの男  
なりの事情があつた。それだけだ」

「事情ッていうか、単に故郷の村へ帰ッただけでしょ  
う？ 置き手紙にはそう書いてあつたじゃない」

プラリネがもつともな理路を示すも、アルルクルは納得しない。

「そんなの、おかしいよ……だつてぼくたちは、誓ったんだ。一緒に魔人をたおして、平和な世界を作ろうつて。ウィズと、そう約束したんだ。なのに、どうして……」

「アルルクル様……」

ユフィールが寂しげさびに目を伏せる。

「……ここからなら、数日でウーテ村へ行ける。ぼく、様子を見に……」

「ダメよ、アル坊」

言下を待たず、プラリネはぴしやりと言った。

「アナタには、なによりも優先して果たすべき使命があ

る。人々のために果たすべき使命が」

「……」

アルルクルは沈黙した。彼女の言うとおりであった。友人の安否と、大陸全土の危機、比べるまでもないことだ。けれど、それでも……。

「……ずっと一緒に育ってきた、幼なじみなんだ」

アルルクルは静かにそう言った。彼だけはウィズの帰還をかたくなに信じていた。

「ウィズはきつと帰ってきてくれる。ぼくはそう信じてる。だって聖ルーン様は、四人の仲間とともに世界を救えとおっしゃった……託宣たくせんではつきりとそう言ったんだ。

だから絶対にウィズが必要なんだよ、ぼくたちのために

も、世界を救うためにも、絶対に……」

女たちは、五人目の仲間が断じてウィズでないことを確信していたし、万一にも彼をパーティーに復帰させるつもりはなかった。

ウィズ・ヴァイスが英雄アルルクルの横に並び立つことは、二度とあってはならない。

それが彼女たちの共通認識だった。なぜなら――

× × ×

「あなたが、弱いから？」

白髪の少女アローンは小首をひねり、不可解そうに目

をばちくりさせた。

「だから護衛を受けないの？　なにそれ、意味がぜんぜんわからないわ」

ぽかんと口をあけ、本当に理解できないようだった。自分が役立たずだと説明するのはあまり楽しいものではないが、ウィズはそうしてやるよりなかった。

「意味もなににも……そのままだよ。森でのたたかいぶり見ただろう、俺はあの程度の連中も満足に撃退できないし、じっさいお前が助けしてくれなきや殺されてた。……行ったことにはないが、スノーウエルってのはここからずいぶん遠いんだろう？」

「山を二つ越えて、さらに先ね。馬車で十日、徒歩なら

ひと月はかかるかしら」

「そんな長旅のあいだ、護衛としてお前を守り続ける自信はない。どっかでああいう野盗に身ぐるみはがされるか、もしくはは魔物に殺されちまうよ。北東地方にはまだ障門がいくつか残ってて、魔物がうろついてるらしいし。俺は、できないことはやらない。お前を無事スノーウエールまで送り届けるってのは、俺には荷が重い、できないことなんだ」

これで納得するかと思っただが、アローンはなお首を縦にふろうとしない。それどころかますますかたくなに、「弱くてもいい。わたしは、あなたがいいの」

「……はあ？」

ウィズはさすがにあきれってしまった。

「なあ、なんで俺なんだ」

一番わかからないのがそれだった。

「なんでそんなに、俺にこだわる」

「わたしを助けようとしてくれたから」

「……それ、森での話か」

「ええ。あのおときあなたは自分をかえりみず、赤の他人のわたしを救おうとしてくれた」

ウィズは眉間みけんを指で押さえて、嘆息たんそくした。

「助けに行ったのは助けられそうだったからだよ。

お前を襲ってる連中のかっこうや獲物を見て、ぎりぎりなんとかかなりそうだと思ったから割って入ったんだ」

「それは嘘よ。順番がちがうもの」

「……」

「ウィズ。あなたはできるかどうか考えてからわたしを助けにきたんじゃない。わたしのもとに向かいながらどうするか考えてた。誰かが襲われてると気づいた時点で、あなたはすでに選択をおえていたの」

「……」

たしかにそうだったかもしれない。けれど彼女の言う順番と、彼女を実際に守りとおせるかはまったく別の話だ。志や意思だけではどうにもならないことが、世の中にはごまんとある。ウィズはそのことを骨身に染みて知っている。

「そうだ、もし勝てそうもない相手に出くわしたら、一緒に逃げればいいじゃない」

「それじゃ護衛の意味ないだろ……」

妙ななつかれかたをしている、と思った。たぶんすりこみ……そう、アローンはすりこまれていたのだ。たまたまあの場に現れただけの俺を、ヒーローかなにかだと思いきんでしまっている。要は、生まれたばかりのひな鳥がはじめて見た生物を親だと信じてしまうあれだ。ウイズはいたたまれない気持ちになった。自分なんぞでなく、もっと別の誰かが彼女の前に現れてやればよかったのに。

「——ウイズ……？　そこにいるの、ウイズか？」

さてどうしたもののかと頭を悩ませていると、ふいに誰かに名を呼ばれた。

「やっぱりウィズじゃないか！ 奇遇だなあ、おい！」

「お前……ケイアス？」

視線をあげると視界に、なつかしい顔が映りこんだ。

背が高くがっしりしたからだつきの青年——同業のケイアス・マクドールだった。ケイアスはぱっと破顔はがんしてウ

イズに抱きついた。

「くう、ひさしぶりだなあ！ なんでこんなところにいるんだあ？ 俺あてつきり王都にいるもんだとばかり」

ハグをおえたケイアスは、胸の前で両手を組み、神に祈るポーズをした。

「だが渡りに船たあこのことだ。おお聖ルーン様、右も左もわらかぬこの地において、我が親友とめぐりあわせてくれた奇跡に感謝を」

「親友なの？」

と、アローンにたずねられたので、真顔で即答する。

「ただの傭兵仲間だよ。何度か一緒に仕事したことがある。それだけ」

「そりゃないぜ、ブラザー」

「……なんだかうさんくさい人ね」

「まあ、根は悪いやつじゃないんだ。たぶん」

ここでケイアスがくるつと反転し、アローンに向かってキザな仕草で腰を折った。

「おっと、あいさつが遅れちまったな。俺はケイアス。年は二十三で、こいつと同じ傭兵さ」

「アローンよ。年は十三。彼と一緒に故郷へ帰る途中なの」

「一緒に故郷？　って、ウイズお前……。この嬢ちゃん、たしかに将来まちがいなく美人になりそうだが、十三の侶伴りよはんつてのは……」

「阿呆あほ、子供の冗談まゆねを真に受けるなよ」

ウイズが眉根まゆねを寄せて言うのと、「あら、本当のことじゃない」とアローンがかえして微笑む。

そんなやりとりを眺めてケイアスは、めずらしい、と素直に思った。ウイズには容易に他人を踏みこませない

壁がある。ケイアスだっていまのように気安い関係をき  
ずくののにずいぶんと時間を要した。それでもまだ彼の本  
当にデリケートな部分にはふれられないし、ふれさせて  
もらえる気がしない。その点このアローンという少女は  
なかなか気を許されているようだった。

「オーケーオーケー、侶伴でも保護者でも隠し子でも事  
情は詮索しねえよ。それより頼みがあるんだ。ここであ  
ったもなにかの縁。いつちよ仕事を手伝っちやくれねえ  
か」

「仕事？ 傭兵関係か」

「いや、それならギルドに顔出しやすむことだ。今回  
のはもつとずつとビッグだぜ」

「ビッグ？」

ケイアスは社交性が高く、友人が多い。傭兵仲間はもちろん、さまざま様々な町の住人や商人、貴族や地方領主にまでコネクションを持っている。しかし、こたび彼が告げたのはそれら上流階級の貴人すらかすむほどの……この世界の核ともいうべき機関の名だった。

「聞いておどろけ。依頼主はルーン教の総本山——神殿庁さ」

## 第三章 静寂の村

俺おれは生まれ故郷こきょうを守りたかった。

その思いに嘘うそはない。

けれど、思えばかなうわけではない。

願えば届くわけではない。

どうしようもなく足りなかったものは——力ちから。

軽傷多数、重傷数名、死者0。

三桁けたにせまる魔物の群れに襲われ、半数以上の家屋が

黒炎に焼かれた惨状において、その結果は奇跡としか言いようがなかった。ウーテは、山奥の小さな村だ。住民の多くが年寄りで、満足にたたかえる者などほとんどいなかった。

だから、ことごとく魔物をほふり、ただひとりの犠牲者すら出さず村を守り抜けたのは、ひとえにアルルク・ディーン——光かがやく騎士剣をふるう少年のおかげだった。

「すげー、いったいなにがどうしちまったんだよ、アル」

「お前のおかげで村は守られた。礼を言うぞ、アル」  
「ありがとう、アル、娘を助けてくれて本当にありがとう

う……！」

アルルクルのまわりに集まった村人たちが、惜しみない賛辞さんじと礼謝れいしゃで彼をもてなしている。

俺は少し離れたところに立ち、その様子をぼーっと眺めていた。自分のまわりには誰もだれいないし、誰が声をかけてくることもない。当然だろう。なんの貢献もしていないのだから。

けっきょく俺は魔物一匹追いはらうことすらできず、逆にあっさり殺されかけたところをアルルクルに救われたらしい。途中で気絶したので自分では覚えていない。目を覚さましたときにはもう、すべておわったあとだった。

「それである。その剣はどうしたんだ？」

村人たちの注目が、光かがやく騎士剣に移った。

「聖ルーン様がくださったんです、空から降ってきて……」

さすがにみながいぶかしい顔をすると、アルルクルは助けを求めるところにこちらに視線を向けた。

「ウィズ、ウィズは見てたよね？」

「ああ、見たよ」

俺は短く答えた。たしかに天から剣が降りそそぐのを見た。聖ルーンの姿は見ていないが。

それから数日後、北街道のほうから、騎乗した騎士の

一団がやつてきた。

彼らは村に到着するなり人探しをはじめた。そしてアルルクルを見咎めると、乱れなく整列し、直立不動の姿勢で言った。

「アルルクル・ディーン様とお見受けいたします。このたびの障門出現と聖ルーン様のご託宣にかんし法王猊下が謁見を求めておいでです。お手数ですが、なにとぞ神殿庁までご足労願えますでしょうか」

「え……ほ、法王猊下様に、し、神殿庁っ!?!」  
アルルクルが跳びあがって仰天した。法王はこの世界でもっとも強い権力と影響力を持つといっても過言ではない神の代弁者だ。直接的な隷属関係はないが、王都フ

インのドグムンド国王だつて法王にはさからえない。そんなのはるか雲の上の人物から声がかかったと知り、村中が驚天動地きょうてんどうちした。この瞬間、アルルクルはウーテ村の英雄となつた。

「あ、あの……神殿庁つてすごく遠いですよね？」

「大陸西端の砂丘地帯にございますため、ここからですとおよそ半月ほどでしょうか」

アルルクルは、続けて質問した。

「一緒に……ついてきてほしい人がいるんですが」

「従者をお連れすることはかまいませんが」

「じゅ、従者じゃなくて友達なんですけど……」

アルルクルがちらりと俺のほうを見た。俺はなににも答

えなかつた。眉間みけんにしわを寄せて難しい顔をしていた。予想外のリアクションだったらしく、彼はぎよつとして、「え……も、もしかして、来てくれないの!?! 嘘うそ、な、なんでどうしてっ!?!」

泣きそうな声で両手をばたばたさせた。まるで親にだだをこねる子供のようにな。

「落ちつけ、アル。うろたえすぎだろ……」

「だ、だつて、当然ウィズも一緒に来るものだ……き、来てくれるよね?」

さすがのような彼の眼差しまなざしを見て、ああ、と気づいた。

なんとという愚おろかな思いちがいをしていたのだらう。聖ルーンの託宣、光の騎士剣、それがなんだ。目の前にい

るアルルクル・ディーンはいままでと少しも変わっていない。なのに勝手に卑屈ひくつになっただけ、距離を取ろうとして……。親友が真の英雄になるかもしれないのだ、こんなに誇らしいことが他にあるか。彼が先に行ってしまったというのなら、追いつけばいい。いままでの何倍でも何十倍だって努力して。きっとそれが自分の役目、英雄の幼なじみとして生まれた自分の……。俺はにっこりと歯を出して勝ち気に笑み、アルルクルの頭をぱんとはたいた。

「行くさ。あつたりまえだろ。約束したじゃないか、一緒に村を出て世界中を冒険して、アーカーシャみたいになるって。もしお前が本当にえらばれた英雄だっという

なら、俺は意地でもついていくぞ、そしてお前の横に並び立つ。最高の相棒として！」

「……うんっ！」

アルルクルが涙袋に浮かんだしずくをぬぐい、満面の笑みでうなずいた。俺の同行を心から喜んでくれているようだった。こんなにも頼りに思ってくれていたのだと知り、嬉しさと誇らしさがこみあげた。

だから気にしない。

——はあ……ウィズじやなくアルがわたしたちの息子ならよかったのに。

神殿庁へと出発する直前、義理の母親がぼそりとそう言うのが聞こえても、俺は気にしなかった。

× × ×

「——ズ。ウイズ、ねえ、ウイズったら」

少女の声が引き金となつて、ウイズ・ヴァイスは我にかえつた。

「どうしたのよ、ぼーっとしちやつて」

「いや、別に」

そっけなく答える。昔を思い出していたとは言いたく  
なかつた。

「仏頂面ぶつちやうめんしてないで、ほらもっと目をあけてさ、景色けしきでも楽しみなさいよ」

「景色、ね」

両手をひろげたアローンが、裾野すそのの風景をすすめてくる。並木となつて続くモミヤトドマツ、樺かばの木などが朝靄あさもやにからみ、静かでおごそかな雰囲気をつくりだしていた。あとは——山麓の中ほどに位置するゆるいのぼり坂に、特に見るべきものはない。

「まあ、白樺しろかばはわりと好きだ」

「あら、よかつたわね」

「お前がついてこなければ、もっとよかつたんだがな」  
「べー、おあいにくさまでした」

かわいらしい小さな舌したを出し、アローンはいたずらっぽく笑つた。

「覚悟を決めることね。いまさらわたしを追いかえすなんて、できやしないんだから」

山奥にある小さな村の調査。

それが昨晚、傭兵仲間のケイアスから請け負った依頼の内容だった。

ウィズは二つ返事でこれを引き受けた。理由は、危険度が低そうだったことと、資金不足。もともと持ちあわせが少なかったのにくわえ、昨夜アローンが大変な大食女ぶりを発揮してくれたおかげで、路銀がほぼ底をついていた。これでは旅に出るどころか、今日寝る場所すら確保できない。町にとどまり仕事をする必要があった。ならばコネもツテもないメンザスのギルドで新参者とし

て仕事を探すより、ケイアスの依頼に相乗りするほうが  
確実に信用もできる。そう思ってたのだった。

じっさい実入りはかなりよかった。前金として渡され  
た銀貨は、それだけで楽にひと月暮らせるほどだった  
し、調査をおえればさらに同額もらえる予定になっ  
てい。最初に聞いたときは眉唾まゆつばに思えたが、さすがは神  
殿しよくだくの囑託しよくだくとあったところか。

（もちろんそのぶん警戒しなくちゃならないが）

いくら安全を重んじても傭兵稼業をいとなむ以上、命  
の危険はつねにつきまとう。だからこそ本当ならば  
りつけてでもアローンを町に残しておきたかったのだが、  
「連れていかなければなら、わたしひとりで勝手に行動する」

と脅おどされては同行させるよりなかった。

「お前、一刻も早くスノーウエルの家族のもとに帰りたいんじゃないのかよ」

「帰りたいわよ。お母さんたちにも会いたいわ」

「それなら」

「でも、まだ時間がありそうだから、少し寄り道してもいいかなって」

「時間？」

「時間。有限でしょう、誰にとっても、なににとっても」

「そりゃそうだろうが、言いかたが気になったんだよ」

「そうかしら」

「はぐらかしててるだろ」

「あら、乙女おとめには秘密の一つや二つあるものよ」

「困りごとや、悩みがあるんじゃないのか？」

アローンは微笑ほほえみを浮かべて、小さく首を横にふった。

「別に、ちよつと考えていただけ。残された時間がなくなつたときのこと。あなただつて考えたことあるでしょ」

死について言っているのだから。どんな幸福もどんな苦しみも、永遠ではない。心の傷は癒いえ、激情は風化し、やがて命そのものがおわりを迎える。すべての生物に等しくもたらされるもの。ただそれは、十三歳の少女が思い悩むことではない気がする。

「はあい、ここまで。このやりとりはもうおしまい」

アローンがぱんと両手をたたき、  
「ぜんもんどう禅問答より飯の種よ、飯の種。ねえ、ケイアスはいま

ごろなにしてるのかしら」

強引に話題を切りかえられてしまった。とはいえウィズは現実的な話のほうを好むので、やぶさかではない。あごに手をやって、すぐに答えた。

「さてな。神殿庁から派遣される司祭と合流するって話だったが」

「司祭ってどのくらいいるの?」

「かなりえらいよ。した高僧の中では下っ端ぽだが、なにせしんりよく神力が使える」

「神力……つて、からだの怪我<sup>けが</sup>を治せるっていうあれよね。本当なのかしら、さわっただけで痛みが取れるなんて、ちよつと信じられないわ」

神力は、ある。実在する治療術だ。ウィズはじっさい何度も、神官の治療術の恩恵を受けてきた。司祭クラスなら怪我<sup>けが</sup>の治りを早める“促進”の奇跡<sup>せいせい</sup>が精々<sup>せいせい</sup>だろうが、さらに徳の高い大司祭や司教になると、怪我そのものを治す“治療<sup>ちゆ</sup>”や、欠損<sup>けつそん</sup>部位を完全復活させる“再生”すら可能となる。これら癒<sup>い</sup>やしの術はルーン教高僧の独占技術で、古代魔法文明に端<sup>たん</sup>を発<sup>はつ</sup>する魔術師の魔術ではけっして成しえないものだった。

「神力はなあ……たしかにからだは治るんだが、痛みま

で消えるわけじゃないから、あまり世話になりたいものじゃないな」

「ふーん。あ、そうだ、村の様子はどうなってると思う？ どうして連絡がつかなくなっただらろう」

「流行病はやりやまいえきびょうや疫病じゃないか」

ウィズは無難な推論を口にした。じっさいその可能性が一番高かった。これから調査に向かうのは住民百名そこそこのとても小さな村落で、基本的には自給自足。代表者が月に一度ふもとのメンザスメンザスにおりてきて農産品を売買することで、町との交流が保たもたれていたらしい。しかし最近、それが二度続けておこなわれなない事態が起きた。二ヶ月間、村の住民とコンタクトが取れていない。

なんの連絡もないままに。

つまり村の様子を確認して報告するのが、ウィズに与えられた仕事だった。なぜそんな依頼を神殿庁が直々じきじきにくだすのかはもちろん疑問の種だが、一傭兵にすぎない彼に答えが導きだせるはずもない。

「病なら原因は水か食べ物……いずれにしる直接行ってみるしかないな」

ウィズは腰の剣に手をやり、どうかこれを使うことがないようと祈った。さすがに刃こぼれした代物を携帯する気にはならなかった。露店で新調したのだが、手が届くのはセール品の安物。相棒と呼ぶにはかなり心許こころもとない。

「病ねえ。もしかしたら盗賊や傭兵くずれが占拠してるのかも」

「やばそうなら逃げる。盗賊退治なんて冗談じゃない」  
「ぱつとしないなあ。俺が村を救ってやるくらい言いなさいよ」

「それは救う力量を持つ人間しか吐いちゃいけないセリフなんだよ。俺みたいのはただ、できる範囲でやれることをやるだけだ」

「はあーあ、現実はいーカーシャ物語みたいにはいかないつてわけね」

そう言った直後、相手の表情が微妙に変化したのを、アローンは見逃さなかった。

「きらいなの？」

「好きだったよ」

ウィズは前を向いたまま答えた。

「子供のころは」

× × ×

英雄一行が、出立しゅつたつの朝を迎えた。

彼らはいよいよついに、本格的な魔人探索の旅へと乗りだす。

フィン城の大門には、きつちりと正装した城の要人、大臣、貴人、そして兵士たちがずらりと居並んでいる。

混乱になってしまっているので国民には知らされておらず、大  
門に集まっているのは王城関係者だけだった。

国王や王妃はまだ姿を見せていない。しかしドグムン  
ド国王は遅れることで尊大さを誇示できると考えるよう  
な傲慢ごうまんな為政者いせいしゃではないので、たぶん、ほどなくやって  
くるだろう。

英雄たちが適当な雑談をしていると、そこにひとり  
の兵士が近づいてきた。昨夜のごたごたにまじっていた近  
衛兵だ。

「アルルクル殿。興味本位でたずねるようで恐縮な  
のだが」

そう前置きした上で、彼は質問した。

「つまるところ魔人とは、どのような存在なのだ？

我々は魔の根元へデモン<sup>く</sup>の眷属<sup>けんぞく</sup>で世界を滅ぼす力を持つつ、ということ以外ほとんど知らないのだ」

アルルクルは気軽に応じ、話せる範囲の真実を彼に伝えた。

「ぼくたちはまだ、七匹のうちの一匹としか対峙<sup>たいじ</sup>していません。だからすべてを知っているわけではないのですが……。少なくともアコロシア大陸でたたかっただのは、魔人という形容<sup>はがね</sup>どおりの怪物でした。身の丈<sup>たけ</sup>はお城の二階より高く、鋼<sup>はがね</sup>よりかたい漆黒色<sup>しつこくいろ</sup>の体軀<sup>たいく</sup>をしていて、両肩にボロボロにただれた翼、血の色より赤いまなことから岩をも溶かす熱光線を――」

「わ、わかった、ありがとう。人外の徒とであること、じゆうぶんに承知した」

兵士が右手をあげて、うなずく。どうやら本当に聞きたいのは魔人の姿形ではないらしい。彼はちらちらと左右に視線をやっはてから、あたりを憚はばるかように小声で、

「それで、だ、このコーズ大陸の魔人のことなのだが、その……存外近くにいて、ということはないのか？ よもや王都にひそんでいまいとは思うのだが……」

「安心なさい。ここにはいないわア」

プラリネがきっぱりと否定した。

「アタシの魔力探知に反応は皆無だし、聖ルーンの直加護を受けたアル坊は、魔人が近くにいればその存在が気

配でわかるの。だからいくら隠れひそんでもムダッてわけ」

うなずいたアルルクルが、言葉を引きつぐ。

「現にアコロシア大陸のときは、そうやって気配をたどって追いつめました。だから断言できます、いま王都周辺に魔人は絶対にいません」

兵士はほっとして、「それを聞いて安心したよ」と言った。旅を続けるあいだ、こうして魔人の所在をたずねられることはままある。アルルクルたちにしてみればいつものことだった。

と、次の瞬間、まわりにいた兵士たちが、あわてて英雄から離れていった。背後から王女殿下——リルメリア

姫がそつと、近づいてきたからだ。まつげが長くぱつちりとした瞳ひとみに、ほっそりしたあごと、小さな鼻と口、金茶色の髪にダイヤのティアラをのせ、あでやかな光沢をはなつ純白じゆんぱくのガウンを身につけている。そんな高貴なたたずまいに反し、物腰はやわらかく繊細で、まさに英雄に救われる姫君を体現したような王女だった。

「……行ってしまわれるのですね、アルルクル様」  
リルメリア姫はそう言つて、悲しそうに目を伏ふせた。  
「まだ王都内乱から日も浅いですし、せめてもう少し、とどまっていたただくわけには」  
「リルメリア様。ぼくたちはもう二度と、くりかえしてはならないのです」

「くり、かえす……？」

姫は、英雄の瞳に深い後悔と悲しみの色を見いだした。  
「姫様もご存じかと思いますが、魔人が覚醒したアコロ  
シア大陸は大地の三分の一が荒廃こうはい……二度と人が住めな  
い腐乱土ふらんどとなつてしまいました。……ぼくたちの到着が、  
遅れたせいで」

「アルルクル様……」

「人も動物も植物も生存を許されず塵ちりと灰と泥濘でいねいだけが  
どこまでも広がる……地獄。あの光景を見てぼくは誓つ  
たんです。もう二度と、絶対、魔人の好きにはさせない  
つて」

「……たいへんな、お役目なのですな」

「いえ、そんなことはありません」アルルクルはにっこりと笑い、「みんなが応援してくれそうですから。みんなの期待や笑顔がぼくの力になるんです。だからもしリルメリア様から笑顔がたまわれれば、ぼくはなんだったってできちゃいます」

「そ、そんな、わたくしなどに、そんな……」

リルメリアはあたふたと視線をさまよわせ、それからなにかを決意するようにぎゅっと胸の前で両手をにぎった。潤<sup>うる</sup>んだ瞳で上目づかいにアルルクルを見あげて、「あ、あの……アルルクル様、その、もし魔人討伐のお役目がおわったなら、そのときは……そ、そのときはわたくしと、わたくしといっ……」

「はい。必ずや姫様にも勝利の報告にうかがいますー！」  
「そっ……」

数秒かたまつたあと、リルメリアはかろうじて微笑し、  
言った。

「よ、よい報告を、期待しておりますわ……」

「バアーカ」

王都フインを出立し、北街道を歩きだしてすぐ、プラ  
リネがあきれ声で言った。

「い、いきなりなに!? いまの、ぼくに言ったの?」

あきらかに視線が自分に向いているので、アルルクル  
はおっかなびつくくりたずねる。

「ぼく、プラリネになにかしたっけ？」

「アル坊アナタ、アーカーシャ英雄物語に憧れてるのよねエ？」

「そ、そうだけど……」

「わかつてるのオ？ さつきしょうがいゆいつ生涯唯一無二むにかもしれないビッグチャンスを逃したって」

「え……つと、なにが？」

「だからア、セツかく王女様が……ううん、いいわ、忘れなさい」

言わなくてもいいことまで言ってしまう気がして、プラリネは会話を打ち切った。英雄の仲間として旅に同行している以上、自分の気持ちを打ち明ける気は毛頭ない。

けれどだからといって、わざわざ姫殿下に塩を送ってやる義理もないのだ。

「それで、行き先はどうする」

キルシュが生真面目な顔で問うと、小さな手がちよこんとあがった。

「よろしいですか？ 神殿庁からの情報なのですが」  
みな視線がユフィールに向く。

「北方方面の村々のいくつかから、人が忽然と姿を消してしまったと……」

「人が消える？ 神隠しか？ 人為的な犯罪でか？」

「申し訳ありません。具体的なことまでは……」

英雄随ずいこう行神官たるユフィールとて、神殿庁のすべてに

通曉つうきょうしているわけではない。むしろ知らないことのほうがはるかに多い。組織に属するとはそういうことだ。「関係者の方からそれとなくうかがっただけで、真偽のほども不明なのです」

「空振りにおわる可能性もあるわけか」

「考える必要なんてないよ！ 行こう！」  
アルルクルがきっぱりと言い切った。

「そんな話を聞いたら見過ごせないよ。もしなにもなかったとしても、困ってる人はいなかったってことだから、それはそれでいいでしょ？ だから行こう、北東へ！」  
キルシュ、プラリネ、ユフィールの三人は互いに顔を見合わせ、ふっと微笑した。

それでこそアルルクル・ディーン。自分たちが想い慕う英雄だった。

× × ×

朝靄あさもやははれ、木立こだちのおおう頭上には太陽の光が淡い線になつて降りそそいでいる。

山道をのぼり続けた二人は、そろそろ目的の村にさしかかろうとしていた。地図によるともうすぐ到着するはずだ。ウィズが気を引きしめなおそうと小さく息を吐いたとき、隣のアローンがふいに足をとめた。そして言った。

「声が、聞こえた」

目を細めて山の上方を見つめている。

「ん……声？」

ウイズにはなにも聞こえなかった。しかし彼女には確信があるようで、次の瞬間、いきなり走りだした。

「なっ、おい……」

「助けを求める声がしたの。お母さんに助けを求める、子供の声が！」

アローンはそうさげぶと、どんどん山道を駆けあがっていく。

速い。彼女の同行を認めたまうひとつの理由がこれだった。町で身体能力をたしかめてみたところ、おどろ

くほど足が速いことが判明したのだ。いまも華奢な体軀きやしやたいくで地を蹴けり、見る間に先へ先へと進んでいく。跳ねるように軽かるやかな疾走は、まるでカモシカの跳躍だった。ウイズは必死に追いかけた。ほとんど全速力で走っていた。それでも彼女のほうが速く、追いつけない。有事の逃亡に利すると思っていた能力なのにとんだ誤算だった、これでは危険に飛びこもうとする彼女をとめられない。かささ、と真横の茂しげみで音がして、なにかが飛びだしてきた。

「——た、助けてくれえ！」

茂みをかきわけて姿を現したのは子供……ではなく老人だった。しわだらけの顔に焦燥しょうそうを浮かべ、ウイズの横

腹にしがみついてくる。

「あ、あんた旅人が冒険者か!?　お願いじゃ、ど、どうかわしらを助けてくれえ」

懇願されて、ウィズは困惑の色を浮かべた。アローンの背中ははるか小さく、ほとんど見えなくなってしまうている。しかし、この老人をほうり捨てていくわけにもいかない。

「わかったよ、落ちつけ。あんた、村の住人か」

「そ、そうじゃあ。村が、わしらの村がつ！」

「なにがあつたか、簡潔に教えてくれ」

「いきなり無頼者ぶらういの集団がやってきて、村をめちやくちやにしおつたんじゃない。あいつらきつと食ぐい扶持ちのなくな

「つた傭兵か盗賊じゃあ」

目的の村に足を踏み入れたウィズは、真っ先に白髪の少女を探した。

「アローン！」

村にはうっすらと白い霧がただよい、遠くを見とおすことができなかつた。点在するかやぶぎの家はどれもひとつそりとして、どことなく陰気いんきな雰囲気をまとっている。どちらを見まわしても人の気配はまったくなかつた。

「アローン、いないのか。アローン！」

声がこだまして響く。何度か名を呼ぶと、しばらくして応答があつた。

「こっちよ、ウィズ」

ウィズはほっとして、声のほうへ向かった。ボロ布の老人が先導を買ってでたが、断って並び歩く。アローンは村の真ん中あたりの家——集会場かなにかなのか、他よりずいぶん大きく入り口が広い——の前に、たたずんでいた。

「どうしたんだ、子供は見つかったのか」

「えっと、ね……」

二人を出迎えた彼女は、ひどく混乱というか、狐きつねにままれたような顔をしていた。

「いた、というか……」

つぶやき、もの言いたげな視線を家屋かおくへと向ける。戸

板が外された入り口は、闇色やみの口をぽっかりとあけ、見るものを誘いこもうとしているようだった。よくよく耳をすませると、中からカチャカチャと、奇妙な音が聞こえてくる。

「あなたも見てみて」

アローンが半身になって道をあけた。うながされるまま家に近づき、入り口から中をのぞきこむ……。

内部は、半壊していた。

一階部分の床板は半分以上がめくれあがるか、くずれるかしており、その下の様子を見おろすことができた。薄暗い地下に、うごめくものがあった。むきだしの骨をかたかたと動かし、からだのてっぺんにしやれこうべを

のせた——生ける屍しかばね。

「……死骨スペクター」

それも一体だけではなかった。明かりのもとで確認できただけで、二、三体はいる。まるでそうすることがしゾンデートルであるかのように、暗い地下室の中をうろうろと動きまわっている。ウィズはそつと家から離れた。

「この村、いったいどうなってるの」

アローンが頭上を見あげた。空には太陽が出ているはずなのに、木漏れ日こもの恩恵がほとんど感じられない。村に充満する冷たい靈感が、光を拒絶しているようだった。

「それに子供……。わたし、まちがいなく、子供の声を聞いたのに」

「子供？ それはきつと、空耳じやろう……」

抑揚のない低い声が、静寂せいじやくの村に響いた。

「なにせこの村の住人はすでにひとり残らず……死んでおるんじやから」

老人は、いつの間にか手にしていた短刀で、背後からアローンをひと突きにした。

アローンの背中では完全に無防備だった。

しかし彼女のからだは血に染まることはなかった。いち早く反応したウィズが、横からその短刀をたたき落としたからだ。

「……ほう、ただの雑魚ざごかと思いきや、なかなかどうして」

獲物をはじめとばされた老人は、なんらあわてることなく、濁にごった眼をウィズへと向ける。ウィズはうしろに跳びのき、あらためて剣をかまえなおした。

「……お前が、死骨スペクターどもの親玉だろう。はじめは操ってるやつとグルか、脅されてるのかとも考えたが」

「なぜ、そう思う」

「カムフラージュが杜撰ずさんなんだよ。一度でもかいだことがある人間ならかぎわけられる。お前からただよってくるかすかな、死臭ししゅうを」

「死臭……」

老人はすんと鼻をならし、いくぶん感心するように言った。

「指摘されたのは、はじめてじゃ。移り香など、香料と無臭粉末でいくらでもごまかしがきくと思っておったが……其<sup>それ</sup>でわしを警戒し、横にはりついてたというわけか……」

偽装の化けの皮をはいだ老人は、首をかたむけてごきりと鳴らし、

「貴様、何者じゃ？ つりあいがいささか不安定。腕は悪いのに、勘が鋭い」

「さあ。本当は力を隠してるだけなのかも」

「くく。其なら先の攻防で、とつくにわしを両断しておるだろうて」

ウィズは底知れなさを覚えて、ふるえた。あのたつた

一度のやりとりで、こちらの力量を見抜かれた。弱いことが、ばれている。

「アローン、俺のうしろに。早く」

「とにかくまあ、死のにおいを知る人間なぞ、そうはおらんよ。なにせ出くわせば大概その仲間になっちまうんじゃないから、の」

言うや、老人がよぼよぼの老体にあるまじき快走をくりだし、家屋の前にたたずむアローンへ猛然と襲いかかった。ウィズは衝突点に先まわりして、彼女をかばった。

としゅくうけん

しかし、老人のはなつた徒手空拳は圧倒的な暴風となつてウィズのからだを浮かびあがらせ、アローンもろとも家屋の中まで吹っ飛ばす。

「死なばもろとも。なかよく魔人復活の礎いしずえとなるがええ」

二人は床の抜けた階下まで落下していった。  
生きて屍——死骨スペクターどもがうずまくその場所へ。

## 第四章 魔人信徒

死骨<sup>スペクター</sup>とはじめて対峙<sup>たいじ</sup>したのは、十二歳のとき――

師キルシュ・ラムヒルドにつれられて向かった、魔の洞窟<sup>どうくつ</sup>という場所だった。

洞窟内には死のにおいと魔性が立ちこめていて、立っているだけで寒気を覚え、身ぶるいがとまらなかつた。たたかうどころではない。しばらくのあいだは腹に力をこめて、どうにか気を保つのでいっばいだった。こめて、<sup>スペクター</sup>死骨は不死身だ」

「よく聞け。死骨は不死身だ」

師の凜<sup>りん</sup>とした声音が、薄暗闇を切り裂いて響く。

「ばらばらにしようが、たたきつぶそうが、何度でもよみがえる。だが不滅ではない」

「で、でもキルシュ師匠、いくらなんでもこんな木の剣じゃ……」

アルルクルが抗<sup>こう</sup>するように言った。彼は先ほどから何度も死骨<sup>スペクター</sup>に立ち向かい、木剣で打ちたおしていた。しかし、何度ばらばらにしてもすぐに骨と骨をつなぎあわせてよみがえってくる。おわりのないいたちごっこに、アルルクルの疲弊<sup>ひへい</sup>が色濃くなっていた。

「木剣だろうと関係ない。臂力<sup>りきりよく</sup>だけで剣をふっているうちには、いくらやっても無駄<sup>むだ</sup>だ。いいか、不死者どもを滅<sup>めつ</sup>

すのは力や技ではない。必要なのは不断の生命力」

アルルクルから木剣を取りあげたキルシュは、それを死骨スペクターに向かつてひとふりした。

彼女の一撃は——ただの木の棒で殴ったただけなのに

——きらめく光の軌跡を描き、死骨スペクターの胴体むくろを一刀両断し

た。切り口に付着したまばゆい白光が骸むくろの内部に浸透す

ると、かがやく粒子となつて天に立ちのぼり——死骨スペクターは

蒸発して跡形もなく消え去った。

「剣を道具と思うな。内在する生命の波動をめぐらせて、剣と己を同一化するのだ」

「生命の、波動……同一化……」

アルルクルは木剣をじいと思つめて、師の言葉を解釈

しているようだった。

奥の通路からかたかたと不穏な音が響いてくる。死骨スペクターの群れがこちらに気づき、殺到してきた。殺到してアルルクルに襲いかかる。キルシュが冷たく言いはなつた。

「世界を救うというお前の言葉が戯ざれ言ごとでないのなら、力を示せ。滅してみせろ。できぬなら、ここで果てて死ね」

「……ぼくは、まだ死ぬわけにはいかない。聖ルーン様に約束したんです、みんなの笑顔はぼくが守るつて。だから……こんなところでは、死ねないんだああ！」

おたけびをあげたアルルクルが、死骨スペクターの群れに飛びこ

んだ。左足を大きく踏みこみ、下段にかまえた木剣を、  
死骨スペクターどもに向かつてふりあげる——  
閃光せんこうが走った。

目もくらむまばゆい光がアルルクルを中心に、またたいた。彼がにぎりしめる木剣には燃えさかる生命を具現化したような、白い光の炎が帯となつてまとわりついていた。十体以上いた死骨スペクターはその一撃で残らず両断され、幻想的なきらめきをはなち、宙に溶けていく。

「そうだ、それでいい。それこそが我が——」  
アルルクルは、そんな師の言葉を無視して、いきなり走りだした。

「悲鳴が聞こえたんです、下のほうから。助けに行かな

いと！」

彼は生命の刃が成功した喜びにひたるでもなく、師からねぎらいの言葉をもらうでもなく、真っ先に人を助ける行動を取った。階段を駆けおりて地下二階へ突入していく。地下二階は死骨スペクターの数も強さも段ちがいになるので、けっして踏みこんではならないと最初にきつく厳命されていたが、アルルクルはためらわない。

師キルシュはそんな——あわただしくも勇ましい弟子の背中を見つめて、微笑びしょうしていた。きつとこれが、彼女がアルルクルを英雄と認める最初のきっかけだったのだらう。

「あ、あの、師匠……」

すっかり取り残り残され俺がおずおず声をかけると、キルシユは□もとをきつく引きしめなおし、じろりと瞳ひとみをこちらへ向けた。

「なんだ……お前」

あたかも虫けらでも見おろすような、冷たく、色のない眼差しで。

「まだいたのか、ヴァイス」

「……あの、俺も、アルと一緒に」

「やめろ。地下二階下はお前には荷が勝ちすぎる。ここにいろ」

「でっ……」

「わからないのか？ ヴァイス、邪魔なのだ、お前は」

師は懐から数枚の札を取りだし、地面にほうりなげた。  
「浄札じよしふだを置いておく。もし動きだしそうな個体があれば  
それを貼って浄化しろ。グズなお前にもそれくらいはで  
きるだろう」

そう言うと悠然ゆうぜんときびすをかえして、階下へおりてい  
った。

俺は右手の木剣をきつくにぎりしめながら、彼女の背  
中を見送った。剣がぶるぶるとふるえていたのは、きつ  
と……力を入れすぎていたせいだ。

× × ×

スペクター

死骨すくつ使いの老人に殴り落とされた先は、うごめく死者どもの巣窟すくつだった。

半壊した家の地下。

ほとんど日がさしこまず、冷え冷えとした冷気がただよう地下室は、奇妙な構造をしていた。まわりの壁も、踏みしめる床も鉄でできていた。壁と床がすべて鉄でおおわれている。床はなぜかなめにかたむいており、等間隔に溝みぞがほられていた。一見すると雨漏り対策のようだが、ウィズはもつと暗い、陰々滅々いんいんめつめつとした寒気を覚えていた。斜面の底側からただよってくる血のにおい、明確な負の意図を感じた。この地下室はきつとなにか、おぞましい目的のためにつくられている。

ウィズは立ちあがって、剣をかまえた。落下しきる直前にどうにか地面に長剣をつきたてて勢いを殺せたので、左肩のしびれはあるが動けないほどではない。アローンのほうは曲芸じみた宙返りで見事な着地を披露したため無傷だ。目をこらすと、暗闇の向こうにぼんやりと、いくつものしゃねーうべがちらついていた。数は一、二、三……。

「くそっ、何体いやがるんだよ」

「この部屋にいるのは五体ね」

夜目がきくのか、アローンが伝えてくる。

「武器も持ってる。ボロボロにさびた剣」

「あいつらの他には」

「なにもないし、誰もいないわ」

地下室には、他にはなにもなかった。奥にほのかな明かり——通路らしきものが見えるが、立ちふさがる群れを突破しなければそちらへ行くことはできない。

対峙する死骨どもを眺めていたアローンが、あることに気づいた。

「なんだかあいつら、ウィズばかり見てない？」

「……お前もそう思うか」

しやれこうべの頭部は、みなウィズのほうを向いており、アローンの存在をまるきり無視している。

「なんで？」

「俺が知るかよ」

「ウィズのほうがおいしそうに見えるとか」

「こいつらは死腐アンデッドじゃないから、人の肉はくらわない。

それにうまそうって話なら俺よりお前を——」

おしゃべりはそこまでだった。かたかたかたと骨のきしむ音が、ことさら大きくなった。闇をぬって、不死者どもが一斉にウィズに襲いかかる。

「さがってる、前に出るなよ！」

アローンに指示し、敵を迎えうつ。ありがたいことに、すべての個体がウィズに殺到した。ウィズは防衛に専念した。いや、敵の攻撃がはげしすぎるために攻勢に出ることができなかつた。剣を打ち合い、はじかれて地面にひざをつき、ふりおろされる一撃をすんでの

ところでよけ、また打ち合う。五体の死骨相手は、彼の  
キャパシティー<sup>実カ</sup>を大きく超えていた。すぐに押し負け、  
部屋の隅へと追いつめられていく。

——剣を道具と思うな。内在する生命の波動をめぐら  
せて、剣と己を同一化するのだ。

（……できねえよ、意味わかんねえ、なんなんだよ生命  
の波動つてのは）

想起された師の言葉に、心中で毒づく。

（あれから何年も経<sup>た</sup>つたのに、けつきよく俺には——）

生命の刃はつくれない。神官でないから浄化もできな  
い。浄札はある。万一のそなえとして、懐<sup>ふところ</sup>にしのばせた  
ものが数枚。しかし、いつ斬り殺されかねないという現

状では、とても使う隙がなかった。

どん、と背中にかたいものがぶつかつた。

壁だ。いよいよ追いつめられた。正面に二体、左に一体、右に二体。逃げ場はない。

覚悟を決めたそのとき、異変が起きた。左の個体が突  
然、がくりとひざをつき、地面にたおれ、そのまま動  
かなくなる。光につつまれることも霧散することもなく、  
ただもの言わぬ骸むくろと化していた。ウィズは目の端に動く  
ものをとらえた。

(アローン!?)

ワンピース・ドレスの少女が、暗闇の中を跳びはね、  
白い髪を躍らせた。敵の背後から次々と短剣をつきさし

ていく。刀身をつきたてられた死骨は、最初の個体と同じようにばらばらになっスペクターてくずれ落ち、それきり動かなくなスペクターった。アローンが死骨どもをたおしたのだと、ウィズはようやく理解した。

「おとし囷に使ってごめんね」

最後の一体をしとめたアローンが、ほっと息をつく。

「あなたが集中的に狙われるなら、その習性を利用してやろうと思つて。でも、うまくいつてよかつたわ」  
小さな胸をなでおろすその様子は、万事想定どおりとあんどいうよりも、分の悪い賭けに勝つたと安堵あんどしているようだった。

「いまの……その魔剣の効果か」

「ええ。断<sup>た</sup>つたの」

「断つた？ なにを」

「ひ・み・つ。……知りたい？」

「いいよ、別に。たぶん説明されても理解できんし。それより礼を言うよ。俺ひとりだったら死んでたところだ」

「……」

アローンが琥珀<sup>こはく</sup>色の瞳をまばたかせ、じつと顔をのぞきこんでくる。おもはゆい気持ちになつてウィズは言った。

「だから、そのたまに無言になるのはなんなんだよ」  
「別に。あなたってそういう人なんだな、って思ったただ

け」

淡々とそう評された。にこりともせず真顔で言うので、評価がプラスなのかマイナスなのか判断がつかなかった。だが、それにしても胆きもがすわった少女だと思う。老人に殺されかかって、不気味な地下室に落とされて、死骨スペクターの群れに襲われて——普通の女の子なら泣きさげんでもおかしくないだろうに、どこまでも冷静をつらぬいている。「上には、あがれそうにないわね」

アローンが言った。見あげると、地上まではざつと五メートルはある。とっかかりのない鉄の壁では、よじのぼるのはたしかに無理そうだ。「それなら奥に進むしかない、か」

ウィズは、地下室にひとつだけある通路に視線をやった。等間隔に設置されたランプの明かりがゆるいカーブの奥まで続き、いざなうかげろうをつくりだしていた。

通路は、ゆるやかなくだり坂だった。

壁はむきだしの岩盤だが、床は一面鉄製で両端が溝になっっている。地下室の斜面底の受け皿なのだろうか。溝は通路の奥までずっと続いている。

しばらく進むと、天井が高く広い空間に出た。

他に道はなく、どうやらここで行きどまりのようだ。

風は吹いていないのに、場の空気がひんやりと冷たく感じられる。寒気を覚えるのは、鉄の床のせいだけではな

いだろう。

部屋の中央には、大きなくぼみがあった。大の大人が足を広げて寝られるくらいの大きさで深さは五十センチほど。最初の地下室から続く溝は、そのくぼみが終着点になっっていた。つまりあそこからここまでなにかを流していたのだ。なにかの、液体を。

「血、じゃないかしら」

「しゃがみこんだアローンが、くぼみのへりを指でぬぐった。」

「ほら見て、このにじみ。まちがいないわ」

「……気安くほいほいさわるなよ、他人の血なんてどんな病気持ってるかわからんのに」

アローンはうっすら赤くにじんだ自分の人さし指をじいと眺めてから、その先端をウィズの鼻面につきつけた。

「なめて」

「……感染症にかかっても最悪切り落とせばいいか」

「本当はなめたいくせに」

「冗談はもういいって。それより見てみるよ、壁」

視線を上に向けたアローンが「うわ……」とおどろく。

「なに、これ。不気味な絵」

巨大な壁画があった。二本角の巨大な悪魔があぐらをかき、そのまわりで裸の人間たちが服従のこうべをたれている——まちがいになく魔の根元へデモンを描いたものだろう。

「……異端の集会場。ここは邪教の隠れ家だっただんな」

悪魔の壁画。鉄の床。血のりがついたくぼみ。異端者の儀式に詳しいわけではないが、部屋の構造を見るに、ろくでもないなにかをおこなっていたら、はまちがいなかつた。

「——血と肉が大量に必要なのじゃ。死大腐を産むために」

地下空間に、しわがれた低い声が、こだまして響いた。ウィズははっとし、身を半転させて剣をかまえた。切っ先にボロ布をまとった老人がいる。

「死骨どもの反応が途絶えたゆえもしやと思っただが……」

よもや貴様程度の力量でしりぞけるとは……まこと不可解」

老人はいかにも意外そうに目を細めて、ウィズを見た。それから静かに右腕をかかげた。手には赤錆色あかさびの腕輪がにぎられている。

「こは呪就じゆじゆの輪臂たくふらという。魔の根元へデモン▽より与えられし信徒の腕輪」

「魔の根元へデモン▽……？」

アローンがぴくりと反応し、顔をしかめる。

「いかにも。もう察しているだろうが、この村は魔の根元へデモン▽崇拝者たちの根城だったのじゃ。とはいえ、わし以外の連中は、禁忌きんぎを犯す背徳感を味わいたいだけ

の似えせ非どもだつたがの」

「……」

「じゃから生贄いけにえとするのに、躊躇ちゆうちゆうはなかつたよ。村の連中も本望じゃろうて、死してようやく本物の魔の根元へデモン✓信徒となれたのじゃから」

老人は悪びれもなく言い切つた。

「しかし、だ。贄にえをささげ、祈つても、この地の魔人はいっこうにお姿を現しなさない。考えるに、混沌こんとんが足りないのじやろう。魔人を呼び覚さますためには、ちんけな村の似非信者どもだけではまるで足りぬ。必要なのじや。もつと……おびただしいほどの贄が」

ぺらぺらとなめらかに口を動かしながら、ウィズをじ

つと見据えている。観察している。絶対弱者が死骨の群れを駆逐したという事実が、老爺ろうやに警戒と慎重さを与えていた。

「この腕輪、呪就の輪臂は崇拜が力となる。想いが力となる。魔人への想いが強ければ強いほど、強大な力を与えてくれる……そういう腕輪じゃ。わしは忠誠心を証明

するため、まずはこの村の住人たちの血と肉をささげた。

次は主らの番、そして儀式により完成せし死大腐マーダーで、聖

ルーンの教義に毒されし人間どもを襲い、殺し、蹂躪じゅうりんし

つくす……さすればきつと、この大陸の魔人もお姿をお

見せしてくださるじやろうて」

「……逃げろ、アローン」

ウィズは声をふるわせて言った。

「逃がせる自信はまったくない、が、どうにか時間をかせぐから」

「は？ 逃げる？ 冗談でしょう」

アローンは鞘さやから刀身を引き抜いた。

「わたしもたたかう。二対一なら勝てるわよ。あいつがこの村の人たちを全員殺した……許せない。そんなやつをほうっておくなんて、できない」

まさかの返答にウィズは啞然あぜんとした。死骨スペクターどもをたお

したことで、気が大きくなっただろうか。アローンは濃緑色の短剣を逆手にかまえ、つまさきでリズムを取りはじめた。

「それにわたし、どんどんからだが軽くなってるの。なんていうのかしら……そう、ようやくからだの動かし方がわかってきた感じ」

無理だ、相手にならない。ウィズには確信があつた。半生、凡人と才人の能力差をはかり続けてきた彼にはある種の観察眼が身につけていた。相手のたたずまいや雰囲気から瞬時にその力量を見抜くという観察眼が。

そのはたらきが頭の中で告げている——この老人には絶対に勝てない。

「いいから隙を<sup>すき</sup>みて逃げろ、お前の脚力なら、もしかしたらどうにかなるかもしれない」

「いやよ」

老人が腕輪をかかげた。赤錆色の腕輪には、内部に大きなトゲが無数にとりつけられている。それを左手首に当てて、装着——トゲが肉にくいこみ、手首から血が流れてた。

「——」変貌。言葉にならぬうめきとともに、老骨がばきばきといびつにゆがみ、皮膚がただれ、肉の内側から黒色の表皮があふれでる。背中をつきやぶって不気味なつやをはなつ二枚の羽根が生え、たいく体軀がふたまわり肥大化した。

「なん、これ……冗談じゃない……」

ウィズはいよいよ恐怖に駆られて、さげんだ。

「アローン、早くここから——」

風を切る音がした。完全な化け物と化した老人が地を蹴ると、一瞬にしてアローンの懐まで到達した。

「えっ……」

アローンは呆ほうけて、自分をさしつらぬこうとする爪を眺めていた。敵の動きがあまりに俊敏しゅんびんすぎたせいで、まるきり反応できていなかった。

ウィズは決死の思いでアローンの前に飛びだし、老人に斬りかかった。

渾身こんしんの力でふりおろした一撃はしかし、硬化した表皮を傷つけることすらできず、ぱちんとはじけて押しかえされた。そして化け物の手から生えた鋭い爪が、ウィズの腹部をあっさりさしつらぬいた。

「ウイ、ズ……？ ……ウイズ！」

アローンは悲鳴をあげて、彼のからだを抱きあげた。持ちあげても、だらりとしたまま動かない。横腹に穴があいていた。穴は向こう側が見えそうなほど大きく、流れでる血は赤黒い。誰がどう見ても致命傷だった。

「どうして………なんで、あなたは………」

アローンは悲痛な面持ちおももで頭をふった。彼の行動がわからなかった。どうして命を投げだせるのか、なぜ助けてくれるのか。自分は彼になにもしていないのに。このままウイズは死んでしまうのだろうか。視界が絶望に染まっていく。

どうにか、なにかできることは………そう考え、頭をフ

ル回転させ、はっと気づく。ウィズとの会話を思い出した。神官の治癒。そうだ、それなら間に合うかもしれない。いますぐここを脱出して、町に戻って聖職者を探せば、まだ――

アローンは彼をそつと地面に横たえろと、立ちあがって怪物を見あげた。助けられる可能性があるかわかればこれ以上、こんなものにかかづらつていゝ暇はない。

右手の短剣をからだの前にかかげ、姿勢を深く沈める。人間らしさから遠のく気がして躊躇ちゆうちよしていたが、ウィズの命と比べられるものではなかった。全力を出す。出せるだけのすべての力を放出し、敵を討つ。一分一秒でも早く。

「ナンダ、主、雰囲気ガ……変……：ナツ！」

醜みにくい怪物と化した老人は、爬虫類はちゆうるいじみた縦目を、驚愕きようがく

の色に染めた。一瞬、眼前の少女が人間でなくなつたように見えたのだ。外見に変化はない。華奢きやしやで弱々しい女の子のまま。なのに、まとう雰囲気が、たちのぼる障気しょうきが、ランプの明かりでゆらめく影の形が、老人に理想を見せた。幻覚や見まちがいではない、彼が待ち焦がれた理想の体現を。

「フ、ハ、フハハ、ソウカ、ナゼソコニ転ガツテイル小僧ゴトキガト思ウテオツタガ、ソウイウコトカ。死骨スペクタード

モヲヤツタノハ小僧デハナク——」

アローンが歩を進める。一歩、二歩、三歩。老人はた

たかうかまえも逃げる素振りもせず、ますます声を大にして笑った。

「クハハハ、我が宿志ハ成就セリ！ 魔人万歳……魔人万歳！ ウジ虫ガゴトクワキデル弱体ドモヲ口減ラシ、オツクリナサレ。『退廃』——倣ならイ、デモンガ望ミシ真ノ理想キヨ——」

すつと音もなく、濃緑色の短剣が老人の額をつらぬいた。

老人は快哉かいさいをさげぶ表情のままゆつくりと、冷たくかたい地面にたおれた。

「デモンの理想郷……そんなもの誰も、望んでいないのよ」

目を伏せたアローンが、静かに告げた。  
「先に逝<sup>い</sup>ったエレオノーラもわたしも、誰も」

## 第五章 こだわりの理由

旅を続けるうちに仲間が増えた。

まず剣の師だったキルシュ・ラムヒルドが同行することになり、続いて魔術院で出会った宮廷魔術師プラリネ・オルトリン、最後に神殿庁から派遣されたユフイー・ローズヴァイセが加わって、パーティーは五人になった。『これで聖ルーン様の託宣たくせんどおり五人そろったね』とアルルクルが心底嬉しうれそうに言ったのをよく覚えてい

いくつかの障門しょうもんを封じたあと、俺たち五人は故郷のコーズ大陸を離れ、海を越えたはるか南のレイヴロウ大陸へ渡った。古代魔法文明時代の貴重な資料が保管されている古代図書館をたずねるためだ。

アルルクルはすでに英雄として神殿庁に正式に認定されていたため、一般人は閲覧えつらん不可能なあらゆる資料や書物の閲覧、さらに図書館館長から直接話を聞くことができた。

収穫はあった。

数百年前に滅亡したとされる古代魔法文明。その滅亡をもたらしした元凶こそが魔人であると判明したのだ。つまり魔人たちは一度、じっさいに人の世界と文明を破壊

している。当時の魔人と、これから現れる魔人が同一のものかまではわからないが、資料をひもとくと魔人の復活には法則性があるようだった。

『七つの大陸それぞれに魔人が一匹、現れる』

『魔人たちは定められた己の大陸から、他の大陸へ移ることはできない』

『七匹いっぺんに誕生することはなく、一匹ずつ順番に顕現けんげんする』

『魔人には名称があり、それぞれが名に則そくした特殊な力を宿している』

名称以上のこと——具体的な力の詳細まではわからなかったが、さらに文献を読みこむことで有力な手がかり

を得られた。古代魔法文明時代に最初の魔人が出現した場所は又・ベード——現代でいうアコロシア大陸——と記してあつたのだ。

俺たちの次の行き先が決まった。

古代図書館から港に引きかえす途中、盗賊に襲撃された。おそらくこちらが英雄一行とは知らなかつたのだろう。五十名ほどの大盗賊団は、息つくまもなく一瞬にして撃退された……俺以外を狙つた連中は。

アルルクルが剣のひとふりで十余名を一度に斬り伏せ、キルシュは目にもとまらぬ剣速で群がる敵を一掃いっそうした、プラリネは魔術弾で逃げようとする相手に追い打ちをか

け、ユフィールは治療を専門とする神官にもかかわらず肉弾戦で汗ひとつかかず十数名をあっさり打ちたおした。その中で俺だけが苦戦していた。俺だけがたつた二人の盗賊相手にぎりぎりの攻防をし、最終的にアルルクルに助けられたうえに右足を負傷してしまった。ヒ首あいくちをももにつきさされ、動けなくなつた。一刻も早くアコロシア大陸へ向かわなければならぬのに、自分のせいで野営と休息を余儀なくされた。

その夜、アルルクル、キルシュ、プラリネの三人は見まわりに出ていた。手持ちぶさたになつたので——プラリネの魔力感知でほぼいなきことが判明している——盗賊の残党探しへと出かけていた。だからテントには俺と

ユフィールだけが残っていた。彼女が俺の足を治療する  
ためだ。

「……安心してください。右足はちゃんと、治しますか  
ら」

ユフィールは年下で、やさしく、おんわ温和な少女だった。  
俺が傷つくたび献身的な治療と治療をほどこしてくれた  
し、他の二人のように直接的な言葉をあびせることは一  
度もなかった。

けれど俺は、本当はどんな罵詈雑言ばりぞうごんよりも、彼女の瞳ひとみ  
がおそろしかつた。彼女に見つめられるたび、ナイフで  
えぐられるような心の痛みを負った。

なぜなら彼女は俺を憐れあわんでいたからだ。

彼女は俺のあらゆる事象を憐れんだ。英雄の幼なじみとして生まれてきた運命を。英雄から盲目的な慕情ぼじょうを獲得してしまった環境を。聖ルーンの寵愛ちようあいから外れた不名誉を。そしてそんな愚にもつかぬ凡夫が身の丈にあわぬ大望にすがりついでいる滑稽こっけいきわまりない現実を。憐れんだ。

か？  
そういう関係性の機微きびを考えての選択だったのだからか？

ユフィールが、三人を代表して、引導いんどうを渡す役にえらばれたのは。それともほかの二人は承知しておらず、彼女の独断だったのか……いまとなつては知るよしもない。「ヴァイスさん……お話があります」

右足の治療がおわろうかという頃合いに、ユフィールがぽつりと言った。

「足の治療がおわったら、出て行ってください。アルルクル様がお戻りになる前に」

衝撃ではなかった。ついに来るべきときが来たのだと、そう思った。

「アルルクル様にはわたくしからうまく、伝えておきますから」

それだけ告げると、彼女は沈黙した。理由も理屈も説得もない、一方的な戦力外通告。

テントは静寂せいじやくにつつまれた。ユフィールはずっとうつむいたままでいるので、表情はわからない。

「なあ、俺は」

ただの邪魔者だったのかな？

そんな、同情を引くためのみつともない言葉をどうにかのみこみ、ただ静かに、治癒がおわるのを待った。そしてこの夜を境に、英雄パーティーは四人となつた。

たった一度でいい。

俺は、仲間になりたかつた。

みんなに仲間として、認められたかつた。

託宣から外れた偽物でもかまわない。

アルルクル、キルシュ、プラリネ、ユフィール、ただ俺もみんなに――

× × ×

目をあけると、すぐ、ベッドに寝かされているのだと気づいた。

おそらくどこか、宿の一室。

泉下せんかではない。生きている。腹の傷もふさがっている。

ゆっくりと上半身を起こすと、

「ウィズ！」

両手を広げたアローンが勢いよく抱きついてきた。

「よかった……本当に。もう、目が覚めないかと思った

……」

彼女の手はふるえていた。声も。

「ごめんなさい、わたしのせいで……わたしが、言うこと聞かなかったから……」

「いや」

ウィズはそっと彼女の頭に手をやり、さとすように言った。

「アロンのせいじゃないよ。なにかのせいっていうなら、俺が弱いせいだ」

「ウィズ……」

「正直、あのじいさんが化け物になってからほとんど記憶がないんだ。教えてくれ、あいつはどいつなんだ？」

「死んだわ」

アローンは、恬淡<sup>てんたん</sup>とした態度で言った。

「たぶん、あの怪物に変身する力に、肉体が耐えられなかったんじゃないかしら。わたしを殺す前に、苦しみだして、それで——」

「そう、か」

ありえない話ではない。というよりあの絶望的な状況を脱するとしたら——都合よく助<sup>すけ</sup>つ人<sup>と</sup>や援軍が来たのではないかぎり——相手の自滅以外考えられないし、考えようがなかった。それほど大きな戦力差があった。必要以上<sup>上</sup>に警戒されていた件も含め、どうやらツキに恵まれたらしい、とウィズは納得した。

「それで……こころへ運んでくれたのはお前か、ケイア

ス」

「なんだ、気づいてくれてたのか、ブラザー」

傭兵仲間のケイアス・マクドールが手をたたいて、おどける真似まねをした。

「嬢ちゃんと二人きりの世界に入りこんで、俺のことが見えてないのかと思つてたぜ」

「ありがとう。すまない、助かったよ」

「俺はほとんどなにもしてないんだよ、お前を町まで運んできたのは嬢ちゃんさ」

「は？ アローンが？」

ウィズはすつとんきょうな声を出し、目をしばたいた。

「嘘うそだろ、まさか俺を担いで山をおりてきたとでもいうつもりか」

「担いではないわ。引きずったり、転がしたりしただけ」

真面目な顔で言われて、ウィズは顔を引きつらせた。

「じよ、冗談だよな……。あの地下からはどうやって抜けだしたんだよ」

「広間に小道があつたの。そこを抜けたら地上に出られたわ。もしものときの避難経路になつていたんじゃないかしら、山のふもとにつながっていたから、それも功を奏したのかも」

「……俺、よく生きてたな」

「まったく奇跡ね。聖ルーン様に感謝でもささげたら？」  
するとウィズではなく、ケイアスが祈りのポーズをした。  
た。

「おお、敬愛なる聖ルーン様。我が親友をお導きくださりありがとうございます」

それから一転、神妙な顔つきになり、ウィズに対して深く腰を折る。

「すまなかつたな。俺が紹介した依頼で、そんな目にあわせちゃまって」

傭兵稼業にアクシデントはつきものだ。ウィズは「こうして生きてたんだから、気にするなよ」と肩をすくめた。

「すまない。ありがとう」

「いいつて。それで報告だが――」

「ああ、村の件なら嬢ちゃんからおおよそ聞いたよ。もちろんあとでお前さんから話も聞かせてもらおうが」

「そうか。俺のほうからもひとつ確認しておきたいんだが、依頼主の……神殿庁は最初から知ってたんだよな？

あの村が異端者の隠れ里だったこと」

「……厳密には『おそらく』がつくがな。じつは調査対象の村は複数あったんだ。そのうちのひとつをお前さんに頼んだわけだが」

「運悪く当たりを引いちゃったわけか」

「言い訳するようだが、俺も神殿庁の依頼主も、お前が

出会ったみたいなのやばいやつがいるとは知らなかったんだ」

「ああ、それは信じるよ」

ウィズは、ばつが悪そうにしているケイアスに向かって、うなずいてみせた。

「そのやばいやつ……例のじいさんが、村の住人は無害な似<sup>え</sup>非<sup>せ</sup>信徒だと言っただからな。たぶんじいさんひとりが暴走した結果なんだろう」

「せめて報酬は上乘せさせてくれ」

「それは、ありがたくちょうだいするよ。で、だ」  
ウィズが自分の枕元に視線を落とすと、「ああ、それはね」とアローンが応じた。

「一応拾っておいたの。村を調査した証拠になるかと思  
って」

「なるほど、気をきかせてくれたわけか。けど……」

無意識に苦虫をかみつぶしたような顔になる。枕元に

置いてあったのは赤錆色あかさびの腕輪——あの老人を怪物に

変貌させた腕輪だった。見た目におかしなところはない。

細かな装飾とふちどりがしてあって、芸術的な骨董品と  
してとおりそうなくらいだ。しかし、

「見れば見るほどすげー不気味っつーか、陰気をまとつ  
てるっつーか……。持ち歩きたくないな、なんか  
裏にトゲがびっしりついてるし……。引き取ってくれよ、  
ケイアス」

「断固断る。なぜなら俺も死ぬほど気色悪いからだ」

「お前から受けた依頼の証拠品だぞ？ ほら」

「いらねえって。おい、こっちに押しつけてくんないよ、化け物になったらどうすんだ」

本気でいやがられて、つきかえされてしまった。ウィズはベッドの上で腕を組み、投げやりに言った。

「うーん、さすがに捨てるのはマズそうだよなあ。それじゃあもう、どっかそのへんに埋めちまうか？」

「——どうかそれは、おやめください」

第三者の声があった。見知らぬ女が、あけはなたれたままの扉から部屋の中へ入ってくる。

「ケイアスの知り合いか？」

「司祭様と合流するって言ったろ、彼女がそうさ」

ケイアスがぱちんとウインクした。

「じゃあ俺の怪我けがを治してくれたのも」

「そういうこと。パミラはすごいんだぜ、神殿庁高僧の有望株でな、まだ司祭なのに『治療』が使えるんだ。俺も一度大怪我を治してもらったことがあるんだが、これがまあ、ものの見事に全快して——」

「ケイアスさん、あの……できれば先にわたくしを紹介していただきたいのですが」

パミラと呼ばれた司祭の女は、ケイアスの半歩うしろに立ち、おずおずと言った。ゆとりある司祭の衣装に身をつつみ、ベールの下には、薄いそばかすとくつきりと

目鼻立ちのとおった顔がある。

「おっと失礼。彼女は神殿庁の司祭パミラ。今回の依頼の直接の雇い主だ」

頭のベールを取りはらい、パミラは深く腰を折った。

「パミラ・ヘクトリンと申します」

聖職者特有の潔癖けつぺきさや傲慢ごうまんさが無い。おそらく高僧になつてまだ日が浅いのではないかとウィズは思った。

年は二十そこそこくらいだろうかと、この若さで司祭なら——異才ユフィール・ローズヴァイセは例外として——たしかに有望株にちがいないだろう。

「本来ならば依頼をお願いする前にお目にかかるべきところ、神殿庁からの出立しゅつたつが遅れてしまつて……不手際ふてぎわを

「お許しください」

「いえ、どうか頭をあげてください」

ウィズはベッドから足を投げだし、パミラのほうへ向き直った。

「それより、傷の治療をしてくれたそうで。ありがとうございます  
「ございます」

ウィズが怒っていないことに、パミラはほっとしたようだ。最初よりいくぶん表情をやわらげて、

「ヴァイスさんがお目覚めになっただけに本当に安心いたしました。傷が完治しても必ず意識が戻るとはかぎりませんので」

「癒やし手の腕がよかったです。それで、この腕

輪のことですが」

「はい。それはおそらく、呪就じゆじゆの輪臂たくふら。神殿庁の解呪滅壊指定遺物です」

アローンが小首をかしげてウィズを見あげた。

「かいじゅ、していいぶつ？ なにそれ、なんのこつ？」

「魔剣同様、古代魔法文明時代の遺産でな、一般人の手に負えない呪いがかかっているから、神殿庁が回収してかわりに呪いを解きますよって感じかな」

「正確には、少しちがいますね」  
パミラが微笑びしょうして、補足した。

「解呪滅壊指定遺物にかけられた呪いは、神殿庁の神官にも解くことができせん。だから、呪いを解くために

回収する、のではなく、呪いを解けないから壊して滅する、が正しいです」

「おいおい、司祭様がそんな簡単にできないなんて言っちゃまっていいのかよ？ 威厳いげんってもんがあるだろ、威厳ってもんが」

ケイアスがからかうも、パミラはいささかも動じない。「虚栄きよえいをはることは、聖ルーン様の教義に反しますから」

「上のほうでふんぞりかえってる連中にも、お前さんみたいな謙虚さがあればなあ……」

なにか思うところがあるのか。ケイアスは憂うれいを含んだ声音でそう言った。

「ヴァイスさん。ヴァイスさんにはその腕輪を、どこかの神殿庁支部まで届けていたただきたいのです」

「俺が……ですか？」

困惑し、視線をケイアスのほうへ向ける。ケイアスは両手で大きくばっつてんをつくった。

「俺は引き取れんぜ。これからパミラと、お前が行った村の再調査に向かうんだからな」

「いや、でも神殿庁へ渡すなら、そっちで預かってもらったほうが……」

「申し訳ありません。わたくしには資格がないのです」  
パミラが眉まゆを八の字にさげて言う。

「解呪滅壊指定遺物をおつかえるのは、司教位以上の高

僧だけと定められております。ゆえにわたくしのようない徳の足りない司祭の身では、手にすることすらゆるされないのです」

「ああ、なるほど、そういうルールなんですね。納得しました」

要領をえたので、ウィズは運搬を快諾した。たしかに気色悪い腕輪にちがいないが、腕にはめて装着しなければ、実害はないだろう。

「神殿庁支部でこの書簡を渡していただければ、手続きなどで拘束されることもありませんので」

パミラが薄黄土色の羊皮紙を手渡してくる。そこには達筆なルーン文字がしたためられていた。興味深そうに

ひよいと書簡をのぞきこんだアローンが、がっかりと肩を落とす。

「……読めない」

「ああ、字がダメなんだったか。パミラさんの署名入りで、この腕輪はやばい品なんでさっさとぶっ壊せとか、だいたいそんな内容だよ」

ウィズは司祭に、念押しようにたずねた。

「それにしても、これ、俺みたいなようへい傭兵にまかせていいんですか。解呪滅壊指定遺物なら、マニアに高値がつくでしょう。どっかで売っぱらっちゃうかも」

「ご自分からそうおっしゃる方がそのようなことをなさるとは思えません。それにケイアスさんのご友人なら、

それだけで信用に値しますから」

パミラはにこりと微笑ほほえんで言い、それから深々と頭をさげた、

「お手間をおかけして恐縮ですが、もし治癒のことを恩義に感じてくださったのでしたら、どうかかなにとぞ腕輪の件、よろしくお願いいたします」

× × ×

ケイアスたちと別れたあと、夜食を取るために酒場へと向かう。

昨日と同じ、通りぞいのにぎやかな酒場だ。ウィズは

半日以上眠っていたらしく、外へ出たときにはもうすっかり日が落ちきっていて、つらなる店々からはランプのあたたかな明かりがもれでていた。

「どうしたんだよ、アローン」

ウィズは骨つきローストをほおばりながら、櫛かしの長テーブルを眺めた。テーブルには、それぞれ一人前分の料理と飲みものが並んでいる。

「昨日みたいに馬鹿ばかぐいしないのか？ 報酬に色つけてもらったから余裕はあるぞ」

「え、うん、だいじょうぶ」

彼女の皿は早くもすべて空になっっていたが、いつこうに追加注文をする気配がない。ウィズは心配になっただ

ずねた。

「腹でも痛いのか？」

「そうじゃないけど」

「ならどうしたんだよ」

「いいでしょ、別に、もうお腹なかいっぱいになっ——」

言げんか下かを待たず、ぐうと腹の音が響き、アローンは両耳を朱しゆに染めた。ウィズには彼女の行動が本気で理解できなかつた。

「……なんで、がまんしてるんだ？」

「だって、三人前も四人前も食べるなんて……」

ワンピース・ドレスの裾すそをぎゅうとつかんで、そっぽ

向きながら、

「……女の子らしくないもの」

「はあ？　なんだそれ、いまさら気にすることかよ……」

「うるさい、ウィズってデリカシーない、最低」  
アローンはいじけてベーと舌を出すと、本当はまだぜんぜん食べたりないし、おしとやかを演じるもくろみもバレてしまったので、ひらきなおってこのあと、ウィズが青ざめるほど皿の山を高々とつみあげた。

各テーブルの食事がひととおりすんだころ、店内に吟遊詩人ぎんゆうししじんが姿を現した。

昨日の青年ではなく、今日は女の詩人だった。とはい

え、つばの長い帽子ぼうしに、すらりとタイトな衣装、大きな楽器と、いでたちはほとんど大差ない。

相手が女なので、酒場の客たちは別の意味でも色めき立ち、彼女のまわりにあつまって謳うたに耳をかたむけた。ちようど会話が途切れたところだったので、ウィズとアローンもそうした。

すでに二度聞き三度聞きの者も大勢いるだろうに、聴衆たちから多くのリクエストを集めるのはやはりアルルフル・ディーンえいゆうたんの英雄譚だだった。詩人が語る物語は、爵位しゃくゐの拜受はいじゆを辞退した話など初耳なこともいくつかあったが、おおよそ前回聞いた内容と同じだった。

物語が一段落つくと、聴衆たちは喝采かつさいをして詩人をた

たえた。大きな拍手と歓声が酒場の中をつつみこんだとき、アローンが唐突に質問した。

「知り合いなの？」

ウィズははじめ、しらばっくれようとした。

「なにが」

「アルルクル・ディーン。ちよつと不自然になるのよ、あなた。英雄の名前が出るたび、意識しないように意識してる感じ」

なんとという洞察力だろう。ウィズは目をみはった。

「それに、同じ村の出身だつて言つてたから」

「ああ……」

そこまで見抜かれているなら隠す意味もない。少女を

無知で世間知らずの子供とあなどる気持ちはとっくになくなっている。ウィズは空になつたグラスをテーブルに置いて、言った。

「幼なじみなんだよ。同じパーティーだつたこともあ  
る」

「……一緒に旅して魔人を、たおすために？」

「そうだな」

「そう……」

見まちがいだろうか、一瞬アロンの表情に暗い影がよぎった気がした。

「それで、どうしていま一緒にいないの？ けんかしたの？」

「アルはきつと、いまでも俺を仲間だと思ってくれてるよ」

「なら、他の仲間に追いだされたのね」

「ちがうよ」

ずけずけと矢継ぎ早な質問がいつそ清々すがすがしかつた。ウイズは思わず笑ってしまい、それから真実をありのままに伝えた。

「俺がみんなのたたかいに、ついていけなくなつたんだ。いや、少しちがうな。ついていけないのは、はじめからだつたから」

「なにか転機があつたのね。そのことを強く自覚する外的な転機が」

言外げんがいに、やはり仲間を追いだされたのだらうと言っている。

——わからないのか？　ヴァイス、邪魔なのだ、お前は。

——ねエ、これまでアナタの存在がどれだけ彼に迷惑をかけてきたかわかる？

——足の治療がおわったら、出て行ってください。ア  
ルルクル様がお戻りになる前に。

ウィズは過去をおもんばかるように黙考し、それから  
ゆっくりと口をひらいた。

「転機は、あつたかもしれない。でも自分自身、心のど  
こかでずっと、そうすべきだと思っていた。いまはこれ

でよかったと思ってるよ、これは嘘じゃない」

「そっか……。きつとそうなるまでに、いろいろあったんでしようね……」

アローンは琥珀色こはくの瞳を伏せると、長い道程をおもんばかりのように、ゆったりとした口調でそう言った。

「ま、よかったんじゃない？ しかたないわよ、自分でもよく言ってるけど、じっさいあなたで弱いんだもの」

ウィズは目をしばたたき、アローンを見た。

「あら、もしかして傷ついちゃった？」

「いや……」

静かにかぶりをふる。なにかもアローンの言うとお

りだ。

「そう、俺は、弱かったんだ。努力は……したつもりだったんだけどな。どれだけ鍛錬しても、みんなとの差が縮まることはなかった」

それどころかどんどん足手まといになっただけ。何十回何百回と手のマメをつぶし、ほとんど眠らず昼夜剣をふり続け、アルが一度で身につけることを何百何千と反復してからだに覚えさせ……背中を追った。追いつけなかった。それでもけつきよく、彼の影すら踏めずにおわった。

「アルはさ、英雄譚にあるように本当に聖ルーンから剣をもらったんだ。俺は子供のころそばで見てた。こう、お伽<sup>とぎ</sup>噺<sup>ばなし</sup>みたいに天から光かがやく剣が降ってきて……そ

の剣を引き抜くアルを見て、思ったんだ……ああ、これがえらばれた人間なんだなって」

一方のウィズには、なにも与えられはしなかった。言葉も、励ましも、神話の武器も、聖ルーンの姿さえも。

「神様は不公平なのよ」

アローンが小さくうなずいてみせた。相手の真意をくみとるように、うすく微笑む。

「でも、わたしはよかったな。だってそのおかげで、こうしてあなたに出会えたんだもの。ルーン教の信徒でもなんでもないけど、そこだけは彼女に感謝してあげてもいい。それにウィズ、あなたにも感謝を」

かけねない好意や感謝を受けるのは、いつたいいつ以

来だろう。記憶がはるか昔までさかのぼったので、ウィズはこそばゆい気持ちになった。

「あなたは助けてくれた。森で、村で、地下で……三度も。わたしをかばって」

「かばったって……途中でやられちまったら意味ないだろう」

「大事なのは過程よ、ウィズ。はじめて会ったとき、あなたの得もないのに、死ぬかもしれない危険があったのに、あなたはわたしを助けようとしてくれた。そのことがわたしはなによりも嬉うれしかったの。結果なんておまけの付随物だわ」

「けっきよく死ぬことになっても？」

「ええ。だって仮にそれで死んだとしても……そのときは素敵な王子様に守られるお姫様でいられるもの」  
「……」

難しい顔で考えこむウィズとは対照的に、アローンは心の奥がじんと熱くなるのを感じていた。彼女はわかつたのだ。ついに理解した。会ってまだたった一日なのに、どうしてこうまで彼に惹かれ、彼にこだわっていたのか、そのわけが。

（同じだったからだ。彼は、わたしと同じえらばれなかった人間）

漠然とした好感が同調と共鳴に変わり、少女のほおに色をさした。さっきのは半分皮肉だったが、今度は本当

に心から聖ルーンに感謝した。

（……見る目のない女神様、ウィズをえらばないでくれてありがとう）

そう思った直後、アローンは笑ってしまった。けっきよく皮肉がまじっている。聖ルーンと自分の関係性ならしかたないと、そう思いたくはなかった。

「ねえ、ウィズ。字を教えて」

抵抗しなくなつた。定められた運命に。乗り越えられないとしても、せめてもの抵抗を。

「字……ルーン文字か？」

「ええ。どうでもいいと思つてたけど、覚えたら残せるかと思つて」

「残す？ なにを？」

アローンはにっこりと笑み、前向きな意志をもって告げた。

「あかし生きた証」

「……詩人かよ、言いまわしの大げさなやつ」

「時間はあるんだし、いいでしょう？ ほら、ペンと紙出して、ほらほらほら」

こうして酒場の一角は、訓導と学童の勉学所に早変わりした。

ああでもないこうでもないとやりとりする二人の声は、夜ふけまで続いた。

×  
×  
×

集会場の地下におりたつたケイアスは、靴底で、鉄の床を踏みしめた。

とつくに日は沈んでいるため、視界は闇におおわれて  
いる。たいまつに火を灯<sup>とも</sup>してかかけると——冷たくかた  
い鉄の床に、鉄の壁、血を流すための溝——ウィズたち  
から聞いたとおりであった。散乱する人骨の他にはなに  
もなく、奥にゆるいくだり坂の通路がのびている。ケイア  
スは明かりを頭上へ向けた。

「おーい、だいじょうぶかあ？」

「え、ええ……もう少しで……きやつ」

ロープにしがみついておそるおそる壁を伝っていたパミラが、足を滑らせた。

「おっと」

ケイアスはすばやく落下地点にまわりこみ、パミラのからだを両腕でしっかりと抱きとめた。歴戦の傭兵たる彼の膂力<sup>りよりよく</sup>は女ひとり<sup>りよりよく</sup>の落下衝撃程度ではびくともしない。

「あ、ありがとうございます……」

「怪我がなくてなによりだ。下も滑るぜ、気をつけな」  
パミラはうなずき、おっかなびっくり鉄の床に両足を ついた。靴<sup>くつ</sup>をはいているのに、寒気が足の裏から這<sup>は</sup>いあ がってくる気がした。ローブの下でからだかぶるりとふるえる。

「嬢ちゃんの証言だと、『血の祭壇』はこの奥だな」  
たいまつで、通路のほうをさし示す。

「行きましよう……たしかめなければなりません」  
パミラは勇気をふりしぼるように裾すそをつかみ、陰とした障気がたちこめる通路の先をじつと見据えた。

通路をくだるあいだに、敵襲はなかつた。スペクター死骨対策に  
浄じょう札うふだをどっさり持ちこんでいたし、浄化が使える司祭も  
いるので準備万端だったが、襲われないならそれにこし  
たことはない。

アローンが話していた避難経路を使うことはできなかつた。  
なぜなら、そんなものは存在しないからだ。ウイ

ズが目覚める前に、彼女に口裏を合わせるよう頼まれて、承諾した。

しかし、と考える。負い目がある手前、根ほり葉ほり聞くことはできなかつたが、じっさいアローンはどうやってこの地下空間から脱出したのだろう。瀕死ひんしのウィズを抱えて、五メートルの絶壁をよじのぼったとでもいうのか――

背後で小さな悲鳴があがり、思考をかき消した。

ふりかえると、パミラが足をすべらせて転びそうになっていた。あわてて手をさしだしてささえやるも、彼女は極度の緊張でがちがちになっただけで、ケイアスに助けられたことにも気づいていない。

（まったく、むりやりにでもついてきて正解だったぜ。そのザマでよくまあひとりごとでやれるなんて言ったもんだ）

ケイアスはひとつ、ウィズに嘘うそをついていた。

じつは今回の調査にあたり神殿庁からの資金提供はなかった。ただの銀貨一枚も発生していない。だからここまでの旅費もウィズに支払った依頼金もすべてケイアスの持ちだし——ポケットマネー。

（神殿庁は、神隠しにあった三つの村……その調査をすべてパミラひとりにやらせるつもりだった。ふざけた話だぜ。ちよっと他人の怪我が治せるだけの、こんな女の子ひとりに）

ケイアスはパミラの親類ではない。血縁はないし、妻でも、将来を誓い合った恋人でもない。数日前までケイアスは、王都フインの伯爵公反乱事件に、国王側の傭兵として参戦していた。激戦の中で伯爵側の兵とたたかつて重傷を負い、そこにたまたま居合わせたパミラに傷を治してもらった。その過程で彼女の事情を知り、恩返しとして勝手にお節介を焼いている。

「ひとつ疑問があるんだが、聞いてもいいかい」  
「……」

はりつめた司祭には聞こえていないようだ。もう一度、さつきより声を大きくして話しかけると、パミラはようやく反応した。

「え、あ、はい、ご、ごめんなさい、なんででしょう?」

「お前さん、魔人についての知識は?」

「あ、あまり詳しくはありませんが、わたくしに答えられることでしたら」

「それじゃ遠慮なく。なあ、魔人つてのはなんで一匹ずつ順番に出現するんだ? 世界を滅ぼすつてんなら、各大陸にいる七匹がいつぺんに暴れるべきだろう。それを律儀に順番守るなんざ、まるでわざわざ英雄にたおされるのを待ってるみたいじゃねえか」

「きつと法則に従っているのでしょうか」

「法則?」

「<sup>ことわり</sup>理といたほうがいいかもしれません。超常の存在も

万能ではないということですよ」

「そりゃ聖ルーン様もかい？」

パミラは小さくうなずき、

「そうですね、神々の力は、人の信仰によりますから」

「天使様も悪魔も、祈り、すがる者がいてこそってわけか」

「ええ」

「……しかしそれならそれで、聖ルーン様はもつと次善策をこうじるべきじゃないか？　いまんとこぜんぶ英雄まかせで、ご自身ではないにしてもしようとなさらない。

いったいなにを考えてんだか」

「神々のご意志は、わたくしたたちの考えがおよぶもので

「はありませんから」

「つまりわけわからん存在ってことだろ。そんなわけわからんもののために……お前さんはいまこうして命を懸けてる」

パミラははっとして、ケイアスと目を合わせた。ようやく彼が自分を気づかってくれているのだと気づいた。真摯<sup>しんし</sup>な想いには真摯<sup>しんし</sup>に応えなければならぬ。己<sup>しん</sup>の芯<sup>しん</sup>となるものを伝えるべきだと考え、口をひらく。

「ケイアスさんは、わたくしが孤児<sup>こじ</sup>であることは知っていますよね」

「ん、ああ」

「では、わたくしのように神力の素養を見いだされて神

殿に集められる子供って、どのくらいいると思えますか？」

「さて、十人くらいか」

「毎年百人以上です」

予想をはるかに上まわる数に、ケイアスはおどろいた。

パミラがそっと目を伏せると、彼女のまつげがたいまつ  
の明かりに照らされて、白いほおに長い影を形づくる。

「ケイアスさんはわたくしを有望株だとおっしゃってくだ  
さいますが、わたくしくらいの才能の持ち主はたくさ  
んいるのです。それこそ器からあふれでるくらい大勢」

「だから無茶な命令を平気でください……代わりはいくら  
でもいるから、多少死んでもかまわないと？」

「誰も死にたい人間などいませんよ、もちろんわたくし

だつてそうです」

顔をあげたパミラと視線がからむ。

「けれどおそれてもいません。泉下せんかへくだることはすなわち、聖ルーン様の御許みもとに近づけるといふことですから」

ケイアスは内心で舌打ちした。彼女の真まっ直すぐな目が、彼女の言葉に偽りが無いことを告げている。ルーン教高僧は死をおそれない、というのは本当なのだ。しかし、気に入らない。こんなもの一種の洗脳じゃないか？そして気に入くない。人が、目に見えないなにかにふりまわされることが。

「見てください。通路がとぎれて、部屋が」

「……着いたみてえだな」

たいまつを前方へかかげると、闇の中に広い空間が浮かびあがった。

「これが祭壇の間、か」

二人は周囲を警戒しながら、部屋の奥へ向かった。巨大で不気味な壁画の下——流れこんだ液体の受け皿となる、大きなくぼみの前に立った。

パミラがくぼみのへりをなぞる。指先にうつすらと乾いた血がこびりついた。

「……まちがいないようです。ここで、血の祭壇の儀式がおこなわれました」

断言されて、ケイアスの口の端<sup>は</sup>がゆがむ。儀式の内容

はあらかじめ聞いていた。真剣に受けとめつつも、頭の片隅にはまさかという思いがあつた。

まさか本当に、大量の人間を生贄いけにえにして巨大な死腐アンデッドをつくりだすなどという馬鹿げた儀式を実行するやつがいるなんて。

「いそいで、引きかえしましょう……」

額ににじむ汗、血の気の失せたほお、ふるえる声……パミラの狼狽ろうばいぶりは尋常ではなかつた。ケイアスはごくりと息をのみ、慎重にたずねた。

「……それほど、やばいのか？」

司祭の首がゆっくり大きく、縦に動く。

「……ひとあし遅かつたようです。儀式は、すでに完了

し……もういつどこで死<sup>マ</sup>大腐<sup>ダ</sup>が生まれてもおかしくない  
 ……動きだして町を襲えば、大変なことになります。で  
 すから、一刻も早く神殿庁に」

ケイアスには自信があつた。たとえ呪いの怪物に襲わ  
 れたとしても対応できる——ウィズとアローン……あの  
 コンビでどうにかなる相手なら、自分が負ける道理はな  
 い、と。

その誤解は無理からぬことではあつた。じつさい彼の  
 傭兵としてのの實力はウィズをはるかに上まわっていたし、  
 魔人信徒の老<sup>ろ</sup>猶<sup>う</sup>がアローンに刃を向けなかつた理由など  
 知りようもなかつたのだから。慢心というにはあまりに  
 酷<sup>こ</sup>な、小<sup>こ</sup>さな<sup>な</sup>驕<sup>お</sup>り<sup>ご</sup>。

「逃げっ——」

それがケイアス・マクドールの最期さいごの言葉となつた。祭壇のくぼみが、ばかりと大きく口をあけ、彼のからだをのみこんだ。のみこまれる直前に右腕をのばし、パミラをつきとばしたため、くぼみの口が閉じたあと、右腕だけがちぎれてその場に残された。

ケイアスは死んだ。床のくぼみにくわれて。

鉄の床の下から、ぐちゃぐちゃとなにかを咀嚼そしゃくする音が響いてくる。パミラは呆然ぼうぜんとした面持ちで、ちぎれた右腕の断片を眺めていた。恐怖と混乱で身がすくみ、腰が抜けて立てなくなっていた。

（ああ、場所は、ここだったんだ……巻きこんでごめん

なさい、ケイア——)

直後、パミラは浮遊感にみまわれた。かたく冷たい鉄床の感触が消えたかと思うと、ぬめぬめとしてなまあたたかいものにからだをつつまれた。まるで生き物の口内みたいだと感じた次の瞬間、激烈な痛みが身をつらぬいた。ばちんと頭の奥がはじけて、意識と意志がこの世界から消え去った。

そして命も。永遠に。

## 第六章 持つ者、持たざる者

縦四十二歩、横三十一歩。

それが少女<sup>わたし</sup>たちに与えられた<sup>きよじゆう</sup>居住空間だった。

歩幅は子供のものだから、実際は二十×十五メートルくらいだろうか。正面に鉄の檻<sup>おり</sup>があつて、残る三方は冷たい石壁におおわれていた。静かで暗く冷たい地下の密室。窓も窓枠も一切ないため、場所はおろか昼か夜かさえわからなかつた。

脱出を考えたことはもちろんある。けれど檻の向こう

は部屋の中とは比べようもないくらいの暗黒——タールを塗りたくったみたいに異様で、見ているだけで目眩めまいがするくらいの——が広がっていたし、ときおり獣のうなり声や人の悲鳴みたいなものも響いてきて、その都度わたしたちの心に強烈な恐怖心を植えつけた。

けつきよく囚とらわれの身でいるあいだに鉄檻がひらかれた——つまりわたしたちが部屋の外に出される——ことは一度もなかったが、もし仮に出られたとしても全員一致でそうしたかは疑わしい。

部屋にはベッドもテーブルもイスも棚たなもなにもなかった。ただ中央に、燭台しょくたいと蠟燭ろうそくだけが置かれていた。ひよろ長くて貧相ひんそうな黒色の蠟燭は、何日何十日と火を灯ともし続

けても、蠟が溶けきつてなくなることは決してなかった。  
 わたしたち七人はいつしか、燭台をかこむよう車座になつて身を寄せ合うのが常となつていた。おしりの下の石畳は氷をはったように冷たかったが、がたがたとふるえて凍こごえたのは連れてこられた最初の数日だけで、しだいに寒さを感じなくなつていった。

「あたしたちのからだに悪魔が宿すつたからよ」

ある日、エレオノーラが捨すて鉢ばちに言った。

「悪魔は暑さや寒さを感じないもの。あたしたちも魔の根元へデモンズの眷属けんぞくになつてしまふんだわ」

「やめてよ、エレオノーラ。そんな話、聞きたくないわ」

わたしは彼女をたしなめた。うしろ向きな話など聞きたくなかった。それがたとえ事実だとしても。わたしは希望を求めて、別の少女に声をかけた。

「それより、カーミラ。また見せてよ本」

さしだされた本を受けとると、ちらと檻の奥へ視線をやって耳をすまし、誰も近づいてこないのを確認してからページをめくった。

この本はカーミラが密かに隠し持っていたものだ。わたしを含めほとんどの少女が着の身着のままここへ連れてこられていたが、敬虔なルーン教信徒であるカーミラは大事な聖典を手放さなかった。咄嗟に服の下に隠すという機転をきかせて、この『アーカーシャ英雄物語』を

檻の中まで持ちこんだのだ。よくぞ成功させたものだ、  
と思う。あの怪物が身体検査で見落としたのだろうか？  
いや、もともとわたしたちの所持品や思想などどうで  
もいいのかもしれない。あいつらが欲しているのはきつ  
と、わたしたちのからだだけ。

「そんなもの、ただのお伽噺ときばなしでしよ。何回も何回も読み  
かえして、なにがおもしろいんだか」

エレオノーラの皮肉は無視して、さらさらとページを  
めくっていく。『アーカーシャ英雄物語』は、世界中ほ  
とんどの大陸で聖ルーン様が人々にもたらした聖典もし  
くは聖書としてあつかわれている。内容自体は王道中の  
王道で、聖ルーン様に光の英雄としてえらばれた冒険者

の青年アーカーシャが、デモンにさらわれた王国の姫を助けるため世界中を旅するというものだ。わたしはさっそくお気に入り場面を読みかえそうとした。しかし蠟燭の灯りのもとでそのページをひらくと、突然、不可思議な現象にみまわれた。

「字が……読めない？」

あれと首をひねる。文章が消えたわけではない。文字は書いてある。なのにその文字の意味するところがまったく頭に浮かばなくなってしまった。

「え、なに、これ、なんでだろう……なんで……」

びっしりと敷きつめられた文字がうねうねと動き、円を描く渦うずになった。気持ちが悪くなつて、うえずとえずく。

わたしの異常に気づいて、少女たちが集まってきた。わたしが本を指さすと、困惑ののちにざわつきが起こった。どうやらみんなもわたしと同じらしい。

「……ルーン文字だからだわ」

エレオノーラが決めつけるように言った。

「文字は聖ルーン様が人間にもたらしたものとされていてる。あたしたちは悪魔になってしまったから、ルーン様からのたまわりものである文字が読めなくなってしまったのよ」

しん、と一同が静まりかえった。わたしも反論できなかつた。体感温度の喪失につづき、今度は文字が……。わたしたちはからだを寄せて、抱き合った。自分たち

がどんどん、別のなにかに変わっていくような気がした。次はなにを失う？ なにを感じなくなる？ そして最後にはどうなってしまう……。。

物語のように英雄がわたしたちを助けに来てくれることはあるのだろうか？

きつとないだろう。さらわれてもう何十日も経<sup>た</sup>つているし、そもそもわたしたちはお姫様ではない。七人全員がなんの変哲もないただの町娘か村娘だ。外界と完全に断絶され、外の情報はなにも入ってこない。いまが夏か冬かすらわからない。わたしたちは蚊<sup>か</sup>帳<sup>や</sup>の外にいる。人がいとなむ世界の、蚊帳の外に。

「きやつ」

カーミラが悲鳴をあげて跳びあがった。いつの間にか檻のすぐ向こうに、山羊頭やぎの怪物がいた。怪物はあぐらに足を組んだ状態で宙に浮かんでいた。そして檻の外で妙な魔方陣を描き、地獄の底から響くような低い声でなにかの呪文を唱えはじめた。

ああ、今日もまた陰鬱いんうつな儀式が始まる。わたしたちを別のなにかに変えるための儀式が。

きつと助けは来ない。

英雄とは——お伽噺の中だけの存在だから。

× × ×

白は郷愁<sup>きょうしゅう</sup>。黒は哀切<sup>あいせつ</sup>。

白は希望。黒は絶望。

そういうわけかたをするのなら、アローンはいま白の世界の中にいる。

馬車の窓から外に目を向ければ、瞳に映<sup>うつ</sup>るのは、あのころの暗い牢獄<sup>ろうごく</sup>ではなく、凜烈<sup>りんれつ</sup>さはらむ澄<sup>す</sup>んだ青空と、尾根<sup>おね</sup>にうつすらと雪化粧<sup>げしやう</sup>をほどこす山々。

アローンはいままたしかに、白の世界の中にいる――

北を目指す旅は順調に進んでいた。

依頼<sup>いらい</sup>の報酬金<sup>ほうごうきん</sup>で懐<sup>ふところ</sup>に余裕ができたので、ウィズは護衛つきの辻馬車<sup>つじばしゃ</sup>を利用することにした。これが大きい。馬

車なら徒歩より断然速いし、なにより道中、盗賊や魔物の襲撃におびえなくて済む。馬車は信用商売なので、相乗りする護衛役には、屈指の傭兵や大国の元騎士など経歴と実力をかねそなえた者たちがあたり、そのぶん値もはるが、安全を考えるならこれ以上ない移動手段だった。

「わたしを護衛するウィズを彼らが護衛するのね」とアローンにからかわれたものの、メンザスを出発して一週間ほどで北東の中心地ハルモニア——その近辺に位置するアンバンという町までたどり着くことができた。そのあいだトラブルに巻きこまれることは一度もなかった。

アンバンから先は馬車が使えない。馬の足では、深く降りつもった雪山を進むことはでき

ないからだ。町の北側に目を向ければ、雪化粧の連山がそびえ立っている。目的地は近い。あの雪山を越えた向こう側に、白銀の村スノーウェルがある。

「ここからスノーウェルまではどのくらいなんだ？」  
「休み休み進んで、三日つてところかしら」

ウィズの質問にアローンが答えた。まだ雪山という難所を残しているものの、旅は終盤にさしかかったといつていい。それはつまり二人の別れが近いことを意味している。アローンが故郷に到着したとき、二人の旅はおわりを迎える。

辻馬車からおりてアンバンの大門へ向かうと、見張り

の門兵に身分証や身体検査を求められることはなく、あつさり中に入ることができた。「ただでさえ大した観光資源もない田舎いなかなんだから、せつかく来てくれた金づるをえり好みなんてしてられないものね」とアローンがこつそりと教えてくれた。

アンバンは北東地方につらなる山脈のふもとにあり、このあたりではハルモニアについて規模が大きい。とはいえもちろん田舎いなかの中でならという話で、フィンやエニドマなどとは比べようもなく、じつさい大門から周囲を見まわすと町より村と呼ぶほうがしつくりきそうだった。旅人相手の露店ろてんはごく少数。右手側は広大な牧羊地ぼくようちになっひつじていて、羊の群れがのんびりと日向ひなたぼっこしている。

その奥の小高い丘には、墓地がある。

家々は風よけの木戸や生け垣にかこまれ、ところどころに薄く霜がおりている。すでに町にも降雪があつたようだ。肌にふれる空気はぴりぴりとはりつめて冷たく、吐く息は白い。ウィズはぶるりと身をふるわせて、隣の少女を見おろした。

「お前、そのかつらで寒くないのか？ ……寒いよな？」

アローンは会ったときと同じ服装——紅梅色のワンピース・ドレス一枚だけ。ほっそりした両肩もひざ下の足もむきだしになっている。見ているほうが風邪を引きそうだ。

「ご心配なく。スノーウエルの人間は寒さに強くできて  
るの」

アローンはてんで気にした風もなくそう言った。やせ  
我慢がまんではなく、本当に寒さを感じていないようだった。  
白くなめらかな腕に産毛うぶげの逆立ちはまったく見られない  
し、唇も血色のよい桜色、からだのどこにも変調の兆候  
がない。健康そのもの。

そうはいつでもだ。これから雪山をのぼり、さらに  
向寒こうかんするわけだから、さすがにワンピース一枚というわ  
けにもいかないだろう。町の住民に声をかけて服売りの  
店を探し、自分の防寒具と一緒にアローンの衣装も見繕  
うことにした。「いいの、だいじょうぶだから」と遠慮

する彼女に、羊毛のガウンと絹糸きぬいとのマフラーを半ばなかむりやりあてがってやった。ワンピース・ドレスも汚れが目立っていたので、同じ色合いのものを新調した。

「まあ、とてもお似合いですよ」

鏡台で姿見するアローンのうしろから、女店主が褒めそやす。

「王都のお姫様とみまちがいそうになりますわ」

多大なるお世辞せじをさしひいてなお、まんざらでもない、とウィズは思った。綺羅きらをかざったアローンは、はつきりした目鼻立ちとすらりと長い手足がことさら強調され、とても十三の子供には見えなかった。

「ねえ」

鏡台から視線を外したアローンが、そつとうしろをふりむく。まなざしに、期待と不安を入りまじらせながら、「ウイズは……どう思う？」

「ああ、そうだな——」

ウイズはうなずき、まじまじと彼女を眺めた。瑞花<sup>ずいか</sup>みたいにかがやく白い髪、すきとおる白い肌、白いガウン、白いマフラー……服に宝石や装飾はいつさいなかつたが、余計な趣向を取りはらうことで逆に彼女を靈驗<sup>れいげん</sup>な存在と化しているようだった。凜<sup>りん</sup>として、清らかで、静謐<sup>せいひつ</sup>で、けれどどこかはかなげな……。

「スノーウエルの出身者らしく、まさしく冬の女神って感じだな」

率直な感想が口を出た。誇張でも世辞でもない。

「そ、それって褒めてるのよね？」

「少なくともけなす気持ちは毛頭ないが」

「そ、そっか」

少女は何度か目をぱちくりさせたと、うっすらと色  
をさしたほおに手をあて、なんだか決まり悪そうに言っ  
た。

「それならいいの。うん……」

「自信持てよ。女神にお姫様だぞ」

「ええ、ええ。本当に王都のお姫様とみまちがいそうに  
なりますわ」

女店主が同意してくれたので、ウィズは我が意を得た

りと胸をはったが、アローンはますます顔を赤らめてうつむいてしまっていた。

会計を済ませて店の外に出ると、くいとマントのそでを引っぱられた。

「ありがとう、ウィズ。本当はこういうおしやね、ちよっとしてみたかったの」

顔をほころばせた女神が、ウィズを見あげて歯をのぞかせる。

つぼみに花が咲くような無邪気な微笑み<sup>ほほえ</sup>だった。

広間に顔を出した宿の主人が、蠟燭に火を灯<sup>とも</sup>し、石づくりの暖炉<sup>だんろ</sup>に薪<sup>まき</sup>をくべはじめた。まだたそがれどきを少

しまわったくらいだが、冬至とうじをすぎた北方地方は日に日に昼の時間が短くなり、夕暮れから夜よに変わるのがおどろくほど早くなる。窓の外は早くも宵闇よいやみにつつまれようとしていた。

薪をいきおいよくほうりこんだ主人が、暖炉の中を火かき棒でならしてやると、ぱちぱちと火の粉がはじけた。広間がぼうと明るくなり、テーブルで書き物をしている少女のほおに暖色をさす。

「ねえ、この「お」はどっしりという意味だったかしら」  
上目づかいの少女に問われ、対面に座るウィズは答え  
た。

「帰るとか戻るだな」

「活用形は？」

手渡された羽ペンをにぎり、羊皮紙ようひしに書きつらねて説明する。

「過去ならiojy、未来なら頭にwyをつけてwyioj、現在ならそのまま。動詞はだいたいその形で応用がきく」  
 「そっか、じゃあjio ttのあとにwyiojをつけて、つづりにも気をつけて……」

少女は再びテーブルに視線を落とし、書きものに夢中になった。字を覚えるのがよほど楽しいのだろう、文字の練習はかれこれ数時間におよんでいるが、少しも疲れを見せることなく、嬉々ききとして手を動かしている。一方のウィズは、目頭を手でもみ、いささかの疲労感

に耐えていた。辻馬車での移動中からかれこれ一週間、アローンの専属教師をつとめている。最初の数日は無為にすぎた。文章はおろかたったひとつの単語すら覚えさせることができなかつた。なぜならアローンは——いまだに妙な病気だとは思うが——ルーン文字を知らないのではなく、知っているが物理的に読めない体質。物心つきはじめた子供に教えるのと同じやりかたはまるきり通じなかつたのだ。

たとえば『わたしは家族に会うため故郷へ帰る』という一文を書くとして、普通は単語ごとにはらし、個々の単語や助詞、形容詞の意味を理解させていくものだが、アローンの場合はこれらの文字がすべて等しく渦まく円

に見えてしまいうらしいので、読みも書きも進捗しんちよくさせようがない。字体をくずしたり、丸くしてみたりと色々試しても結果は同じ。文字の識別自体が不可能だった。しかし試行をかさねるうちに、ひとつ大きな発見があった。文字は無理でも、○や→といった記号や線は問題なく識別できることがわかったのだ。

ならばとウィズはいちかばちか、レイヴロウ大陸の少数遊牧民が使っていた——ボクシウ語という——その民族のあいだだけでつうじる独自言語を教えてみた。するとアローンは紙に書かれた文字をじっと見つめたあと、琥珀色こはくの瞳ひとみをまたたかせて「読める……ウィズ、これなら読めるわ！」と狂喜乱舞きょうきらんぶした。そのあとはもう暇さえ

あれば「字を教えて字を教えて」と抱きつかれ、発見の初日などほとんど徹夜で教授した。

ウィズがはるかかなたの地の独自言語を覚えていたのは、かつて英雄たちとレイヴロウ大陸へ渡ったとき、道案内役の遊牧民と円滑に意思疎通するためだった。そのためだけに習得したので、この先二度と使う機会などないと思っていた。

（……しかしまあ、なにがどこで役に立つかわかんもんだな）

それだけに奇妙なめぐりあわせを感じずにはいられなかった。

「できた！ 見てウィズ、ほら、見てみて」

「どれどれ」

彼女に急せかさされて、紙に目を落とす。

『Jig tt wyiol o mlm ffr mrrim』

女の子らしい丸くかわいらしい字体で書かれていた。訳は『わたしは家族に会うため故郷へ帰る』。つづりや単語の順番も問題ない。ウィズは大きくうなずいて、言った。

「いいんじゃないか。よくできてるよ」

「本当に？ やった！」

アローンが喜き色満よくまんめん面して跳きびあがった。羊皮紙を胸に

抱いて宿の広間を走りまわる。はしゃぐ彼女を眺めてウィズは、自分のことのように嬉うれしくなり、同時にそうま

で共感する事実をいくぶん不思議がった。本人に自覚はないが、こうして彼が人になにかを教えるのはほとんど初めてとあっていい経験だった。教育のやりがいと充実感は、教える側にまわってみなければわからない。

（ん、なんだこれ、落書き……？）

ウィズはテーブルに、短い単語が走り書きされているのを見つけた。対面の席の端にボクシウ語なのでまちがいになくアローンの仕業だ。

『Wiz Lunq』

Wizはウィズの名前、Lunqは……。

ウィズはあわてて腕をのばし、落書きを指でこすり取った。単語の内容とそれを必死に消そうとする自分の

滑稽<sup>こっけい</sup>さに、思わず耳が朱<sup>しゆ</sup>に染まる。

「あら、消しちゃうの、せっかく書いたのにい」  
からかうような声が上から降ってきた。

「お前な……」

恨<sup>うら</sup>みがましい視線で見あげると、少女は、ぺろりと小さな舌を出してはにかんだ。

夜が深まり、十数枚の羊皮紙がボクシウ語で埋めつくされるころには、宿の広間に残っているのはウィズとアローンだけになっていた。

暖炉は、日の入りに主人が薪をくべたぎり放置されているので、とっくに火が消えている。

つりさげ式のランプと、テーブルに置かれた蠟燭で明るさは確保されているものの、肌をさす寒さが身に染み込んだ。アローンがあいかわらず肩の露出したワンピース一枚で平然としているので思いちがいにそうになるが、冬も間近の北の地にいるのだ。寒くないわけがない。そのアローンはというと羽ペンをにぎりしめつつ、ときおりうつらうつらと頭がゆれている。たぶんもういくぶんとしないうちに寝落ちするだろう。そうしたら抱えて部屋に運べばいい。ウィズはそっと立ちあがり、宿の外へ出た。

雪山から吹きおろす寒気も、からだを動かしているう

ちに気にならなくなっていく。玄関口につりさげられたランプのほのかな明かりの下で、ウィズは剣をふり続けていた。

千の素振りをおえ、演舞にうつる。しばらくのあいだ目に見えない仮想敵を相手にしていると、宿の扉がそつとひらき、隙間すきまから少女が顔をのぞかせた。

「本当に毎日やってるのね、それ」  
ウィズは手をとめず、動作を続けながら答えた。

「日課なんだよ。やらないと落ちつかないんだ」  
「ふーん」

アローンは外に出てきて、ランプの下にちよこんと腰をおろした。ガウンとマフラーをしっぴかり身につけてい

るので、最後まで見学するつもりのようなようだ。ウィズは特に気にすることなく、演舞を続けた。

「ねえ、わたしもやってみていい？」

「演舞をか？」

「ううん、剣の稽古けいこ」

ウィズは演舞を中断して、彼女のほうへ顔を向けた。

「雪山ではなにがあるかわからないから、自分がどれくらい動けるか知っておきたいの。ウィズだつて、わたしがどの程度戦力になるか知っておいたほうがいいでしょ」

たしかに一理ある、と思った。もちろん、できればたかかわせたくなどないが、俺が守つてやると宣言する強

さはウィズにはない。

「わかった。じゃあ好きに打ってきていいぞ」

そうこなくつちや、とアローンがやる気を見せた。軽やかな動作で身を起こし、ウィズの前に躍りでる。腰から引き抜いた短剣を逆手ににぎり、姿勢を沈めた。

「じゃあ、いくわよ」

跳んだ、と認識した直後、ウィズは一瞬我を忘れそうになった。相手のスピードに面くらい、意識がついてこなかったのだ。気づいたら懐に飛びこまれていた。まるで瞬間移動でもされたような速さだった。あわてて剣をかかげると、嵐のような剣撃乱舞がウィズを襲った。短剣のほうがかきくとかさそうレベルではな

い。アローンの腕の動きが速すぎて、防戦が間に合わない。軽やかに舞っているようでいて、くりだす一撃一撃もおそろしく重い。四撃目で早くも受け身の限界がきた。五撃目でこちらの剣をはじきとばされて、決着した。相手の勢いに押されて足がもつれ、尻餅しりもちをついてしまった。夜闇にとけた長剣が、からんと音を立てて地面に落ちる。「……やられてくれるにしても、そんな大げさにわざとらしくしなくても」

げんなりしたアローンに言われ、衝撃が走った。手など抜いていない。本気で抵抗し、本気でさばこうとして、さばききれず醜態しゅうたいをさらした。しかし彼女はそれを『わざと』だと言う。ウィズは混乱した。野盗三人に手も足

も出なかつたころとはまるで別人のような動きだった。成長？ けれどあれからまだ十日も経っていないし、なによりアローンは剣の修行などいつさいしていない。

「あの、ウィズ……？」

憂<sup>うれ</sup>いた瞳で見おろされ、思わず顔をそむけそうになつた。

「ああ……悪い。なんでもない……今日はちよつと、調子が悪いみたいだ……」

それから部屋に戻るまでのあいだ、表面上はなんでもないようにふるまつた。そういうことは得意だった。

——アナタ、本当に自分がそうだと思ッているの？

託<sup>たく</sup>宣<sup>せん</sup>でしめされた英雄の仲間だと。アタシはそうは思わ

ない。もツとふさわしい人間がいるはずよ。アナタより強く、勇敢で、英雄に並びたつにふさわしい……本物が。かつての仲間の言葉がふいによぎり、無力感という名のしこりと、いいしれぬ予感がウィズの心に沈殿した。

× × ×

静かな夜だった。

ここ一週間ほどずっと馬車の中で寝起きしていたので、足をのばしてゆっくりと眠るのは久しぶりだった。長時間の識字の勉強もあってか、少女の眠りは深かった。すやすやと安らかな寝息を立てて、ベッドで眠ってい

る。

静寂せいじやくが続き——朝方近くになつて、こほん、とひとつ小さな咳せきが響いた。

そのあと我慢できなくなり、少女は丸くなつて、何度も咳をした。一向にやむ気配がないどころか、どんどん痛みと不快感が増していき、最後のほうはほとんどえづきになつていた。

涙を流しながらのたうちまわり、ついに痛みのもとがお腹なかの底からはいあがつてきて、おえと口から吐きだされた。ひとまずそれでからだの不調はおさまったが、絶望的な不安が頭の中を支配した。

いま吐きだされたものはいったい、なんだ。

少女は額に脂汗あぶらあせを浮かべ、息を乱しながら、おそるおそるベッドに目を落とす。

白地のシーツを汚す——紫色の液体。

少女は悲鳴をあげて顔をそむけた。ついに来てしまった。嘘うそ、まだよ。どうして。こんなに早く。気が動転して、思わず絶叫しそうになり、すんでのところで思いとどまる。

いや、ちがう。思いこみ、見まちがいだ。胸に手を当てて、動悸どうきがおさまるのを待った。それから祈る思いでもう一度シーツを見た。

白地に染みついた血の色は、赤だった。

（だいじょうぶ……だいじょうぶよ、まだ、時間はある

……。自覚症状もないし……。わたしは化け物なんかじゃない）

それでもからだのふるえがとまらなくなっていた。洋服かけからガウンとマフラーをひつつかんで、身につける。あたたかくはならない。なにも感じない。無だ。しかし、ガウンのえりをにぎりしめていると、ふるえは、ゆっくりとおさまっていった。ウィズに買ってもらった服のおかげだ。こうしていると彼が自分をつつみこんでくれている気がする。

ふとよぎる誘惑。彼にすべて打ちあけたら、どうなるのだろう。

（……馬鹿<sup>ばか</sup>ね、そんなことをしてなにになるっていう

の)  
暴露ばくろしてすがりつきたい衝動を、理性でどうにか押しとどめた。

打ちあげたっでどうにもならないし、嫌われるのは、いやだ。絶対に。もし正体がばれて、彼に化け物とののしられたりしたら、きつと頭がどうにかなってしまおう。真実は胸に秘め続ける。そう再確認して覚悟をかためた直後——背筋にぞくりと悪寒が走った。はっとして周囲をみまわし、窓に駆けよる。

薄汚れた木窓をあけて、あけぼのの景色に目をこらすも、薄闇と朝靄あさもやにつつまれた空の下に、特に不審なものは見受けられない。

だから悪寒の源は、もつとはるか遠く——街道沿いの森の奥。

森からはなたれるおぞましい魔性を感じとつて、白磁はくじめいた白肌が総毛立った。おそろしいものが近づいてきている。この町におそろしいものが。アローンは部屋を飛びだして、ウィズのもとへ向かった。

「ウィズ……いない。どこ？」

彼の部屋は無人だった。荷物は置いたまま、姿だけが見当たらない。ベッドはかけぶとんがめくれ、かすかにシーツが乱れている。

次の瞬間、床が小刻みに震動するのを感じ、いそいで

部屋の窓に寄った。すぐさま窓枠をあげはなち、軽やかな跳躍で二階から飛びおりと、宿の敷地のすぐ側にウィズはいた。彼のほうが先に異変に気づいていたのだ。

「なんだよ、ありやあ……」

ウィズは南の森を見あげて、絶句ぜっくしていた。落葉した白樺しらかばの高木からよきりと頭をのぞかせる、巨大な怪物の姿に。全長は十数メートル、もしかしたら二十メートル近くあるかもしれない。木々をなぎたおしながら、両足をずるずる引きずるぎこちない足取りで、しかし着実にアンバンの町へ近づいてきている。怪物には頭と胴体と四肢ししがあり、外見は人間のそれに近いが、目玉はどろりと溶け落ち、ほおまで裂けたぎざぎざの口、皮膚は生

気のない士気色<sup>つちけいろ</sup>。あれはいつたいなんだ？ 正体を考え

あぐねる彼に、アローンが告げた。

「ケイアスの仇<sup>かたき</sup>よ」

およそ想定外の答えに、ウィズの瞳がまたたく。「なに？」

「パミラも」

唇をかんで、アローンは無念をあらわにした。

「殺されたわ。二人とも。わかるの」

ぼんやりと霧がかっていた己の能力が、いまでははつきり自覚できるところになっていた。あの巨大な怪物の内側に、ケイアスとパミラの思念がこびりついている。嘆き、悔しさ、懺悔<sup>ざんげ</sup>……それを感じとることができると。異

端者の村でいもしない子供の声が聞こえたのも同じ理由だったのだ。あの地下で生贖いけにえにされた子供の嘆きを、アローンは感じとっていた。

大地をふるわせる震動が何度か響くと、町の住人たちも続々と家から飛びでてきた。多くが老人か女、小さな子供で、森からやってくる怪物を見るや、パニックに陥った。若い青年や働き盛りの男はほとんど見られない。冬のあいだは出稼ぎで町を離れているからだ。

喧噪けんそうと悲鳴が飛びかう中、アローンは決意をこめて言った。

「あの怪物を、たおす。わたしたちがやるのよ、ウィズ。他にたたかえそうな人はいないし、それに——」

（あれはわたしを追ってきた。他の町や村を素通りして一直線にここへ向かっているのがその証拠……だから義務がある。わたしたちがあれをとめる義務が）

そうすることで運命を否定したかった。自分は魔の根元へデモンVの手先などではなく、人の側に立つ人間なのだ。

「行きましよう。町に入れさせるわけにはいかなから、こっちから森まで迎えうつて——」

「……お前、なに言つてんだ」

アローンにはそれが、ぞっとするほど冷たい声に感じられた。

彼は眉根を寄せて困惑していた。あきらかに気乗りし

ていない。たたかう気概がみじんもない。なぜだろう、とアローンはいぶかった。命を賭<sup>と</sup>してでもと考える自分とのあいだに、埋めがたい温度差を感じる。

「あれをとめるって、冗談きついで……。それにケイアスたちが殺されたってのも、いったいなにを根拠に言ってるんだ。あいつらとはメンザスで別れたきりじやないか」

「それは……」

理由は説明できなかつたし、したくなかつた。

「言えない。でも、こんな嘘つくわけないってわかるでしょう？ あの怪物は、村の地下で、ケイアスたちを……きつと生きてまま体内にとりこんで、それで……」

「もし仮に、お前の言うことが事実だとしてもだ」  
彼はちらと森のほうを見てから、さとすような口調で  
言った。

「俺たちが行く必要は、ない。あんなバカでかい化け物  
が現れたんだ、すぐに王都やエニドマが軍団規模の騎士  
団や魔術師を派遣するはずだ」

「それっていつここへ到着するの？ そのころにはもう  
町はめっちゃくちやにされているわ、人もいっぱい殺され  
る」

「だからそうならないように動くんだよ。逃げ遅れやパ  
ニックになってるやつを安全な場所まで誘導して——」  
「どうしてそんな後手の事後策……あいつをたおせば混

乱はおさまるのに」

「たおす？ 無理に決まってるんだろ」

アローンは大きなショックを受けて、沈黙した。ふいに後頭部を殴りつけられたような気分だった。彼の言動は出会ってからこれまで一貫していたし、今回も内股うちまた膏藥ごうやくをわめかれたわけではない。なのにいまは彼がひどく冷血で無慈悲な人間に見えてしまう。

「思いこみと勢いだけでつき進もうとするのはやめろ。あんな城の見晴らし台よりでかい化け物、いつたいどうやってたおすってんだよ、剣で斬るのか？ 槍やりで突くのか？」

「作戦があるの。勝算もあるわ」

「具体的には」

「短け……」アローンは途中ではっとし、口をつぐんだ。言えない。剣の能力を教えれば必然的に銘がばれる。ただの傭兵ならともかく、一時でも英雄アルルクルに同行していたのなら、情報を得ている可能性がある。この『因果断ち<sup>いんがだ</sup>』が、古代人が造った魔剣などではなく——本物の神が造りし魔神剣『因果断ち』であることを。

「……ウィズには掩護<sup>えんご</sup>を頼みたいの。あいつの相手はわたしがするから」

肝心な部分は伏せ、協力を訴える。

「だめだ」ウィズは取りつく島もなかった。「俺は行かないし、お前も行かせられない」

「どうして……人には勝算が低いとわかっててもやらなくちゃいけないときがあるでしょう」

「そうかもしれない。けどそれはいまじゃないし、いつさい勝ち目がないことを勝算が低いとは言わないだろ」

アローンはあからさまに不愉快な顔をした。目に見えない焦燥しつねんが彼女の足もとを焼いていた。一刻も早くこれとわかる証あかしをかかげたかった。そうする必要があった。もうそれほど時間が残されていないことに、気づかないふりをするために。

「なんでそんなに、うしろ向きなことばかり言うの？」

知らず声にいらだちがまじっていく。昨夜の——模擬戦で彼が見せた情けない表情が脳裏に浮かび、かつとな

る。

「やりもしないうちから、うじうじと言いついて……本当はただこわいだけでしょ」

「そうだよ、こわいさ……」

彼は真実おびえているようだった。そのことがことさらアローンのかんにさわった。

「あんなもの、俺の手におえる相手じゃない。俺が行ったって時間かせぎにすらならない。わかるだろ、行っちゃって無駄……犬死にはごめんだ。それより町の住人を少しでも——」

「わたしのことは守ってくれたじゃない！」  
ついにアローンは声をあららげた。

「死ぬかもしれないのに、見返りなんてなにもなかったのにも、助けてくれた……何度も！ どうして今回だけそんなに渋るの？ いままでとなにがちがうっていうの？」

「状況がちがう。これまではまわりに誰もいなかった。でもいまはそうじゃないだろ」

「まわりの人間に押しつけられるから、自分ではなにもしないんだ」

「ちがう。落ちつけよ、どうしたんだ、急にムキになつて。俺が言いたいのは、それぞれの領分で役割を」

「……そういう考えでいるからよ」

侮蔑<sup>ぶげつ</sup>をおびた冷たい声音が、アローンの口<sup>くち</sup>の端<sup>は</sup>からも

れでた。

「ぐちぐちと、うしろ向きな言い訳ばかり並べて……よくわかったわ。だからよ。だから……」

感情が高ぶる。もうとまらなかつた。

「だからあなたは本物の英雄たちに見限られたんだ！」  
大声でさげぶと、なにもかもをふりきるように、がむしやらに森へ向かって駆けだした。真横をとおりすぎるとき、彼と一瞬だけ目が合った。

彼はなにも言わず、ただ呆然<sup>ぼうぜん</sup>としていた。

そのあとは——どれだけ先へ進んでも、自分に追いつこうとする足音がうしろから響いてくることはなかつた。最後まで。

× × ×

これまで何万回剣をふつてきただろう。

みんなとの差はわかっていた。それでも追いつけると  
思っていた。才能ある人間が常人の十倍の速度で成長す  
るなら、自分は十倍剣をふればいい。そう思っていた。

けれど駄目だった。追いつくどころか実力差は日に日  
におそるべき速さで広がっていき、ついにそのことに耐  
えられなくなつて、前のめりにたおれた。

持たざる者の限界を自覚して、あきらめた。

けれど……けっきょくは、言い訳だったのだろうか？

すべては、己の努力不足をごまかすための言い訳。ただ自分を正当化するためだけの……。だからまた去っていく。自分のみにくい言い訳に嫌気いやけをさして、彼女も……。

見る間に少女の背中が遠ざかっていく。

ためらいがちに腕をのばし、それをつかみとろうとした。

もちろん、遠く離れているのでつかまえることはできず、呆然としているうちに、少女は森の中に消えてしまった。

すぐに追わなければ、とウィズは思った。

一緒にたたかうためではない。むりやりにでも連れ戻すためだ。たしかにアローンは強くなっていた。まるでお伽<sup>とぎ</sup>噺<sup>ばなし</sup>の魔法にかかったみたいに急激に劇的に。理由はわからないが、ウィズをあっさり追い抜き、はるか高みへ行ってしまった。

しかしそれでも人並みだ。単独であの巨人をどうにかできる強さでは決していない。ウィズは腰にさした剣と、小道具をおさめたポーチを確認すると、すぐさま森へ向かおうとした。

直後、朝焼けの空に、子供の悲鳴が響きわたった。ぎよつとして声のほうへ視線をやると、

「……<sup>アンデッド</sup>死腐っ！」

小さな二人の子供と、それを追う異形の姿をとらえた。  
 土塊つちくれよりよみがえりし不死者、死腐アンデッド。腐肉を地面にまき  
 ちらし、鼻の曲がるような死臭ししゅうをはなっている。  
 死腐アンデッドは足が遅い。が、子供たちは十に満たない幼さな  
 ので、いまにも追いつかれそうだ。ウィズはほんの一瞬、  
 刹那せつなだけ迷ってから、彼らを助けに向かった。  
 死腐アンデッドの前にまわりこんで立ちふさがり、ポーチから取  
 り出した浄札じよつふだをただれた顔面にはつつける。神官の力が  
 こもった聖なる力が彼岸ひがんの不死性を清めはらい、腐食し  
 た肉体をどろりと溶かし尽くした。  
 こわばった肩の力を抜き、短く息を吐く。一体相手に  
 するのにも命懸け。だというのにさらなる新手が牧羊地の

向こう——十字をかかげる墓場から、ぼこぼこことわきで  
てくるのが見えた。

あの巨人に呼応したにちがいない、とウィズは思った。  
呪術や死霊術にそこまで明るいわけではないが、死者の  
魂はより上質で強大な同質の存在死者によって呼び起こされ  
るものだと聞いたことがある。つまり死者が死者をよみ  
がえらせるのだ。そして寄り集まり、ふくれあがってい  
く。海へつながる川の流れのように。

墓場からよみがえった死腐は、視認アンデッドできただけでゆう  
に二十体を超えていた。とてもウィズ単独で対処でき  
るものではなかった。かといって援軍をのぞめる状況でも  
なさそうだ。まわりを見るかぎり、武器を持ってたたか

おうという者はいない。みな一様に必死の形相で、町の北西へ逃げていた。まるで犬に追いたてられる羊の群れのように、巨人や死腐アンデッドのいないほうへ。

ウィズは子供たちを見おろした。

八、九歳くらいの男の子とそれより若い女の子——おそらく兄妹だろう——の二人組。兄はウィズのズボンと妹の手とを力いっぱいにぎりしめ、妹は顔面を蒼白そうはくにさせてふるえあがっている。すぐにでもアローンを追いかけてたい。彼らをほっぼりだすわけにはいかない。二律にりつ背反はいはん。天秤てんびんにかけられた選択はどちらかしかえらべない。

ウィズは腰をかがめ、「安全な場所まで連れて行くからだいじょうぶだ」と男の子たちに告げた。彼の實力で

は、ひとつのことに対処するだけで精いっぱいだった。

× × ×

アローンの行く手をはばむものはなかった。

異端者の村で死骨と対峙たいじしたときと同様、死腐アンデッドも積極

的に彼女に襲いかかってくることはなかった。なかば

同類と思われているからだ、とアローンは推測していた。

不愉快極まりないが、そのおかげで最短距離をつつきれ

た。白樺の森に人影はなく、逃げ遅れのきこりをひとり

見つけた以外は無人だった。これなら思いきりやれる。

しばらく進むと、地響きが大地をゆらし、巨大な足が

近くの木々を根こそぎなぎたおした。

敵が近い。アローンは短剣を引き抜いて逆手に持った。狙いは巨人の顔面。どんな巨大生物だろうと、たとえ人外の魔物だろうと関係ない。刀身を額につきたてれば勝負は決まる。魔神剣『因果断ち』には、そういう能力がある。

ウィズがいれば足どめを頼み、もつと楽に作戦を実行できただろう。しかし単独でも支障はない。巨人はアロンの存在をまるきり無視していた。足もとをちよろちよろ飛びまわる蠅はえくらいに思っているのだとしたら、それが敗因。アローンは跳躍し、断崖絶壁を駆けのぼる大角シカおおづののように、次々と足場を移して巨人のからだを

駆けあがった。あっという間に地上二十メートルの頭部まで到達すると、くるつと宙で身をひねり、その勢いのせて短剣をくりだした。タイミングも位置も完璧だった。このまま刀身をつきたてれば、巨人は『呪術的な儀式によつて結びつけられた創造の因果<sup>いんが</sup>』を失い不動の木偶<sup>でく</sup>になりさがる。

「え……」

かきん、と刀身がはじきかえされる音がして、少女の口から間の抜けた声もれた。必殺のひとさしは、相手の額に到達する前に、見えなにかにさえぎられてしまった。巨人の周囲をおおう……透明な壁みたいなものが短剣をはじめいたのだとアローンは理解した。

(……なに、これ……見えない壁が……！)

巨人の周囲を透明な壁がおおっていた。呪術的、あるいは魔術的な障壁しょうへきだろうか。どちらにしろアローンにはどうしようもない。浅慮せんりよだった。魔神剣を過信していった。切れないものなどない、断ち切れないものなどないと思いきりでいた。だから初撃にあらんかぎりの力をこめ、その先のことは考えていなかった。

巨人がこぶしをふりおろし、アローンを地上へたたき落とした。

地面にたたきつけられたアローンは、全身をつらぬく激痛に身もだえし、吐血した。血の色は赤だった。それはまだ彼女が人の身であることの証しょうこ左であり、人である

がゆえの脆弱せうじやくさを意味していた。落下途中で白樺にぶつかりクッションになったおかげで一命をとりとめた。けれども重傷だった。内臓を痛めてまともに呼吸ができななし、右足は完璧に折れてあらぬ方向へ曲がっていた。頭をかち割るような頭痛が響き、指先を少し動かそうとするだけで激しい痛みが走る。

巨人は再び前進をはじめた。仰臥ぎようがするアローンには目もくれない。巨人が歩くたび、地面が大きく震動し、近くの白樺がまとめて踏みつぶされた。そのうちの一本が飛ばされてきて、運悪くアローンのからだにのしかかった。

彼女のからだは、巨人の進路上にあった。このまま

は、もう何歩もしないうちに、踏み殺される。けれど高木をどかす腕力も、逃げる脚力も残っていない。

アローンは唐突に、六人の少女たちとすごした暗い地下室のことを思い出した。あそこで暮らした七年間が、彼女に冷たい現実をつきつける。

どれだけ願っても、援軍や助けは来ない。都合のいい王子様も英雄も現れない。

彼らが救ってくれるのは、物語の中のお姫様だけなのだから。

× × ×

ウィズは子供を背にかつぎ、追いつがってくる死腐アンデッドの群れから逃げていた。少女ひとり分の加重ならまだウィズの足のほうが早かった。しかし死腐アンデッドは際限なく増え続けているので、遠くないうちにとりかこまれてやつらの仲間入りになるだろう。ただやみくもに逃げていてはだめだ。残り少ない浄札で近くの死腐アンデッドを退けてから、自分の側にぴたりとはりついている男の子にたずねた。

「両親は？」

男の子は首を横にふつた。

「……わからない……お父さんは森に木をきりにいつて、ぼくたちは羊のおせわしてて、そしたらお墓から……ひっく」

「この町にも教会はあるな？ 場所はわかるか」

男の子がふるえる指先を北西へ向けた。やはり予想したとおりであった。聖職者の加護がほどこされた教会はアンデッドの死腐の侵入を阻害する。教会に逃げこめば死腐は手を出せない。町の人間たちがこぞって北西を教会を目指すのは道理だし、騎士団や魔術師団が到着するまで立てこもれば被害は最小限におさまるだろう。

（……相手が死腐だけならな）

ウィズは絶望的な思いで、森の巨人を見あげた。あれがいるかぎり籠城は無意味だ。あの巨体ならば加護など関係なく教会ごと踏みつぶす。かといって籠城を放棄してバラバラに逃げ惑えば死腐どものいい餌食。

詰んでいる。ウィズは顔をゆがめて、ほぞをかんだ。アローンが正しかった。町の人間を見捨てて逃げるのではないかぎり、選択肢ははじめからひとつしかなかった。先行して巨人をくいとめる。無謀だろうと勝算がなからうと、そうするしかなかったのだ。

きちんと考えればこうなることは予期できたはずだ。なら、どうしてあのかるときアローンに同行しなかった？ 作戦があるという彼女の話をもろくに聞こうともせず、頭ごなしに否定した？

決まっている。やつかみだ。ウィズはアローンの強さをやつかんだ。彼女の強さと才能にふれたくなかった。昔と同じ思いを味わいたくなかったから。

（情<sup>なご</sup>けねえ……けつきよく俺は自分のことだけで……ア  
ローンのことを少しも見ていなかった……）  
後悔にさいなまれる彼の思考に、知らない男の声が割  
りこんできた。

「カイリ、マリー！」

斧<sup>おの</sup>を持った中年の男が息を切らせて駆けよってくる。  
見覚えがあつた。宿の主人だ。

「お父さん」「パパ」子供たちがウィズのもとを離れ、泣  
きながら男の胸に飛びこんだ。どうやら親子だつたらし  
い。

「ありがとう」

子供たちを抱きとめながら、男が顔をあげた。

「わしだけでなく、子供たちまで助けに来て。あんなたちにはなんと礼を言ったらいいか」

ウィズが怪訝けげんな顔をしていると、男は首をかしげた。

「あの白い髪の子、あんたの連れだろう？」

「アローンに会ったのか!？」

「ああ。森で死腐アンデッドに襲われそうになったところを助けてくれたんだ」

男はそう言ったあと、表情を曇らせて下を向いた。

「そのあと怪物をとめると言って森の奥に。わしはとめただが……」

ウィズは周囲に視線をめぐらせた。目的の教会はもう目と鼻の先だった。いまなら進路上に死腐アンデッドの姿もない。

「子供たちのこと、まかせていいか」

「それは、もちろん……まさかあんたも森に？」

男はぎよつとして顔をあげた。しかしそこにもうウィズウィズの姿はなかった。ひたすらに駆ける背中がどんどん小さく、遠く離れていく。男は両手を胸の前で組み、彼の無事を聖ルーン神に祈った。

× × ×

暗い地下室にとじこめられていたころは、夢想到にひたることだけが唯一とっていい心の慰みなぐさだった。

何度も何度も『アーカーシャ英雄物語』について他の

少女たちと語り合った。ほぼ完璧に内容を覚えこんでいたカーミラに「あの場面」とたずねれば、そのシーンを暗唱あんしょうしてくれたので、文字が読めなくなっただあとでも問題はなかった。アーカーシャ物語について語らう機会が多かったのは、単純に好きだからでもあつたし、彼の話をすること自分たちが聖ルーン……ひいては人間の側によりそう存在なのだと主張する意味あいもあつたのだと思う。

お気に入りシーンの話題になると、他の六人はこぞつてアーカーシャの武勇をあげた。アーカーシャが精霊を助ける場面、デモンとの死闘、決着の瞬間、城に帰ってお姫様と抱き合い、エピローグでの結婚などなど。

そんな中わたしだけが、みなとちがう主張をした。わたしは——もちろんアーカーシャ本人はかつこういいと思うが、それより終盤の——デモンがお姫様を狙って投げた剣を、ピピンという青年が身をていしてかばうシーンが大のお気に入りだった。

他の六人からは「変わり者」「意味わかんない」と散々な言われようだったが、わたしはじつは英雄アーカーシャよりもピピンのほうが好きだったのだ。ピピンは王国の兵士で、いつてしまえば当て馬の脇役わきやくである。彼に対しての記述は全編とおしてたっただの三行しかない。

——デモンの暗黒剣は、姫の心臓をうがつかつことはなかった。物陰から飛びだしてきた青年が、姫をかばい、か

わりに剣の一撃を受けた。青年は王国の兵士で名をピピンと聞いた。ピピンはふりかえって姫の無事をたしかめると、手の槍を取り落とし、ぎょうが仰臥して息絶えた。これだけだ。

ちなみにピピンが死んだあとは、あらためて姫を殺そうとデモンが武器をかまえたところでさっそう颯爽とアーカーシャが登場し、アーカーシャとデモンの壮絶なたたかいがはじまる。そのさい両者ともピピンの死についてはいっさいふれず、姫様も「ああ、光の英雄アーカーシャ様、どうか勝利を」とピピンそっちのけで祈り、最後までねぎらいの一言すらない。

まだ物心つくかどうかのころ、はじめてアーカーシャ

英雄物語を読んだときからわたしは「ピピンこそが本当に勇敢な勇者ではないのか」と漠然と思っていた。

聖ルーンに加護を受け、王様から王家の武器を授かり、多くの仲間や神霊、精霊の力を借り準備万端で進撃したアーカーシャに対して、ピピンは（おそらく）ただの一人兵士として鉄の槍一本だけをたずさえて単身デモンの城へ乗りこんだのだ。劇中でピピンの心情はまったく語られない。けれど兵士としての使命感や義務感だけでなく、お姫様への憧れや恋心もあったのではないかと考えると、せつなくてやりきれなくて涙が出た。

みなにもピピンのよさをわかってもらいたくてたびたび力説したものの、「でもけつきよくなにもできず死ん

じやうんなら意味がないじゃない」というエレオノーラの無慈悲でもつともな一言をくつがえせず、ピピン布教運動はあつさり水泡すいほうに帰きした。

当時は自分の考えをまとめる思考力や語彙ごいが足りなかった。けれどいまなぜ自分がピピンに共感を抱いたかわかる。大事なのは結果よりもそこにいたる過程。他者のためになにかをなそうとする前向きな意志。それこそがきつと、もつとも高潔で美しい。そう思うから……だからわたしは――

巨大な物体が朝焼けの空をおおい、アローンのからだに暗い影を落とした。

死<sup>マ</sup>大腐<sup>ダ</sup>が目前までせまっていた。すぐ側の地面が、木々もろとも超重量におしつぶされて、冗談みたいに巨大なクレーターをつくりだした。

次だ。次は自分の番。次の一歩で巨人はここへ到達し、わたしもろとも踏みつぶす。アローンはのしかかる白樺をどかさうと両手に力をこめた。

（だめ……ぜんぜん力が）

太い幹<sup>みき</sup>はびくもしない。重傷を負ったからだでは、どうやっても動かせない。

視界がゆっくりと暗黒につつまれていく。巨人の右足が頭上をおおいつくし、くいを打つハンマーのように、いまにもふりおろされようとしている。アローンは脱力

して、ぼうとその様子を眺めた。人の最期とはこんなにあっさりしたもののだろうか、と他人事のように思った。もちろんわけのわからない巨人に踏み殺されるなんて口惜しい。

（でも……物語のお姫様は無理だったけど、英雄に退治される化け物でおわらなかつただけマシかしらね……）  
 少なくとも死に方としては最悪ではない。そんな諦観めいた皮肉が頭をかすめたとき、ふいにエレオノラの顔が浮かんだ。七年におよぶ監禁生活がおわり地上へ出される直前の、彼女の言葉を思い出した。

——あたしはこの力を使って、世界に復讐してやるわ。あたしたちを助けなかつた聖ルーンも、ルーンを妄信す

る信者たちもゆるさない。

——あんたはどうするの、アローン。あんたは国に帰ってなにがしたいの？ 残された短い時間であんたはなにをするの？

わたしはぱくぱくと口を動かして、答えた。

母と姉のため。そうだ、わたしは帰らなくてはならぬ。まだ死ねない。死ぬわけにはいかない。身命しんめいを賭として、母と双子ふたごの姉が待つスノーウェルへたどり着かなくては。死ぬのはそのあとだ。

激痛にかまわず『因果断ち』をにぎりしめると、刀身を白樺の幹につきさした。剣が持つ能力により、誕生の『因』と成長の『縁えん』を断ち切られた大木は存在の『果』

を失い、急速に朽くちはじめた。

アローンは反転してうつぶせになり、からだを引きずって、リンゴの芯しんみたいにかスカスになつた枯れ木から抜けだした。そのまま芋虫いもむしのようにはいつくばって、巨人の足から逃れようとした。

(……あきらめない、わたしは……)

上空で暴風がまきおこつた。巨人の足が落ちてくる。周囲の地面にはまだ影が満ちていて、抜けだすにはあと三メートルは必要だった。手をのばしても届かない。光のさす場所までたどり着けない。死を意識すると、刹那のあいだに走馬燈そうまとうが駆けめぐり、最後に青年の顔が浮かんだ。地上に出てからずつと行動をとみにした、気むず

かしくもやさしい青年の顔が。

(……やだっ……助けて、ウィー……)

次の瞬間、勇ましいおたけびがとどろいた。若い男の  
 声——が耳を打ち、剣が峰の渦中でアローンは、この  
 上ない幸福に満たされた。来てくれた。願いがつうじた。  
 彼が助けに来てくれた。絶体絶命の窮地に彼が。仰向け  
 になつて空を見あげると、長剣をたずさえた男が跳躍し  
 て、巨人に斬りかかるのが見えた。ものすごい跳躍だつ  
 た。ひと跳びで巨人の胸のあたりまで舞いあがり、白光  
 をまとった刀身を大上段からふりおろした。稲妻いなずまみたい  
 な大音声とともに、地上まで到達しそうなほどの激烈な  
 剣閃けんせんが走り——アローンは混乱にみまわれた。

(ウイズ……じゃない！)

窮地に現れたのは、ウイズ・ヴァイスではなかった。見覚えのない知らない男だった。いったい誰。がっしりした体格で勇猛<sup>ゆうもう</sup>を体現したような青年。なのに、その顔立ちはまるで無垢<sup>むく</sup>な少女みたくに愛らしく<sup>おさな</sup>幼い。不思議な人間だと率直に思った。

「よくがんばったわね。もう安心よオ」

頭上で女の声がした。アローンはかすかに首を動かして、女を視界に入れた。薄いヴェールに身をつつみ、刻印の入ったグローブを両手にはめている。おそらく魔術師だろう。じつとアローンを観察した女は、顔をあげて青年に告げた。

「だいじょうぶ、生きてるわ。でもひどい重傷、いそいで手当しなくちゃ」

落雷のごとき一撃を受けても、巨人は破壊されることも消滅することもなく、まったくの無傷だった。あの見えない壁のせいだ、とアローンは思った。

「ユフィールはその子の治療をお願い。キルシュはアンバンへ先行して町の人たちを守って」

青年がさげび、また巨人へ斬りかかっていく。その言葉でアローンは、魔術師の他にさらに女が二人いることに気づいた。純白のローブをはおった小さな少女と、凜りんとした雰囲気をまとう背の高い剣士。剣士のほうは、ひしなり型の刀身——半透明なのでおそらく魔剣——をひ

るがえし、近くの死腐を<sup>アンデット</sup>一掃すると、一瞬にしてその場から姿を消した。木立のはるか向こうに豆粒みたいに小さくなつた背中を見つけて、おそるべき速さで町へ向かつたのだと、アローンはおどろきとともに理解した。この四人組はいったいどういう存在なのだろう。少しでも事態を把握するため身を起こそうとしたが、ちよつとやらだを動かしたただけで頭のとっぺんからつま先まで激痛にさいなまれた。苦痛にうめいていると、ローブの少女が近づいてきて、胸の上にそつと手を置いた。

「じつとしていてください。すぐに治療しますから」アローンは少女の手のひらから、太陽みたくに力強くあたたかな光が放射されるのを感じた。その光がからだ

の隅々まで浸透すると、痛みがじよじよにおさまり、折れた骨がくつつき、ぱっくりと裂けた皮膚がつながりはじめた。

（もしかして、これが……神力？）  
きつとそうだろう。痛みが少しずつやわらぐと、戦況を見る余裕がうまれた。

青年は目にもとまらぬ剣舞を次々とくりだし、巨人を完璧に足どめしていた。しかしその攻撃はすべて『不可視の壁』にはばまれており、損害を与えられていない。  
「呪術障壁みたいねエ。それならアタシが」

魔術師の女が刻印のグローブをかかげ、手のひらから魔術弾を撃ちはなつた。近くにいてだけで全身がびりびり

りとふるえるほどの、激烈な魔力をおびた光弾が、次々と巨人めがけて飛来した。数はゆうに十発以上。着弾する端から目もくらむ大爆発を引き起こし、巨人の周囲はほとんど人工的な嵐となつた。

木々がふきとび、地面がえぐれ、巻きおこる煙がはれる……。巨人は無傷だつた。しかし変化があつた。呪術障壁にひびが入っている。復元機構をそなえているのか、ひびはすぐに元どおりに直つてしまつたが、この隙を見逃すはずもなく、青年と魔術師は互いにうなずきあい、それぞれの攻撃を同時にくりだした。魔術師が嵐の光弾をみまい、それに合わせて青年が白光をまとう騎士剣を大上段でふりおろした。天をつくほどの——巨大な

光の刃が光弾とともに障壁を直撃し、今度は強固な防壁をこつぱみじんに打ち砕いた。

「これで、おわらせる！」

青年が、再度剣に白い光をまとわせる。そして決着の一撃を解きはなつた。

最初の攻撃からこの二撃目まで、間があいたのはほんの一瞬<sup>かんげき</sup>。彼が意識を集中させるほんの一瞬だけ。しかしその間隙<sup>かんげき</sup>に、巨人は障壁を再展開させていた。光の刃は、ふたたび壁にはばまれて消滅してしまった。青年は啞然<sup>あぜん</sup>とし、魔術師が苦々しい顔で舌打ちする。

「なんて復元速度……ヤツかいね。これじゃあ、いたちごっこだわ」

むろん無敵ではない。魔術師はこの障壁についての知識を有しており、明確な弱点もすでに看破かんぱしている。時間だ。呪いの障壁は、展開にとほうもないエネルギーを必要とし、一度展開すると発動者の生命力が尽きるまで解除できない。つまりは特攻用の自爆技。高位の呪術師や死霊使いだけが使える禁断の呪術。

「あの巨体だもの。おそらく、数時間ともたないはず」  
魔術師の考えは正鵠せいこくを射ていた。しかし、無意味な推察だ。たとえ残り時間がほんの十数分だったとしても、この場でしとめねばならないことに変わりはない。そのとき、焦燥する魔術師の背後で、アローンが動いた。神官の少女にのしかかって、むりやり立ちあがる。

「あ、まだ動いてはだめです。まだ治療の途中で——」  
少女の制止は無視して、魔術師のもとへ近づく。薄い  
ヴェールをつかんで引っぱり、怪訝けげんな顔をする彼女に向  
かって言った。

「もう一度、いまのをやって」

「え……？」

「もう一度、二人で壁を壊して。そうしたら、わたしが  
あいつをたおす」

アローンの外見はひどい有様だった。髪は土とほこり  
にまみれ、全身傷だらけ、白いガウンとマフラーは大量  
の血でおどろおどろしいほど真まっ赤かに染まっている。し  
かしその深紅こそが彼女に使命感と勇気を与えていた。

「わたしの魔剣ならおわらせられる。詳しく説明するひまはないけど、信じて」

唐突な提案に、魔術師はあからさまに困惑をみせた。隣の男に目配せして、

「そんなこといきなり言われても——」

「わかった。信じるよ」

青年が大きくうなずくと、魔術師はおどろきに目をしばたいた。

「この子はたったひとりで死<sup>マ</sup>大<sup>ー</sup>腐<sup>ダ</sup>をとめようとしてた。勇敢で、強い子だ。その子が策があるっていうなら、ぼくは信じる」

彼がリーダーなのか、魔術師は反論をのみこんでグロ

ーブをかかげた。

「……ありがとう。お願い」

アローンは短く礼をのべ、半歩ひいて短剣をかまえた。会ったばかりなのに、彼らに対して無垢むくともいえる信頼を覚えていた。実力の一端を垣間見たからだろうか。心地よい一体感と連帯感の中、目の前の二人が動く。三度目となる魔術弾と、光の刃。呼吸を合わせた同時攻撃。

完璧なタイミングだった。二人は期待に伝えてくれた。ならば次はわたしの番。嵐と閃光せんこうと巨大なエネルギーの渦中へ、アローンはつつこんだ。小刻みに跳躍を重ね、巨人の頭部を目指す。すぐ間近の中空で大爆発と轟音ごうおんが

とどろき、アローンの聴覚と視覚をうばった。青年たちにはあえて伝えなかつたが、この作戦には大きなリスクがあつた。

たちこめる煙と無音の世界をつき進むと、突然、びちやりと左腕になにかかかつた。ねばねばとした感触を覚えた直後、皮膚に焼けるようなすんどい痛みが走る。酸、と直感した。粘性を帯びた酸を吐きかけられたのだ。何度も同じ攻撃をして、巨人がぼうつたっているだけのはずがない。当然反撃される。それを受けきり、かつ、砕いた呪術障壁が再展開される前に短剣をつきたてなければならぬ。痛みはいまさらだ。片足はまだ折れただままだし、傷がいくつ増えようが皮膚が溶けてなくな

ろうが関係ない。アローンには不断の意志があつた。なにかえても巨人をとめるといふ不断の意志が。

けれどその高潔な精神に、肉体が追いつかなかつた。ふたたび左半身に酸を吹きかけられると、からだが大きくぶれて、上昇加速が弱まつた。直後に、肌にひりつく悪寒<sup>おかん</sup>。見えないが、さらなる攻撃が発射されたのだとわかつた。このままでは届かない。巨人の頭部へ到達することなく、地上へ落下してしまふ。絶望が脳裏をよぎつたそのとき、ぐんとからだが上に持ちあがつた。気のせいではない。なにかが自分のからだをつつみこんでいる。「やっと追いついた！」

耳元で青年の声かして、アローンは動転した。彼が跳

んできた。たぶん、最初の一撃をはなつと同時に。予期していたの。こうなることを。そしてわたしを守るために……。

「きみは傷つけさせない。だから、死大腐<sup>マーダー</sup>を……！」

青年の左腕は粘性の酸を無数に浴び、無惨な状態になっていた。肉の焼ける嫌なにおいが鼻孔<sup>びこう</sup>をつく。アローンは、彼の腕の中で、力強くうなずいた。

「……まかせて。絶対に成功してみせる！」

煙がはれて、巨人の頭部が、眼前に出現した。呪術障壁はない。が、いまにも再生しようとしていた。ばらばらに砕かれたガラス片が寄り集まるように、元のかたちを取り戻そうとしている。アローンは青年の肩を蹴って

加速をつけ、必死に右腕をのばす。

そして——閉じきる寸前のわずかな隙間に、短剣をつきいれた。

× × ×

ウィズは町の中心部を走っていた。

入り組んだ路地を進んで、大門へ向かう。

最初はいちいち死腐アンデッドを相手にしていたが、途中から敵

の数が目に見えて減っていった。理由はわからない。騎士団の先遣隊せんけんたいが到着したのだろうか。

（だとしても、森でアローンがたたかっていることに変

わりはない。急げ、もっと早く！)

ウィズは焦燥していた。建物の陰になつたせいではばらく森の様子が確認できなかつたので、不安がつつた。ときおり地響きと、ものすごい爆発音が響き、不安はさらに増した。

ようやく細い路地を抜けて広場に出ると、突如として異様な光景が飛びこんできた。

(なんだ、これ……町の住人が……?)

大門に、多くの人間が殺到していた。町の外へ逃げようとしているのではない。この南門は巨人のいる白樺の森に直結しているので、逃げるどころか恐怖の根元へ手<sup>て</sup>ずから飛びこむことになつてしまふ。さらに妙なのは、

ここに集まった人々がそうじて呑気のんきというか、混乱や恐怖をまったく身にまどっていないことだ。たしかにこちら一帯に死腐アンデッドはおらず、一見安全に見える。だがあの巨人がいるかぎり、危機に瀕ひんしているのに変わりないはず……。

（いや、巨人は……どうした？ 巨人が……）  
いない。森を見まわしても巨人の姿はいつさい確認できなきつない。ウィズは狐きつねにつままれる思いがした。石置の階段をおりて、大門へ近づいていくと、わっと人々の歓声が巻きおこった。

「ねえ、恥ずかしいからやめてよ」  
ウィズは群衆の中へつつこんだ。

「だいじょうぶだから、おろしてっば」

アローンの声だ。無事だった。帰ってきた。

「ほら、みんな見てるじゃない、もう」

たぶん巨人は、王都から派遣された騎士団か魔術師団が撃退したのだ。そして負傷したアロンを見つけ、連れ帰ってきた。ウィズは人波をかきわけた。もみくちやにされながらもどうにか最前線まで進み、輪の内側に顔を出した。

そして輪の中心にいる五人組を視界に入れて、一瞬、我を忘れた。

「恥ずかしいから、いいかげんおろしてよ」

「だめだよ」

アローンを背中にかついだ青年が、微笑みながら答えた。

「怪我してる女の子を歩かせられないもの」

「まだ足が折れたままなのだろう？ 強がりなど言わず、素直に甘えることだな」

凜とした女剣士がおだやかな声で言う。

「そうそう。宿まではこのままでもらうからね」

「こんなんじやいい見せ物じゃない」

アローンがぶくうとほおをふくらませると、薄いヴェールをはおった魔術師が大げさに肩をすくめた。

「いじツぱりねエ。そんなふくれツ面してないで、光栄

に思いなさい」

「そうですよ、アローンさん」

神官装の少女がうなずき、小声でひとりごちる。

「……おんぶ、うらやましいです。わたくし、一度もや  
つてもらったことないのに」

町の住人が拍手喝采はくしゅかつさいで彼らをたたえていた。賛辞の多  
くは青年に向けられていた。青年はゆっくり首をめぐら  
せて自身に注目を集めると、ひよいとかからだを反転させ  
てアローンを胸の前に抱き、お姫様抱っこのかっこうに  
する。

「ぼくたちはなにもしてません。この子です」

ぎよつとするアローンにかまわず、恬淡てんたんとした口調で

言った。

「森の巨人はこの子、アローンがたおしたんです。この町を救ったのは彼女です。町を守るためにひとりで、こんなにぼろぼろになるまでたたかっ……だからみなさん、お礼ならどうか彼女に言ってあげてください！」

好奇の視線が一斉にアローンに注がれた。ぼろぼろの服、ほこりと土と血にまみれた、傷だらけの少女。みな、その外見の痛々しさに一瞬気後れしたが、誰かが「町を救ってくれてありがとう！」とさけんで手をたたくと、すぐに礼賛れいさんが伝播でんぱした。

何十人も熱視線をあびる気恥ずかしさに耐えかねたのか、アローンがほおを赤くして抗議した。

「や、やめてよ、バカ！」

魔術師がひよっこり顔をのぞかせて、いたずらっぽい笑みを浮かべる。

「あらあら、顔を真<sup>ま</sup>ッ赤<sup>か</sup>にしちヤツて、かわいいわねエ。ユフイーみたいなにからかいがいのあるおもちヤ……じゃなかつた、純粋な子だわア」

「プラリネさん、いまわたくしの悪<sup>悪</sup>言<sup>言</sup>いませんでした？」

「まさかア」

ぴゅーと口笛をふいてごまかすと、神官の少女がぽかぽかと魔術師をたたきはじめた。アローンは半ばあきれ気味に、「ちよつと、そつちで勝手に盛りあがらないで

よ……！」

「あら大変、お神輿みこしがしヤベツたわア」

「もうー！」

「ねえ、あの、プラリネ、ふざけるのもほどこほどこに……」

「やれやれ。そんなにさわがず、素直に抱きかかえられていればいいだろう、名誉の負傷なのだ。いつたいなにを恥ずかしがっているのだから」

「はあ？ ならあなたがかわってよ。あなたが彼に抱っこされてよ」「なっ……」

「少しも恥ずかしくもないんでしよう？ ならかわってよ、

ほら、さあ」

「そ、それは……」

「あはッ、キル姉様がやりこめられてるわ。おかしい——」

「ふふ、こんなにあわててるキルシユさん、めずらしいです」

「キルシユ、どこか痛めたの？ もしつらいならばくが抱っこ——」

「けっこうだ」

「あはははっ」

笑っていた。五人全員が楽しそうに。寡黙かもくなキルシユ

まで歯を見せて微笑んでいる。憧憬しょうけいの体現がまなこに

映り、ウィズの心をふるわせた。何年も一緒に旅をした中で、五人で心から笑いあうことなんて一度もなかった。ただの一度も。

「……」

歯抜けのピースがぴたりとはまり、芸術的な絵画が完成した。王都フィンの宮廷画家が描いた渾身こんしんの芸術作品が実態としてそこにある。ウィズには、彼らの風姿ふうしがそのようなに見えた。かがやいていた。かがやく光の中にあつた。賛美と喝采がふりそそぐ中、それにふさわしい者としての雰囲気ふんいきを彼らはまとっていた。手をのばせば届きそうなほど近いのに、はるか遠い。天と地ほどのへだたり。

しばらく群衆にまじって呆然としていると、アローンの首もとから血にまみれた白いマフラーがするりとほどけ落ちるのが見えた。

落ちたマフラーを拾う者はいなかった。アローンも、他の四人も、誰も気づかない。地に落ちた薄汚れたマフラーなど、前を見据える彼らの目には入らない。

おだやかな諦観がじつとりとウィズの心に浸透した。悲しいとか寂<sup>さび</sup>しいとかそういう気持ちにはならなかった。行動の遅れた自分自身を責めさいなむ気持ちもわからない。ただおさまるべき場所におさまったのだと思った。昨夜の直感<sup>ちかく</sup>は正しかったのだ。アローンの居場所はあるところだった。

ウィズは顔をひっこめて、熱狂する人々の輪から抜けだした。

そしてそのままアンバンの町を出た。

胸をさらう喪失感は、目的をうしなつたせいだと、そう思った。

× × ×

荒れ果てた墓地は時間と手間をかけて、丁寧に修復された。

かたちの残つた死腐と、死腐の手にかかった住人たち

は、区画をわけて丁重にほうむられたあと、もう二度と現世に迷いでないようユフィールによって聖職者の祝福がさずけられた。他の面子めんつは、近隣都市から派遣されてきた騎士団とともに町の周回にあたり、隠れひそむ死腐アンデッドを見つけだして掃討した。

墓地でのつとめをおえたユフィールは、報告のために中央広場へ戻った。仲間たちはすでに全員そろっていた。しかし場にいささか不穏な空気が生じている。

「みなさん、どうかされたのですか？」

ぴりぴりとした雰囲気きんぎの中心にいるのはキルシュと、あの勇敢な白髪の少女だった。町の住人や騎士たちは、

復興作業に追われてあわただしく走りまわっている。

「アローンと聞いたな。お前の魔剣について説明してもらおう」

キルシュは難詰なんきつした。「お前がその魔剣で死大腐マーダーをほふったことは聞いている。なにをした。どういう力で死大腐マーダーをたおした」

「……」アローンは、二十センチ以上高いキルシュの顔を、真正面から見返した。なにも口にしな。ほんの少しの情報も与えてはならない。彼らがかの英雄アルルクーパーティーであることに気づいてから、アローンはかたくなに態度を硬化させていた。

「なぜなににも言わない？ やましいことでもあるのか」

キルシュの口調がいつそう強まると、アルルクルがあわてて割ってはいった。

「ちよ、ちよつと待ってよ、ちよつと落ちついて。ね？」  
アルルクルは少女をかばうように両手を大の字に広げた。少女に無防備な背中をさらしている。少女が脅威であるとは微塵みじんも考えていない。

「そんな尋問みたいな聞き方したらだめだよ」

「しかし」

「キルシュ自身がいつも言ってるじゃない。魔剣持ちは可能なかぎりその能力を隠したいし、隠しておくものだから」

アルルクルは誠意をこめて、訴えた。

「キルシュはいま、自分がされていやなことをアローンに強要しようとしてるんだよ。そんなのキルシュらしくない。……そうでしょう、師匠」

かつての呼び方をされて頭を冷やしたのか、キルシュは小さく息を吐き緊張を解いた。

「たしかに、そうだな……。たたかいで気が立っていたようだ」

そう言って、少女に腰を折った。

「このとおりだ。非礼をわびよう」

「……謝ったって能力は教えないわよ」

アローンはようやく口をきいた。警戒をしつつも、この場で正体を見抜かれてなぶり殺しにされることはどう

やらないらしい、と推察がついたからだ。酒場で聞いた英雄譚では、『英雄には魔人の気配を感じとる特殊な力がある』と謳うたわれていたが……あれは物語用の脚色か眉唾まゆつばだったのだろうか。きつとそうだ。そうでなければ魔人を前にして、こんなほほんとしていられるはずがない。

「仲直りできてよかった。アローン、きみはこれからどうするの？」

「え……？」

「よかったらもう少しぼくたちと一緒に行動しない？ 怪け我がは治なったけど、まだなにがあるかわからないし」

「あつと、ごめんなさい、わたしには連れが……」

咄嗟とつさに言ったら、ウィズの顔が頭に浮かんだ。頭に浮

かんだら、腹立たしさがよみがえってきた。

「連れッて、もしかして恋人才？ すみに置きないわね

エ」

プラリネにからかわれて、むっとほおをふくらませる。

「やめてよ、冗談じゃないわ。あんな……意気い地くなしの

根性なし」

そう、彼は意気地なしの根性なしだ。けつきよく加勢に  
来てくれなかつたし、いつたいでなにをしているのか。まさか宿にこもつてふるえているのだろうか。一方的なむかつ腹を覚えていると、誰かがアローンを呼ぶ声  
がした。

「あ、見つけた。お姉ちゃん！」

十に満たないくらいの小さな男の子が、ぱつと顔を明るくして駆けよってくる。アローンは内心で首をかしげた。知らない子だ。

「よかった。もう町を出てハルモニアのほうへ行っちゃったって聞いたから、あわてて追いかけてきたんだ。追いつけてよかった。お兄ちゃんどこ？ 一緒じゃないの？」

ウィズのことを言っているのだろうか。けれど関係性がわからない。彼を探す理由も。

「ぼく、<sup>アンデッド</sup>死腐におそわれているところを、お兄ちゃんに助けてもらったんだ。お兄ちゃんがいなかったら、ぼく

も妹も、死んじやつてた……。あのときはこわくてなにも言えなかつたから、ちゃんとありがとうって言いたくて」

——だからそうならないように動くんだよ。逃げ遅れやパニックになってるやつを安全な場所まで誘導して

——  
「あ……」とアローンは声を出した。逃げてふるえてい  
るなんて、そんなわけがないのに、一瞬本気でそう思っ  
てしまっていた。なんてひどい人間。彼はたたかっ  
た、自分にできるたたかいをしていたのだ。誰かを助け  
るために、身を盾たてにして。

「詳しい事情は知らないけれど、意気地なしの根性なし

「じゃあなかっただみたいねエ？」

プラリネがくつくつと笑って言い、アローンはぎゅつとこぶしをにぎりしめた。強烈な懐旧かいきゆうにかられた。別れて数時間しか経っていないのに、会いたくてたまらなくなつた。

「わたし、もう行くね」英雄たちに告げた。「早く行って追いつかないと。会いたい。わたし、彼に会って謝らなきゃ」

「え、ちよつと待って！」

アルルクルがあわてて声をかけるが、アローンはとまらなかつた。全速力で広場を駆け抜け、大門の向こうへ消えてしまった。

「……行ってしまいましたね。まだ聞きたいことがあったのですが」

ユフィールがあっけにとられた顔で言うのと、隣のプラリネが同意のうなずきをした。

「託宣たくせんのことでしょう？ アタシも、もしかしたら彼女が五人目じゃないかって……」

プラリネはそれ以上言葉を続けるのを憚はばった。ふいにアルルクルが寂しそうな顔をしたからだ。彼はいまでもウィズ・ヴァイスこそが五人目の仲間だと信じているのだらう。もう一年以上消息を絶ったままなのに。

「もしよすがの間柄にあるならば、またどこかで出会うだらう」

キルシュが場をまとめるように言った。それから表情を引きしめて、「それより先に考えねばならないことがある。今回の事件についてだ。死大腐は障門しょうもんから自然発生するものではない。あれは儀式によってのみ生みだされるもの……そうだな？」

水を向けられたユフィールが大きくうなずいた。

「そのとおりです。大量の生贄いけにえを必要とする『血の祭壇の儀式』がどこかでおこなわれたはず。おそらくメンザス地方の……住人が消えた村の件と関係があるのでしよう。けれどそう仮定すると、別の疑問が生じてきます」

「死大腐マードラーはなぜこのアンバンを襲ったのか、だね」  
みながアルルクルに注目した。

「儀式がメンザス地方でおこなわれたのなら、どうしてもメンザスは無事だったんだろう。もし人を襲うためにつくられたのなら、真っ先にメンザスへ向かうはず。距離も近いし、人の数だってアンバンより何倍も多い」  
 「アンバンこにどうしても殺したい誰かがいたか、あるいは——」

魔人。魔人がこの近辺でよみがえったのだとしたら、そこへはせ参じたと説明がつく。しかしアルルクルは魔人を見つけていない。彼の、魔人の気配を見つけたす能力はなんの反応もしめていない。つまり魔人はまだ復活していないか、復活しているとしてもこの近くにはいないことになる。

「ねエ、やっぱり情報を共有したほうがいいんじゃないかしら」

ふとプラリネが言い、みなが彼女のほうを見た。

「情報の共有、ですか」

「それってちよつと前に古代図書館の館長が手紙で教えてくれた、新しい見分け方のこと……だよね？」

アルルクルがうーんとうなり、キルシュが難しい顔をする。

「魔人は少女の姿に化ける能力を有し、ルーン文字が読めない……だな。たしかに有益な情報とは思うが」

「わたくしは賛成できかねます」ユフィールがめずらしく語気を強めた。「館長がわざわざ伝えてくださったの

ですから、古代魔法文明時代に由来した信憑性しんぴょうせいのあるものなのでしよう。けれど安易に広めれば人々の疑心暗鬼ぎしんあんきを引きおこしかねません」

たとえば王族や領主などの有力者だけに共有をとどめたとしても、その項目にひっかかりそうな少女を片っ端からつるしあげようとする人間が出てこないともかぎらない。もしそうなれば待っているのは凄惨せいさんな魔女狩り。少なくとも情報の信憑性が完全に証明されるまでは、秘匿ひとくするのが賢明たいはいだろう。

「『退廃』たいはいのときは怪物の姿で暴れまわっていたからすぐに見つかったが、もし本当に人に化ける特性があるのなら、長いたたかいはなになりそうだ」

「でも絶対に見つける。ぼくたちで探しだすんだ。大きな犠牲が出る前に……絶対に」

太陽が稜線りょうせんの向こうに沈み、空が夕闇に移りかわろうとしている。アルルクルの決意の言葉を聞いて、三人の女たちは「彼が望めば必ず実現するだろう」と力強く思っ

× × ×

アローンは大門を出ていくらも進まぬうちに反転して、町の中へ引きかえした。いきおいこんで出ていったはいいものの、ハルモニアへの行き方がわからなかったのだ。

あの宿の男の子に道を教えてもらおうと思い、彼を探した。街路を小走りに駆けていると、途中で何度か小さな咳が出た。宿の近くまで戻って行って、ようやく男の子を見つけた。大人たちと一緒にがれきの除去をしていたので声をかけて、道順をたずねた。思った以上にまどろっこしかつたため、男の子は羊皮紙に地図を描いてよこしてくれた。アローンは礼を言っけて受けとり、その場をあとにした。

それからすぐ——ほとんどアローンと入れちがいに、ユフィールが宿の前をとおりがかった。生存者の搜索をしていた彼女は、あらと首をかしげて通りの向こうに消

えるアローンの背中を眺めた。とつくに町を出たはずなのにどうしてまだここにいるのかしらと不思議に思っている、宿の男の子がたたと走ってきて、手柄話のよ  
うに胸をはって彼女に告げた。

「司教様。ぼくがお姉ちゃんに、ハルモニアへの行き方を教えてあげたんです」

「ああ、なるほど。道がわからず引きかえしてこられたのですね」

「はい。ハルモニアはここから近いけど、途中でいくつか分かれ道があつて迷いやすいから、絵を描きました」  
ユフィールはにこりと微笑み、彼の頭をやさしくなでた。

「それはよいおこないをしましたたね」

「命の恩人のお姉ちゃんなんだから当然です」

「絵というのは、地図のことですか」

「あ、そうですね、絵じゃなくて地図。最初は分かれ道のことだけ書いて渡そうとしたんですけど、お姉ちゃんルーン文字が読めないみたいだったから、絵……地図にしたんです」

瞬間、ユフィールの手がぴたりと止まった。

「ルーン文字が、読めない……？」

「はい、うちの宿でずっと文字の練習してたって。めずらしいお客さんだってお父さん言ってました。でもあんまり上達しなかったみたい」

## 第七章 定めの因果

コーズ大陸北方随一の街ハルモニアは、地域一帯をしてハルモニア地方と呼ばれるだけあって、一日ではとてもまわりきれないほどの広さをほこっていた。

領主特区、商業区、工業区、居住区と街が大きく四つに分かれており、それぞれが独立発展しているためすべての区画に宿場やたまり場があり、やみくもに人探しするのは砂漠で砂粒を探し出すようなものだった。じつさい一日中走りまわっても彼を見つけないことはできなかつ

た。見つかるまで何日だって探したかったが、時間が経つごとに加速度的に体調がくずれていった。夕方前に早くも限界を迎え、搜索は中断せざるをえなくなつた。咳せきこみながら商業区の宿へ引きかえす途中、札揚ふだあげ所じよなるものの存在を小耳にはさんだので、わらにもすがる思いで緑化広場へ立ちよつた。

「ああ、伝言を残したいのかい？　ならあれを使いな」  
店番らしき男に声をかけると、男はうちっぱなしの分厚い木板を指さした。木目があらく頑丈そうな木板には、何十枚もの羊皮紙ようひしがはりつけられていた。たくさんルーン文字が一度に視界に入ったので、反射的に顔をそらす。極力そちらを見ないよう意識しつつ、羽ペンをにぎ

ってメッセージを書きはじめた。

「なんだそれ、記号？　暗号？　ボクシウ語だつて？  
初耳だなあ」

自分が泊まっている宿の名前と部屋番号も記し、男に  
手渡す。

「あいよ、じゃあはっておくから。金？　いらないよ、  
札揚げは領主様が設置した、いわゆる公共サービスって  
やつだからな。それよりだいじょうぶかい、お嬢ちゃん。  
顔色があまりよくないし……」

男が心配そうにのぞきこんで言った。

「目が充血して真まっ赤かだぞ」

× × ×

たぶん、こうなるだろうとは思っていた。

ハルモニア工業区の傭兵ギルドをあとにしたウィズは、  
寒冷な風のふきすさぶ街路を歩きながら、先途せんどに頭を悩  
ませる。

仕事が見つからない。ケイアスの仕事を手伝って得た  
金は、馬車代でほとんど消えてしまった。布袋には  
もう何枚かの銀貨が残っているだけだ。けれど新参者で  
独り者の傭兵がふらとおとずれても、ギルドの感触はす  
こぶる悪い。雇用条件や金払いのいい仕事は地元の傭兵  
にまわされてしまっている。もちろん、あやしさに目を

つむれば仕事自体はあるが、傭兵稼業はどこまでも自己責任。悪意ある依頼主にからめとられても、危機管理能力を疑われておわるだけ。ウィズはひいき目に見て、傭兵としての実力は中の下程度なので、ツテをたどって安全性を担保しなければ、不透明な依頼を受けるのは難しかった。

（そもそもハルモニアにとどまる理由がないんだけどな）

仕事がほしいなら、懇意にしているフィンギルドあたりへさっさと帰ればいいのだ。なのにもう二日この北の街に滞在している。それがどうしようもなく未練がましく思えて、いつそう気分が沈んだ。

（……戻るか。フィンじゃなくても、ひとまずメンザスまで）

それがいい、と思った。ケイアスとパミラ司祭の無事を確認したかったし、南の生まれなのでやはり厳冬はつらいものがある。護衛つきの辻馬車つじに乗る余裕はないから徒歩か、安価な乗り合いになるが、一向にかまわなかった。

工業区の宿に戻ると早々荷物をまとめ、日が高いうちにチェックアウトした。区画をつなぐはね橋をとおつて、商業区へ渡る。往来おうらいを歩いていると、空に瑞花ずいかの結晶がちらつきはじめた。ウィズはフードをまぶかにかぶつて、足を早めた。

露店の並ぶ大通りを抜け、目的の大門が視界に入ったとき、壁柱にふと、見覚えのある影を見つけた。舞い散る雪の向こうにたたずむ、おだやかな顔立ちの青年を。

「……アル」

ウィズは呼吸をとめ、目を見ひらいた。紺碧こんぺきの軽鎧けいがい、銀のバックル、魔力を帯びた白色の外套がいたう、そして背に、聖ルーンよりたまわりし光の騎士剣……。

「え……ウィズ……なの？」

向こうも気づいたようだ。はっとおどろきの表情をしたあと、壁柱から離れ、ゆっくりと歩みよってきた。見えないへだたりをうめるように、ゆっくりと。

そうして二人は互いに向かい合った。アルルクル・デ

イーンとウィズ・ヴァイス。じつに一年半ぶりの再会だった。レイヴロウ大陸の砂丘で盗賊に襲われて、ウィズだけが<sup>けが</sup>大怪我をおったあのとき——ユフィールに足の治療をしてもらったあと、なにも告げず姿を消した——あのとき以来の。

「……まさかこんなところで会うなんて。げ、元気だった、ウィズ？」

最初に声をかけたのはアルルクルだった。ウィズがぎこちなく首をめぐらせてからうなずくと、アルルクルは<sup>はが</sup>破顔して喜びをあらわにした。

「そう、よかった。ずっと心配してたから……本当によかった」

そうやって少女みたいに愛らしい笑顔を、ウィズに向けた。月日を経てもまるで変わらない、あのころのままの無垢な温顔むく おんがん。きちんと意識していないと、なにもかもをなかつたことにして飛びついてしまいたいそうになるほどの——

「たくさん、話したいことがあるんだ、たくさん聞いてほしいことが。そ、そうだ、ウィズはどっつしてこの街に？」

「……傭兵仕事のいつかんだよ」

顔をそむけ、目線だけを幼なじみの英雄に向ける。

「傭兵？ ウィズはいま傭兵をしてるの？ どんな

——」

「それより、お前は どうしてこんなところにいるんだ」

「あ……うん、ぼくは……ま、魔人を追っで……」

「魔人……」「ウィズは背筋をかたくした。「この近くに、いるのか……？」」

「近くというか……街の中に」

「街の中!？」

「だ、断言はできないんだ、その可能性があるっていうだけで」

「可能性……」

どうにも要領を得ない。眉根まゆねを寄せると、アルルクルが疑問に先まわりした。

「ウィズの言いたいことはわかるよ、どうして仮定の話

ばかりなんだってことですよ。その……最近わかったことなんだけど、魔人には人に化ける力があるらしくて……そのあいだは魔性が消えて探知できないうまいなんだ」

はじめて聞く情報だった。

「人に化けて潜伏……してるのか。やつかいだな……」  
「潜伏してるって決まったわけじゃないけど……」  
「お前がこうして動いてるんだ。当たりはついてるんだろ」

「……うん。でも魔性をまったく感じなかったし、外見も完全に普通の……人間の女の子だったから……」  
アルルクルの歯切れが悪い理由がわかった。少女に化

けることで油断や同情をさそうつもりなら、たしかに今代英雄にはすこぶる有効な手段だろう。

「魔性を感じないなら、どうしてそいつかもしれないと思っただんだ？」

「それは……」

アルルクルは下を向いて言いよどんだ。

「別に無理に聞きだすつもりはないが」

「あ、ううん、ちがう、隠したいわけじゃなくて、その、□にしたら決めつけるみたいになりそうで……だつてその子を疑う理由、ルーン文字が読めないってことだけだから」

ウィズは雷にうたれた。とてつもない衝撃が頭のとてつ

ぺんからつま先までをつらぬき、しばらく息をするのも  
忘れた。英雄に憂慮ゆうりよの眼差しまなざしを向けられて、ようやくい  
くらか我を取りもどした。それでもオウム返しに聞きか  
えさずにはいられなかった。

「ル、ルーン文字が、読めない、つて……？」

「うん。古代魔法文明時代の魔人跋扈ばっこでは、そういう性  
質があつたらしくて」

「な、なあ……アル、お前の口ぶりだと、その魔人、お  
前の……顔見知りなんじゃないか？」

アルルクルが肩をいからせ、あからさまに動揺した。  
どうか否定してくれと神に願いながら、ウィズはたずね  
た。

「もしかして、アンバンでお前たちと一緒にいた、白い髪……」

アルルクルは一瞬ためらってから、力なく首を縦に動かした。

「……その子だよ」

ウィズは呪<sup>のろ</sup>った。心の中で呪いの言葉を吐きだした。誰に対し、なにに向けてかわからないまま、あらんかぎりの罵詈雑言<sup>ばりぞうごん</sup>を吐きだした。

「ウィズがアンバンの事件を知ってるなら、話は早いね……。アローンっていう女の子なんだけど、彼女、町を守るためにたったひとりで死<sup>マ</sup>大腐<sup>ーダ</sup>に立ちむかってたんだ。ぼくは彼女に勇気と正義の心を感じた。とても悪人には

見えなかった。もちろん世界をほろぼす魔人にも……」  
見えない、とアルルクルは言った。

「だから、どうかぼくたちの勘違いであってほしいって、  
そう思ってる」

「なんでっ！」

ウィズは自分の怒鳴り声に自分でおどろき、冷静にな  
るべく瞑目めいもくした。それからかすかにまなこをひらき、つ  
とめて平板をよそおって言った。

「……な、なんで、いったん解放しちまったんだ。魔人  
かもしれないっていうなら、アンバンで拘束すべきだつ  
たんじゃないか」

「……そのときは、アローンがルーン文字が読めないこ

とを知らなかつたから」

まだ信じられなかつた。半分、夢の中にいるような気がしていた。残りの半分は薄情にも、冷静に現実をとらえはじめている。

「それにちゃんと話をする前にハルモニアへ行っちゃつたんだ。誰のことかわからないけど、喧嘩けんかしちやつた連れの人に謝りたいって言って……」

ウィズは、英雄の中にとまどいを見た。彼は人間然としたアローンに疑いの目を向けることに、迷いを感じている。

「ねえ、ウィズ。一緒に、手伝ってくれないかな」  
アルルクルの両手が、自分の手をつつみこんだ。想像

以上にやわらかく、あたたかなぬくもりが手のひらをと  
おして伝わってくる。

「ぼくたちの穴を、埋めてほしいんだ。ウィズにしかで  
きないことで……ウィズの観察力とか注意深さとか落ち  
つきとか、ぼくたちにはない力を、貸してほしい」

ウィズは胸にこみあげるものを感じた。まだだ。この  
親友はまだ自分に期待してくれている。英雄の仲間に戻  
れると信じてくれている。ともに魔人を見つけだして功  
績をあげればそうできると本気で考えている。

「……ありがとう」

だからこそウィズは、手をにぎりかえしてはならなか  
った。そっと身を引いて距離を取り、ゆっくりと背を向

ける。

「それと、ごめん」

彼に背を向けたまま、心のつかえを吐きだした。

「勝手にいなくなっちゃって」

「そんな……ぼくは気にしてないよ。それより……  
ううん、もし後悔してるっていうなら、それこそ一緒に  
ぼくたちと——」

「魔人」

「え……」

「魔人がいるかもしれないなら、当然他の三人もここへ  
来てるんだよな？」

アルルクルは、ウィズの背中を見つめながら首を横に

ふった。

「いまハルモニアにいるのはぼくとき……師匠、だけだよ。ユフィールにはまだアンバンで神官としての仕事が残ってるし、プラリネもあつちで死大腐<sup>マーダー</sup>の残骸を調べてる」

「そうか。二人だけできちんとこの広い街を監視できるのか？ 魔人を逃がしちまわないか」

「街中での動向までは追えないけど、師匠が北を、ぼくがこうして南の大門を見張ってるから、実質封鎖してるも同然だと思う。魔性はたどれなくても彼女のおいや気配は覚えてるから、目の届く範囲まで近づいてきたら絶対に見逃さない」

アルルクルは請うような口調で、続けた。

「でもユフィールたちが合流するまでは、積極的に街中へ探しにいけない。だから……ね、ウィズ、ウィズも協力してくれたら、もつと——」

「俺は手伝えないよ、アル。他にやらなくちゃいけないことがあるんだ」

「で、でも……」

ウィズはそれ以上なにも答えず、英雄のもとから歩み去った。あまりにも堂々と、なんの頓着とんちやくもなく歩きだしたので、アルルクルはあつけにとられて、二の句を失った。

「ウィズ……どうして」

彼の姿が消えたあと——徒然<sup>つれづれ</sup>とかかげたアルルクルの  
右手が、むなしく空をなでた。

× × ×

半日、動けなかった。

ベッドの上でうずくまり、ひたすら痛みと恐怖に耐えていた。

部屋のドアは嚴重に鍵<sup>かぎ</sup>をかけ、窓は分厚いカーテンでおおった。それでも隙間からわずかに陽光がさしこんで、薄暗い室内に光の柱をかたちづくっていた。光柱はルーン教において救済の象徴。けれど、そこへ手をかざして

も、アローン・ナグルファリが呪縛の運命から解きはな  
たれることは、けっしてなかった。

体温機能はとつくに喪失し、暑さも寒さも感じないの  
に、なにかでからだをつつみこまずにはいられなかつ  
た。かけぶとんは血でよごしてしまったので、シーツに  
くるまった。しばらくそうしていたが、やがて脅迫じみ  
た寂<sup>せき</sup>寞<sup>ぼく</sup>にかられ、ベッドから転がり落ちる。苦しみに身  
もだえししながらも、へりを支えによるよると立ちあがり、  
洋服かけから白いガウンを取りあげた。ガウンを肩から  
はおり、部屋の隅で、からだをまるめてひざをかかえる。  
首もとが、さみしい。マフラーをなくしてしまったのは  
悔やんでも悔やみきれない痛<sup>つう</sup>恨<sup>こん</sup>事<sup>じ</sup>だった。せっかく買っ

てもらったのに、あんなに大事に思っていたのに、どうしてなくしたことに気づけなかつたのだらう。強烈な自己嫌悪がアローンの心をさいなんだ。

しよせん自分本位。わたしは彼をていよく利用していただけ。肝心なことにはなにも伝えず、やさしさにつけこみ、何度も命を危険にさらして、あげくもつともふれられたくないだろう心の傷をえぐり罵倒ばとうした。最低だ。

暗い反芻はんすうにふけつていると、唐突にのどの乾きを覚えた。床を這ってテーブルまで行き、ふるえる両手でコップをつかみ、なまぬるい白湯さゆを一気にのみほした。

「……ごほ、ごほごほっ」

咳せきこみ、のんだものをすべて吐きだしてしまった。胃

が受けつけない。乾きが癒<sup>い</sup>えない。水ではだめだ。じゃあなにを……？ 頭の中に真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>にしたたる液体が浮かんだ。

「ちがう、わたしは、そんなもの……」  
手の中のコップが、ぱりんと音を立てて砕けた。つかが入り、にぎりつぶしてしまった。ガラスの破片が手のひらにささり、傷口から新鮮な血液が流れでている。アローンは舌でそれをなめとった。しゃぶりついて、のどを鳴らしてすすりあげた。

「ちがつ……ちがう！」  
ぎよつとして、あわててシートで口と手をぬぐった。まっしろな白地が赤に染まりゆく様を見つめ、選択をま

ちがえたのだろうか、と思った。寄り道などせず、まっさきに母のもとへ帰るべきだったのだろうか。そうすれば少なくとも目的は果たせたかもしれない。

けれど、それが正しいと結論づけたくはなかった。ウィズとの出会いを、ウィズとの会話を、ウィズとの食事を、ウィズとの冒険を……時間の無駄だったなんて、思いたくはなかったから。

ざわり、と両腕が鳥肌立つ感覚にみまわれた。おそろおそろガウンをめくってみると腕——肩口から手首にかけてびっしりと、呪詛じゆその文様が浮かびあがっていた。呪いの呪文。悪魔の証しるし。変わろうとしている。内側から浸食してくる。人から異なるものへ。

顔をそむけたら、割れたガラスに映る誰かと目が合った。まなこが爬虫類はちゆうるいみたいに縦に裂け、眼球が深紅に染まった。まごうことなき化け物と。

「ひっ……」

もういやだ。もう耐えられない。精神がこわれてしまふ。わたしより先にわたしと同じ目にあつたエレオノーラはどうしたのだらう。こんな苦しみを、こんな孤独を、いざなう闇を、いつたいどうやって耐えしのんでいたというのだ。

——あたしはこの力を使って、世界に復讐してやるわ。あたしたちを助けなかつた聖ルーンも、ルーンを妄信する信者たちもゆるさない。

ああそうか。アローンはぴたりと動くのをやめて、そつと天井を見あげた。楽になれるなら、運命にしたがつて——助からない、わたしはどうせもう助からない——この、腹の奥底からわきあがる黒い衝動に身をまかせれば……。

とん、とん。少女を現実に戻したのは、ドアをたたくノックの音だった。

はっとして息を殺し、ドアを注視する。いったい誰が……見当がつかなかった。英雄たちには正体がばれなかった。かたし、もし襲撃なら律儀にノックなどするはずがない。なら宿の関係者？ けれど宿泊費は数日分前払いで渡してあるし、掃除を断るプレートも表にかかっている。

「アローン」

聞き慣れた声が耳を打ち、少女の——瞬膜しゅんまくがあいた深紅しんくのまなこから、涙のつゆがこぼれでた。

「札揚げ所のメモを見てきた。お前が書いたボクシウ語のメモだ」

ぽろりぽろりとあふれでた。あふれでてとまらない。涙のしずくが乾いたほおをつたい、あごにたまつて足もとに落ちる。

「いるんだろう。あけてくれ」

気づけばアローンは両ひざをつき、胸の前で両手を重ね合わせていた。聖ルーンへの祈りではない。ただ感謝を示したかった。黒い衝動から引き戻してくれたことに、

最後に彼の声を聞かせてくれたことに……そういう運命の導きにたずさわったあらゆるものに。

「アローン、お前を迎えに——」

「帰って！」

祈りの姿勢をといたアローンは、拒絶の大音声を発した。声がふるえてしまわないよう、くちびるを強くかみしめながら。

「いますぐ帰って！ あなた、どの面さ<sup>つら</sup>げてここへやって来たの」

さみしい。

「アンバンでわたしのことを見捨てたくせに！」  
こわい。

「わたし、あの巨人に殺されそうになったのよ！ どうして助けに来なかったの、この薄情者！」  
たすけて。

「でもね、わたしは死なずに済んだ。助けてくれた人がいたから。誰だと思う？」

これ以上かかわらせてはいけない。

「アルルクルよ、英雄アルルクル・ディーン！」

魔人をかくまっただなどという汚名を彼に着せてはならない。

「アルルクルが巨人をたおして、わたしを救いだしてくれたの。かつこうよかったわ、強かった、あなたなんかとは比べようもないくらい！」

やさしくしてくれて、ありがとう。

「わたし彼の仲間になったの。ボクシウ語のメモであな  
たを呼びだしたのはね、メモを見てのこのこやってきた  
あなたをみんなで笑いものにしてやろうと思ったからよ、  
でもだめ」

あんなにひどいことを言ったのに迎えに来てくれて、  
ありがとう。

「あなたの声を聞いたらいらいらして、もうそれどころ  
じゃないわ、だからいますぐ消えて！ 消えていなくな  
って。ウィズなんか」

大好きだよ。

「だいぎらいー！」

だから。

「さっさと消えて、二度とわたしの前に姿を見せないで！」

さようなら。

「……」

罵詈<sup>ばり</sup>を言い尽くすと、あてこすりじみた咳が聞こえてしまわないよう、まるめたシーツを□の中へむりやりおしこんだ。戸板のきしむ音がゆっくり遠ざかっていき、やがてドアの向こうの気配が完全に消えてなくなった。アローンは泣いた。シーツを□にふくんだままむせび泣いた。それからあとはまるくなつて、すべての光と音がとだえるまで、ひたすら耐え続けた。

サイン本が当たる!!  
レビュー・キャンペーン  
実施中

Twitterでハッシュタグ「#GTF」を付けて、試読版の感想をツイートしてください。

抽選で10名の方に、著者・西乃リョウ先生、イラスト・藤ちよこ先生のサイン本をプレゼントいたします。

対象はハッシュタグ「#GTF」がついたツイートのみとなりますのでご注意ください。

応募期間は2018年1月30日までとなります。